

鹿兒島県史料

旧記雑録追録

六

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「薩藩舊記雜錄」を底本とし、そのうち追録卷百二十一から卷百四十一までを収めて、「鹿兒島県史料 旧記雜錄 追録 六」として継続刊行するものである。年代は寶曆十四年一月から寛政元年十二月までの二十六年間である。

一文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。また卷末に文書・記事目録を掲げた。

一文書、または記事が数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ 文書の所在などを示す原注は、一字下げて首部に付した。

ロ 猶々書は、二字下げにし、その位置は底本どおりにした。

ハ 文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

ニ 附(付記)、但(但し書)は一字下げにし、改行した。

ホ 文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。

ヘ 書状は、底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「〆」に統一し、包紙への注記は底本にならった。

ト 花押は(花押 No. x)と番号を付し、適宜人名を傍注するほか、卷末に花押集を掲げた。

一漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意体裁をそこなわないものは一部当用漢字新字体を使用した。

一異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尔(爾) 早(畢) 吳(異) 玠(珍) 弥(彌)

一特殊文字としては、次の字だけを残した。

ノ(しめ) ㇿ(より) ろ(まいる) く・ま(くりかえし) ㇿ(候)

一変体仮名などは、普通の平仮名に改めたが、こ、考、表、五、はだけはそのまま残した。

一人名・地名および難解な語句などには、適宜傍注を付した。地名は旧薩藩領域外は国名のみ、また領域内は現在(昭和四十九年四月一日)の郡・市名で表わした。

但し、国・市の字はこれを省略した。

一原注には括弧を付さず、新たに注を付す場合には、()で囲んで原注と区別した。

一欠所部の原注、本マ、欠、スリキレなどは、その部分を□で囲み、本マ、欠、スリキレなどと傍注した。

一文意の通じない字、またはその箇所は□で囲み、(ママ)、(〇〇カ)と傍注を付した。

一挿入、付紙、押札などは、右肩に(挿入)、(付紙)などと傍注し、他とまぎらわしい場合には「」で囲んだ。

一朱書部分は(朱)と頭注し、その箇所を「」で囲んだ。

一島津氏世録正統系図(東京大学史料編纂所蔵本)より補った箇所は△で囲んだ。

一行間の書き込みは、底本の体裁にあわせて、書き込みの内容が底本に齟齬しない場合は、その位置を示し、関連箇所

の文末にまとめた。

一文書の行間に朱書された返書は、差出・宛所の関係を示す「上」「下」の位置は底本の体裁どおりとした。

一 闕字・平出などは、原則として底本の体裁に従った。

一 漢文は、返り点・送り仮名などは不統一に用いられているが、なるべく底本どおりとした。

一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

同性・(同姓) 陳・(陣) 蜜・(密) 次使者・(継使者) 諛方・(諛訪) 麿・(鹿兒) 船・(船) 相摸・(相模)
訴詔・(訴訟) 飛彈・(飛驒) 大守・(太守) 太輔・(大輔) 諸司代・(所司代)

舊記雜錄 追録六 目次

題字
鹿兒島県知事
金丸三郎

例言 一
目次 四

卷一二一	寶曆一四年	一月一	明和	元年二月	(重豪公)	一
卷一二二	明和二年	一月一	同	三年三月	(重豪公)	四七
卷一二三	明和三年	四月一	同	四年九月	(重豪公)	一二九
卷一二四	明和四年	閏九月一	同	六年六月	(重豪公)	一七三
卷一二五	明和六年	七月一	同	七年六月	(重豪公)	二一九
卷一二六	明和七年	閏六月一	同	八年二月	(重豪公)	二六四
卷一二七	明和九年	一月一	安永	二年閏三月	(重豪公)	三一〇
卷一二八	安永二年	四月	一二月	(重豪公)	三六六
卷一二九	安永二年	二月一	同	四年二月	(重豪公)	四〇八
卷一三〇	安永四年	三月一	同	五年三月	(重豪公)	四五一
卷一三一	安永五年	四月一	同	六年九月	(重豪公)	四九四
卷一三二	安永六年	一月一	同	八年九月	(重豪公)	五三五
卷一三三	安永八年	一月一	天明	元年三月	(重豪公)	五七七
卷一三四	天明元年	四月一	同	二年四月	(重豪公)	六一六

卷一三五	天明 二年	五月—同	三年—二月	(重豪公・齊宣公)	六六三
卷一三六	天明 四年	一月—	—一〇月	(重豪公・齊宣公)	七一六
卷一三七	天明 四年	一月—同	五年 六月	(重豪公・齊宣公)	七六八
卷一三八	天明 五年	七月—同	六年 六月	(重豪公・齊宣公)	八一七
卷一三九	天明 六年	七月—同	七年 一月	(重豪公・齊宣公)	八六五
卷一四〇	天明 七年	一月—	八月	(重豪公・齊宣公)	九二六
卷一四一	天明 七年	八月—寛政	元年—二月	(重豪公・齊宣公)	九九四

花押集	一〇五五
-----	-------	------

文書・記事目録	一〇五九
---------	-------	------

(表紙)

重豪公

自寶曆十四年正月
至明和元年十二月

追舊記雜錄 卷百廿一

(原寸縦二四三センチ 横一六七センチ)

1 「近秘野艸」

寶曆十四年甲申正月元日 公束帶調于五社、公襲封始受賀正故也、二日規式、三日臨于外朝受賀、竣臨書院及座間皆如例、北鄉權五郎久(馬力)爲年男、薄暮復臨外朝所謂御松囃子也、二十七日慈照夫人登柳營調 大家公家治及御臺 儲君 萬壽君等賀正且也、恩賚有差、二月、先是公將命 公秋以琉人朝于江戶、然有寒疾故、具疏請乘春暖先已朝如琉人追使家臣等偕候秋來朝、閤老許之、於是十三日 公先首途如例、舊臘 大家使閤老檄 公驛致賜

2

重豪公御譜中

鶴亦鷹所捉也、至是十五日 公迎外朝拜其賜、乃遣島津(吉良男、貴盛)玄蕃如江戶謝恩、十八日放鷹谷山、十九日臨于尾畔、兩王子等趨召陪焉、此日罷名越左源太目附、有過失也、二十七日宴嶺松君爲催散樂親舞加茂、二十八日訪西田館也、三月九日謁華尾廟、二十一日訪山下築地告別也、二十二日發府城、此行亦途或放鷹、二十六日發出水途謁嘉志久利、四月二十四日抵大坂邸、二十七日抵伏見邸、此月二十九日家老鎌田藏人卒、五月十三日至芝邸、二十二日慈昭夫人及悟姬君燕于御休息所、岡元可助侍奏瑤琴命也、

寶曆十四年甲申春正月朔日束帶、晨參詣五社、儀粧清肅、遂詣護摩所暨看經所、而還於休息所成規式、既而更服熨斗目出座於書院、乃受二歲首式式三、家老座著若年寄大目附禮各持參太刀賀新年、咸與杯、畢轉座于座之間、一門皆進備太刀披賀二歲旦、亦各與杯、是日乘馬初、三日一所領地之輩於對面所持參太刀座著亦與杯、既諸地頭等持參太刀與流酒茲云御流酒、寶統之後受其正朔之禮、今歲始受焉、若在府之年則一所領知之臣、其酒子及大目附以上者於江府使人代于己、各進備太刀、其餘諸地頭等則於國就首納太刀也畢

見_二寄合・寄合並之族・其嫡子季子・諸有司・府下士及

三町年寄等_二焉、又同日有_レ執_二謁於書院_一者、此稱_二内座

配_一、皆進_二備太刀_一、則各與_レ杯持參太刀着座、唯大、及暮有_二鳥・義岡而家無着座

譚初之儀、於_レ茲復出_二座於對面所_一、四日觀_二飼鷹_一矣、

自_二今日_一而後見_二諸山門首・僧徒・神職及在館琉人等_一、

九日詣_二護摩所_一、大乘院住持進_二備一束壹本執_レ謁、乃

奉_二饌吸物及茗飲菓子_一、十日詣_二南泉院_一 御牌殿及淨光

明寺・福昌寺各廟、十一日吉書始、十三日花尾山參詣_參、

十七日東帶登_二大雄山_一拜_二

東照宮_一、獻_二備御太刀・銀馬代_一焉、皆是歲首舊規今學_二

其太略_一焉、以往效_レ焉此他如四首頭、規式姑舍焉、

3 正文在文庫

吉書

長生殿裏春秋留不老門前日月遲

君か代ハ千世にやちよにさゝれ石の

巖となりて苔のむすまで

寶曆十四年正月元日 重豪御判

包紙、白木御文書五番箱入
申正月四日嶋津矢柄より市來瀬兵衛へ被相渡納置外事

4 重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露_レ處一段之御

仕合_レ、恐_レ謹言、

(未) 寶曆十四年 正月七日

松平薩摩守殿

(鳥津重豪)

5 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露_レ處一段之御

仕合_レ、恐_レ謹言、

(未) 寶曆十四年 正月七日

松平薩摩守殿

6 重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

寶曆十四年正月十一日 重豪御判

7 重豪公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達_レ、

(德川家治)公方様 (家基)若君様

又御鷹之鶴拜領_レ條、以宿次差越_レ、恐_レ謹言、

(采)「寶曆十四年」正月十六日

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

8 寫正文在家老座

此狀箱并鶴壹、從江戶至薩摩國鹿兒嶋松平薩摩守所_レ相
届、返札可來_レ間、於江戶月番之老中_レ急度可持參者也、

申正月十六日

(松平輝高)右京印

右宿中

9 全御譜中

寶曆十四年甲申正月十六日

大樹家治公以_レ宿次奉書_レ賜_レ貴鷹所_レ捉之鶴一隻、老中

松平右京大夫輝高召_レ家臣佐久間新左衛門村央、屬_レ鶴

及奉書_レ宿次證文、以故使_レ家臣鮫島次左衛門員良、中

村喜八兵衛盛備_士二人足輕六人爲_レ之宰領、即夜發_レ芝第一、

行勿々經_レ歷東海_レ山陽_レ西海之三道、同二月十五日到_レ

著曉城、即迎_レ於對面所_レ拜_レ其賜_レ焉、即日使_レ馬廻調所

八左衛門恒堅_・新番掛橋五百右衛門輝置_{附足輕六人}齋_レ拜復之

書、返_レ其宿繼證文、同日又令_レ島津玄蕃貴澄爲_レ謝恩

使_レ副_レ書翰_レ赴_レ江府、恒堅_・輝置先_レ貴澄、三月十四

日著_レ江府、即日候_レ輝高之邸、呈_レ書復_レ其證文、貴

澄亦四月三日到_レ著芝之邸、同六日詣_レ老中松平右近將監

武元之邸、演_レ之旨_レ呈_レ其書、於_レ其餘老中_・若年寄之

邸、亦各往展_レ其旨、輪_レ書者如_レ先格、二十八日應_レ

徵登_レ營、於_レ白書院_レ備_レ二種雙樽、以_レ其禮使_レ也見_レ

於

家治公_・松平和泉守乘佑奏_レ達之、而退重出席_・已獻物_一

御太刀銀燭代紗綾_二卷_一、復拜_二台顏_一土井大炊頭利里執奏焉、訖而登_二

西營、於_二檜之間_一又以_二其禮使_一捧_二同品獻物_一、調_二松平

周防守康福、而退重進、席就_二奏者戶田采女正氏英_一上_二已獻物_一、御太刀、銀馬代拜額而退出、即詣_二老中及板倉佐渡守勝清及若年寄之各邸_一、進_二皇太刀・馬代_一以拜謝焉、五月十一日貴澄再回應_レ教造_二於朝、松平康福出_二席於檜之間、而屬_二其奉書_一、將軍家賜_二卷物于貴澄_一、既而降_レ營由、教如_二康福之宅_一、即亦若君之命旨矣、康福手_二與其奉書_一焉、使節事畢、厥翌十三日發_二江府_一、同年七月九日還_二廳府_一、而復_レ命、

10 重豪公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露_レ之處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(宋)
「寶曆十四年」
正月廿七日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

11 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(宋)
「寶曆十四年」
正月廿七日

松平周防守
康福判

松平右京大夫
輝高判

松平右近將監
武元判

酒井左衛門尉
忠寄判

松平薩摩守殿

12 重豪公御譜中

同月二十八日齋戒親詣_二于府下_一、五社之内稻荷大明神、拜禮畢納_二祝文于寶殿_一、越二月五日興_二行法樂能_一、翼六日復回親詣焉、以_二有_二結願之旨_一也、

(宋)
「別當實持院格護

正文在稻荷社内」

維時寶曆甲申十有四年正月朔癸丑二十有八日庚辰從四位下少將薩摩守源重豪躬率群臣謹詣祠下敢昭告于

稻荷大明神之靈曰上帝不言陰司亭毒之機至神莫測實蕃聰明之德伏以明神之於我邦家降鑒其德荐錫其祉現祥瑞於太祖以創洪業於三州借威靈於相公而建奇勲於八道崇奉

是由百世欽祭祀之典覆載斯均萬民仰感通之靈顧予之多涼
德遭家不造賴 神之貺純緞續緒罔墜眷佑特盛感戴曷極將
於二月初五清道以迎 眞馭掃宮而設 靈座虔備三獻之禮
親奏六章之樂願報 靈德於萬一欲祈永命於千百敬神而遠
之訓固存乎經樂戶以饗之文亦出乎禮區區賤技雖負冒威之
咎斷斷鄙誠將望和光之惠先期謹告

此祝文白木御文書五番箱十一番中入

14

(朱)
「全上」

正文在寶持院」

御筆御額一枚

光明之文字地紺青文字金箔

右者從

太守重豪公、稻荷大明神に被遊 御寄進外條、平日倉抹
之儀無之樣氣を附、住替之節者堅固可次渡り、

寺社奉行

喜入主馬

寶曆十四年申正月廿八日

久福判

町田主計

久連判

別當

寶持院

15

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、如承改年之慶賀珍重り、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意り、隨り

若君様は御樽有被獻之り、遂披露候處一段之御仕合り、

恐々謹言、

(朱)
「寶曆十四年」

二月四日

松平薩摩守殿

松平右近將監

武元判

16

御札令披見り、如承改年之慶賀珍重り、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意り、隨り御樽有被獻之候、各申談

遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

(朱)
「寶曆十四年」

二月四日

松平薩摩守殿

松平周防守

康福判

17

(朱)
「別當寶持院格護

此能組狂言組ノ二通白木御文書五番箱十一番ニ入、兒玉早之丞存トアリ

正文在稻荷社内」

法樂能組

翁

可助

嵐重豪

甚五兵衛
市郎治

彌兵衛
政右衛門

仙兵衛

三番叟

田村重豪

虎齋

喜六郎
喜藤太郎

大之進

羽衣重豪

八郎次

善兵衛
傳兵衛

彌兵衛
政右衛門

安宅重豪

與左衛門

織右衛門
珍阿彌

政右衛門

祝言重豪
弓八幡

長四郎

源五左衛門
良右衛門

貞右衛門
大之進

寶曆十四年甲申二月五日

(采) 一別當實持院格護

正文在稻荷社内

法樂狂言組

麻生

萬次

繩綯
福之神

直右衛門
太郎右衛門

嵐山之間

猿聲

伊兵衛

寶曆十四年甲申二月五日

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
今度

御即位首尾好被遂行外之段被承之、目出度被存由得其意
外、依之被差越使者外、紙面之趣

若君様口及言上外、恐々謹言、

(采) 「寶曆十四年」

二月七日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

今度徳川宮内卿殿婚姻相濟候之段被承之、目出度被存由
得其意(家治弟、重好)、紙面趣

若君様口及言上(采)、恐々謹言、

〔寶曆十四年〕 二月七日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

21

全上

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤(采)、然者
今度徳川宮内卿殿婚姻相濟(采)段被承之、目出度被存由得
其意、紙面趣各申談及 上聞、恐々謹言、

〔寶曆十四年〕 二月七日

松平薩摩守殿

松平周防守
康福判

22

全上

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤(采)、將又
今度

御即位首尾好被遂行段被承之、目出度被存由得其意、

依之被差越使者、紙面之趣各申談及 上聞、恐々謹
言、

〔寶曆十四年〕 二月七日

松平薩摩守殿

松平周防守
康福判

23

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤(采)、將又
舊臘從

公方様寒中爲

御尋、妻女御着拜領之、難有由得其意、紙面趣各一覽
之事、恐々謹言、

〔寶曆十四年〕 二月十五日

松平薩摩守殿

松平周防守
康福判

24

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤(采)、將又從
公方様妻女口寒中爲御尋御着拜領、難有由得其意、紙

面之趣令承知_レ、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆十四年〕 二月十五日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

25 重豪公御譜中

正文在琉球國國司

芳札令披見_レ、我等婚姻相整_レ爲祝儀、豐見城王子被差渡、殊太刀一腰・馬代白銀百兩并目錄之表被相贈之、入念_レ儀令祝着_レ、恐惶不宣、

(朱) 〔寶曆十四年〕 二月十八日 少將重豪御判

謹上 中山王

26 全上

芳札令披見_レ、御肴致拜領_レ爲祝儀、去歲以仲田親方太刀一腰・馬代白銀百兩并別錄之通被相饋之、入念_レ段欣然之至_レ、恐惶不宣、

(朱) 〔寶曆十四年〕 二月十八日 少將重豪御判

謹上 中山王

27 全上

芳翰令披見_レ、若君様御誕生之爲御祝儀、去歲豐見城王子被差越、兩通之紙面、殊別錄之表贈給之、入念_レ段欣然之至_レ、且又江府江獻上物首尾好相濟、如御目錄被下之_レ間可被致頂戴_レ、恐惶不宣、

(朱) 〔寶曆十四年〕 二月十八日 少將重豪御判

謹上 中山王

28 全上

芳墨令披閱_レ、(家治女)萬壽姫君様御誕生之爲御祝儀、去歲玉川王子被差越、兩通之紙面、殊別錄之通贈給之、欣然之至_レ、且又江府江獻上物首尾能相濟、如御目錄被下之_レ間可被致頂戴_レ、恐惶不宣、

(朱) 〔寶曆十四年〕 二月十八日 少將重豪御判

謹上 中山王

29 全上

(德川家重)
惇信院様薨御付、去歲豐見嶺親方被差越、兩通之紙面、

別錄之通被相饋之、入念儀存、恐惶不宣、

(朱)
「寶曆十四年」二月十八日 少將重豪御判

謹上 中山王

30 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

芳翰令披見、伊平屋嶋之者逢逆風五嶋に流着、取計申

付、爲謝禮、去歲以宜野灣親方目錄之表被贈之、入念儀

付、恐惶不宣、

(朱)
「寶曆十四年」二月十八日 御官名御名乘

謹上 中山王

31 扣正文在右筆所

芳翰令披見、其國之船逢難風土州に漂着、取計申付

爲謝禮、去歲以宜野灣親方別錄之表饋給之、過量之至、

恐惶不宣、

(朱)
「寶曆十四年」二月十八日 御官名御名乘

謹上 中山王

32 重豪公御譜中

扣正文在家老座

「就 御代替、中山王御祝儀之使者先規之通、當秋被召

列被遊 御參勤筈、寒濕之御痛被遊御座、冬相成

得老御疝癩被差發、段々御保養被遊、得共す切と不被成

御座付、秋被成御發駕、御寒中相掛、御道中御難儀

之上、於江戸御勤事等萬一御痛被差發、御勤難被遊、

老御殘念被 思召上付、當春御國元 御發駕、琉人老

秋御跡より出立仕、筋御願被仰立、且右使者之儀慶

安・承應之節老御家來被相附差立、儀表有之、然共其

以後右躰之例表無之、琉人之儀先格を專存事、此

節不被召列段老御迷惑被 思召上付、琉人不足之樣

ニ可存、得共、此節之儀老御痛所故難御黙止、御家老相

附被差立、以後之例格ニ老相成間敷段老具致得心付、

琉人ニ可被仰聞置段を被 仰上置、御願之通被

仰出付、來月廿二日被遊 御發駕、琉人老秋御當地可

被差立、右之趣中山王被致承知、分、御願被仰上付

、老、御受御禮を被申上、樣可被致首尾、以上、

(宋) 一寶曆十四年 二月

(高橋種實) 此面
(鳥津久金) 左中

御勝手方

33 (朱) 一^レ處、御願之通被 仰出、來月廿二日被遊 御發駕、

琉人老秋御當地可被差立^レ、右之趣被奉承知可被致首尾^レ、以上、

二月

此面 左中

藏人殿

右朱書之通、藏人殿に直相渡^レ、御勝手方には本文之通直に相渡^レ事、

(本文書ハ三三号文書ノ行間朱書ニシテ、前文ハ二部分ト同文ナリ)

34 全御譜中

正文在樺山權左衛門

加冠

宜爲

寶曆十四申

二月廿八日

御判

七郎

35 白木御文書五番箱十三中

寫

寺社奉行に

一乘院

尊盈

右老末寺智惠光院事、由緒之譯を以 御目見寺被仰付被下度旨被申出趣有之、願之通 御目見寺被仰付^レ、左^レ

の進上物之儀老御茶五袋進上^ニの證文寺^ニ被 仰付^レ、右之通可被申渡旨申渡、首尾係に及可申渡^レ、

(宋) 一寶曆十四年申 二月「廿八日」 此面

右ノ包紙ニ十二

寶曆十四年申二月廿八日取次堀甚左衛門

吉田用右衛門存

36 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又

爲歳暮之御祝儀、從

公方様 御臺様妻女拜領物有之、難有由得其意^レ、紙面

之趣各一覽之事^レ、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」三月二日
酒井左衛門尉
忠寄判

松平薩摩守殿

37
全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
爲歲暮之御祝儀、從

公方様時服并御看拜領、難有由得其意外、紙面之趣及言
上候、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」三月二日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

38
全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
舊臘爲歲暮之御祝儀、時服并御看拜領之、難有由得其意
外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」三月二日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平薩摩守殿

39
全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
爲歲暮之御祝儀、從

公方様 御臺様其方妻女に拜領物有之、難有由得其意外、
紙面趣令承知外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」三月二日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

40
重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈前
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上
聞外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」三月九日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

芳牒披閱、弥勇猛珍重々々、此邊無吳事、抑當秋琉球人被召連可有參府之處、就被痛寒濕、春中其地被發鵞度之旨如企願被蒙 嚴命、珍重思給、速被告知之、丁寧之至也、

(采) 一寶曆十四年 三月九日

(近衛内 equal) (花押)

薩摩少將とのへ

正文在文庫

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又當秋琉球中山王使者召連參府可有之處、寒濕之痛有之、先達の參府之儀願之通被 仰出、難有由得其意、依之爲御禮被差越使者、紙面之趣及言上、恐々謹言、

(采) 一寶曆十四年 三月十五日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又當秋琉球中山王使者召連參府可有之處、寒濕之痛有之、先達の參府之儀願之通被 仰出、難有由得其意、依之爲御禮被差越使者、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

(采) 一寶曆十四年 三月十五日

松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然若君様御誕生付、從琉球中山王以使者薩州迄献上物有之付、以繼使者被差越之、遂披露處、從

公方様 若君様中山王に品々被下之、且又使者豐見城王子に拜領物被 仰付、於其方難有由得其意、紙面之趣各申談及 上聞、恐々謹言、

(采) 一寶曆十四年 三月十六日

松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

(徳川家治女) 萬壽姫君様御誕生御祝儀付、從琉球中山王薩州迄差渡り

使者玉川王子に、從

公方様 萬壽姫君様拜領物被申渡り處、難有由得其意外、

紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(采) 一寶曆十四年

三月十六日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

(の1) 此御奉書ニ

萬壽姫様と有之、君之字落字と相見得り付、其儘ニ難

被差置御吟味有之、跡々少之書違等表立る御沙汰無之

相濟り儀及御座り得共、此節之儀

公義御右筆組頭赤堀平右衛門様(采)ニ御内談可仕旨被仰

付、致參上右之段申上り處、君之字書落ニり間、何卒

御内々ニ相濟り様ニと平右衛門様御頼被成、左之通之

御書付被遣り、

申三月十九日

御右筆

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

萬壽姫君様御誕生付、從琉球中山王以使者薩州迄獻上

物有之付、以繼使者被差越之、遂披露り處、從

公方様 萬壽姫様中山王に品々被下之、且又使者玉川王

子に拜領物被 仰付、於其方難有由得其意外、紙面之趣

各申談及 上聞外、恐々謹言、

(采)

一寶曆十四年

三月十六日

松平右京大夫

輝高判

(の2) 薩摩様ニ之御奉書ニ

公方様 萬壽姫様と相認、君之字落申り、御内々御取扱

被成下り様仕度奉存り、全御右筆不調法、當番同役服部

善太夫(保孝)表甚迷惑仕り間、何分ニ表奉願り、

三月十九日

赤堀平右衛門

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤々、然者若君様御誕生御祝儀付、從琉球中山王薩州迄差渡り使者豊見城王子に、從

公方様 若君様拜領物被申渡り處、難有由得其意り、紙面之趣各一覽之事り、恐々謹言、

〔寶曆十四年〕 三月十六日 松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

三月十九日

御拜領之鶴御披之次第

一 御書院御末立花一瓶 御掛物一幅

御前五斗通御右筆書調申付差上候事、
但 御棚押板御飾

一 御書院に 御出座、御支度御熨斗目半御上下

一 御縁帳に相話外面に 御出座之節之通可相話り、

一 御熨斗上、 白木

一 御茶上、

一 鶴御吸物上、 御盃掛

一 御銚子上、
一 御差味上、 御盃掛

一 御銚子上、

一 御吸物上、

一 御土器三方上、 白木

一 御挾肴三方上、 白木

一 御銚子上、

一 御相伴鳴津備中殿・鳴津肥前殿・鳴津因幡殿、支度熨斗目半上下

一 御盃被 召上り節謹初ル、

一 御肴備中殿より被差上、御盃御上段塗敷居より六枚目

頭こゝ備中殿頂戴、御肴被下、御前に被差上、於同

席肥前殿頂戴、御肴被下、御前に被差上、同席こゝ

因幡殿頂戴、御肴被下、右御盃於同席御流（鳥居久家）・御家

老・若御年寄・大御目付迄被下納、御肴御相伴より可

被相動り、右終り 御入、

一 御座之間に 御出座、首尾之御家老に御盃被下、御用

係之御用人・御近習役・御納戸奉行に御通可被下り、

一 於梅之間、左殿・御家老・若御年寄・大御目附に鶴之

御吸物可被下り、

一 御吸物被下_レ面_ニ着座仕_テ節、御側御用人_ニる
御意可有_レ之_レ、

一 於御近習番所、御用係之御用人・御近習役・御納戸奉
行_テ御吸物・御酒可被下_レ、

一 御側廻_テ右同席_ニ有、取着_ニ一種_ニ有御酒一通可被下_レ、
一 御祝相係_テ面_ニ兼_テ熨斗目着用_テ之_レ面_ニ若熨斗目半上下

以上

〔朱〕
一寶曆十四年 三月

此面

49
〔朱〕
一 來ル十九日御拜領之鶴御披御祝四半時被遊 御出座管
外、右_ニ付御吸物・御流被下_レ條、當日熨斗目上下_ニ
可被罷出_レ、此段致通達_レ、

三月七日

高橋此面

嶋津

〔久老〕
李殿

嶋津

〔久金〕
左中殿

菱刈

〔實陸〕
藤馬殿

○川田

〔通徳〕
伊織殿

○鎌田

〔藏芳〕
藏人殿

嶋津

〔久起〕
藏殿

○小松 〔清香〕
式部殿
嶋津 〔久健〕
仲殿

河野八郎左衛門殿

〔本文書八四八号文書ノ行間朱書ナリ〕

50

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、然若

萬壽姫君様御誕生付、從琉球中山王以使者薩州迄獻上物

有之付、以繼使者被差越之、遂披露_レ處、從

公方様 萬壽姫君様中山王_ニ品_ニ被下_レ之、且又使者玉川

王子_ニ拜領物被 仰付、於其方難有由得其意_レ、紙面之

趣及言上_レ、恐_ニ謹言、

〔朱〕
一寶曆十四年 三月廿二日
松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

51

全上

御札令披見_レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然若

若君様御誕生付、從琉球中山王以使者薩州迄獻上物有之付、以繼使者被差越之、遂披露_レ處、從

公方様 若君様中山王_レ品_レ被下之、且又使者豐見城王子_レ拜領物被 仰付、於其方難有由得其意_レ、紙面之趣及言上_レ、恐_レ謹言、

(朱) 〔寶曆十四年〕 三月廿二日

松平薩摩守殿

松平周防守 康福判

御札令披見_レ、
全上

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤_レ、然若君様御誕生御祝儀付、從琉球中山王薩州迄差渡_レ使者豐見城王子_レ、從

公方様 若君様拜領物被申渡_レ處、難有由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

(朱) 〔寶曆十四年〕 三月廿二日

松平薩摩守殿

松平周防守 康福判

全上

御札令披見_レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤_レ、然若君様御誕生御祝儀付、從琉球中山王薩州迄差渡候使者玉川王子_レ、從

公方様 萬壽姫君様拜領物被申渡_レ處、難有由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

(朱) 〔寶曆十四年〕 三月廿二日

松平薩摩守殿

松平周防守 康福判

54 全御譜中

嚮_レ是

大樹家治公以_三新承_二大統_一故、今茲寶曆十四年率_三琉球國司尚穆之聘使_一赴_三江府_一、期以_三涼秋_一、然而有_二寒疾之憂_一、故請焉承_三台許_一、先_三琉使_一三月廿二日發_レ國、家老島津左中久金・高橋此面種壽、側用人福山平太夫安都・宮之原甚五太夫通直、近習役二階堂郁行且等供奉、歷九州路四月六日著_三大里_一、翌日渡_三赤關_一過_三山陽道_一、同月二十四日到_三大坂_一、同廿六日發_三大坂_一、溯_三河流_一擊_三攔方_一、翌日二十七日著_三伏見_一、廿九日發_三伏見_一經_三伊勢路東海道_一、五月十三日到_三著芝第一_一故_レ不及上便來訪焉、於_レ是邇

此行也先期而參府、故不及上便來訪焉、於_レ是邇

日欲レ調^二幕府^一而有レ疾不能^レ登^レ營、漸得^二快驗^一、六

月廿三日如^二用番松平右京大夫輝高之宅^一伺^二

將軍家之御氣色^一、請^二參府之拜禮^一、乃回勤而歸矣、

三月

(川田國福)
伊織

55 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤^レ、紙面之趣各申

談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

(采) 〔寶曆十四年〕 三月廿八日

松平右京大夫
輝高判

松平薩摩守殿

56 全上

正文在琉球國國司

琉假屋守^レ

芝御屋敷就御類燒、從中山王御加勢銀被差上、先達而達
貴聞置^レ、御手迫之砌御満足被 思召^レ、此段中山王承
知^レ様可申越^レ、

右如例可申渡^レ、

57 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤^レ、然考

正月廿七日其方妻女大奥^レ登 城^レ様被 仰出^レ段被承

之、難有由得其意^レ、依之爲御禮被差越使者^レ、紙面之

趣令承知^レ、恐^レ謹言、

(采) 〔寶曆十四年〕 四月九日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

58 全上

御札令披見^レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤^レ、將又
妻女今般登 城可有之由相達^レ段被承之、難有旨得其意
^レ、依之爲御禮被差越使者^レ、紙面之趣各一覽之事^レ、
恐^レ謹言、

(采) 〔寶曆十四年〕 四月九日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

59 全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

正月廿七日大奥に其方妻女登 城之處 御懇之上意、

其上從

公方様 御臺様 若君様 萬壽姫君様拜領物有之、難有

由得其意外、依之爲御禮被差越使者候、紙面之趣令承知

外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」

四月九日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

60 全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

其方妻女今般登 城

公方様 御臺様 若君様 萬壽姫君様は 御目見、其上

拜領物有之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、

紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」

四月九日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

61

重豪公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其

意外、然者二月廿日夜御曲輪之内出火之處、早速鎮外段

被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々

謹言、

〔采〕
「寶曆十四年」

四月十六日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

62 全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其

意外、然者二月廿日夜出火之節、御曲輪内類焼之處、早

速鎮外段被承、恐悦旨尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹

言、

御札令披見外、

重豪公御譜中
正文在文庫

65

「實曆十四年」四月廿八日

松平周防守
康福判

若君様江菖蒲御兜一飾以使者被獻之外、首尾好遂披露外、
恐々謹言、

67

全上

松平薩摩守殿
留守居

「實曆十四年」四月廿七日 松 右近

御鷹之鶴拜領付ゐ、爲御禮被差越外使者鳴津玄蕃、明廿八日五時 御城江可差出外、且又自分之御禮表可申上外間可存其趣外、以上、

66

重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

「實曆十四年」四月廿五日 松平右近將監
武元判

公方様益御機嫌能被成御座、二月廿六日東叡山(家治生母、梅溪氏)至心院様 御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

63

重豪公御譜中

正文在文庫

「實曆十四年」四月十六日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

「實曆十四年」四月十九日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

64 全上

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

「實曆十四年」四月十九日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

松平薩摩守殿

今載朝鮮信使到于江戸、春二月二十七日登營修聘禮、

大家撫綏賜饗宴、重豪在朝覲之塗聞之焉、即馳使者于東武奉賀之、老中奉書答之、

全上

正文在文庫

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意、將又今度朝鮮之信使御禮申上之、御饗應相濟外段被承、恐悦旨尤、依之被差越使者、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆十四年」四月廿八日

松平薩摩守殿

松平周防守
康福判

全上

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、今度朝鮮之信使御禮申上、其上御饗應相濟外段被承之、恐悦旨尤、依之被差越使者、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆十四年」四月廿八日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平右近將監可述外也、

五月二日



薩摩少將殿

72 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆十四年」五月二日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

73 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿日 東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(奉) 一寶曆十四年

五月九日

松平薩摩守殿

松平周防守

康福判

74 全上

右明日四時

鳴津玄蕃

御城に可差出外、以上、

五月十日

松 周防

松平薩摩守殿

留守居

75 全上

鳴津玄蕃

右明日九時我等宅に可差出外、以上、

76 五月十日

松 周防

松平薩摩守殿

留守居

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月晦日増上寺

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(奉) 一寶曆十四年

五月十一日

松平薩摩守殿

松平周防守

康福判

77 全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

以宿次奉書從

公方様御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮

若君様以鳴津玄蕃御樽肴被獻之外、遂披露外之處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(奉) 一寶曆十四年

五月十一日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

78 全上

御札令披見り、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又
以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意り、依之爲御
禮以鳴津玄蕃御樽肴被獻之り、遂披露り處
御前に被召出之、入念り段御喜色之御事候、恐々謹言、

〔送〕 實曆十四年〕 五月十一日

松平周防守 康福判

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

79 全上

去年御暇之節、〔酒井忠孝〕左衛門尉に被差出り當分相續願書致返進
り、以上、

〔送〕 實曆十四年〕 五月十四日 松平周防守

松平薩摩守殿

白木御文書五番箱中十三

寫

牡丹御紋別紙繪形之通

〔紙書機室、竹姫〕
淨岸院様より

〔重幸女〕
梧姫様江

右之通被進り條、此旨可承御役り申渡、繪形之儀若御
記錄奉行致格護置り様可申渡り、
〔鳥津久金〕

五月 左中

張紙ニテ

實曆十四年申五月廿八日右仰渡

右外包ニテ、如シ〔卷〕十三

梧姫様立 淨岸院様より被進り 牡丹御紋之繪形壹枚并御記錄奉

行江島津左中殿に被仰渡り御書付之寫書通

81

重豪公御譜中
扣正文在右筆所

なをくいかほともよろしく御さたたのみそんしま
いらせり、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

公方様 御臺様

若君様 萬壽姫君様ますく御機嫌よく御座なされ、恐
悦にそんし奉りり、然れハ此たひ朝鮮國より

全上

寫正文在右筆所

中奉書切紙

人參

一きん

公方様へ献上物の内品く

淨岸院様へ進られ、私にをよひて有かたくそんし奉り、

右の御禮申上度、

御臺様 若君様 萬壽姫君様へも申上り、御序の折から

御前よろしきやう御とりなしたのミ入そんしまいらせ

り、めてたくかしく、

〔朱〕
「寶曆十四年」

まつ嶋さま

高をかさま

うら尾さま

いはせさま

たき川さま

むめたさま

清はしさま

る申給へ

白苧布 二ひき

生苧布 二ひき

黒麻布 二ひき

白綿紬 三ひき

色かミ 一まき

眞墨 二笏

以上

右之通 淨岸院様へ六月六日仰御文にて被進り、

〔朱〕
「寶曆十四年」

重豪公御譜中

今茲以三寶曆十四年二改三元明和、元年甲申六月十三日傳一
令於江府、越七月五日達薩府也、

〔朱〕
「近秘野帥」

寶曆十四年六月十三日改元明和、七月朔日行朝觀禮如例、

二日謁先廟於大圓寺、八月三日 大家使御使番齋雲雀來

賜 公於邸亦鷹所擊也、公拜其賜乃託松平本^(俊善、定得)次郎謝恩、

九月二十七日 公招有馬中務^(頼徳)太輔・酒井備前守・上杉大

炊頭^(重延)・伊達遠江守於芝邸同奏散樂焉、十月五日及南部大

(和進)
贈大夫・信濃守散樂于邸、是歲中山王尚穆使讀谷山王子

湧川親方爲正副使、入貢江都賀 大家承統、八月二十三

日國老川田國福等監護發鷹府命也、十月二十一日樺山左

京久智爲國老、十一月九日琉使至芝邸、十三日 公轉任

從四位上中將、又使池田筑後守賜慶米二仟苞先例也、十

五日琉使獻 公盛膳、公親觴王子・親方、此日琉人奏

樂及踊於大御書院以備 公覽、十八日 公賜琉人食於大

御書院亦觴王子等、且催離子於表書院令以觀焉、十九日

私召王子等寓目外庭茶亭景物、二十一日 公以琉使朝謁

大家行聘賀禮、二十五日復以朝謁奏樂備覽宴賚如例、十

二月三日琉人復獻 公食且爲奏樂、四日 公試散樂召琉

人觀焉、五日復賜琉人食令見散樂、六日 淨岸君命催操

於外庭茶亭馬場召琉人亦觀焉、九日復召茶亭饌之也、十一

日使國福等監護發邸、是月二十二日德川宗尹卿薨于一橋

85 重豪公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

謹言、

(宋)
「明和元年」 六月廿五日

松平薩摩守殿

輝高判
松平右京大夫
輝高

86 全上

今朝琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、

恐謹言、

(宋)
「明和元年」 六月廿五日

松平薩摩守殿

正右判
阿部伊豫守
正右

87 重豪公御譜中

正文在文庫

明朔日五時登

城參勤之御禮可被申上外、以上、

(宋)
「明和元年」 六月晦日

松平周防守
松平右京大夫
松平右近將監

松平薩摩守殿

88 正文在文庫

家來二人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

89 重豪公御譜中

同年七月朔日應 教登 營、於白書院獻先規之品

見於

大將軍家治公、乃蒙 御懇之旨而退出、直登 西

營、亦上其獻物、退而如老中各第一拜謝焉、凡其

勤事者如先格、家老島津左中久金・高橋此面種壽亦

各捧獻物拜謁 台顔也、

90 重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(卷) 一明和元年

七月六日

武元判

松平右近將監

松平薩摩守殿

91 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷) 一明和元年

七月六日

正右判

92 重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

阿部伊豫守

正右

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

七月十一日

武元判

松平薩摩守殿

松平右近將監

武元

93 全上

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕「明和元年」 七月十一日 正右判

松平薩摩守殿 阿部伊豫守 正右

94 白木御文書五番箱上十四、中

寫

牡丹御紋別紙繪形之通

淨岸院様方

悟姫様江

右之通被進江段江戸江申來江條、御記錄所江納置江様御記錄奉行江可申渡江、

七月

伊織

右ノ外包ニ采「十四」上

悟姫様江 淨岸院様より被進江牡丹御紋之繪形壹枚并川田伊

織殿江御記錄奉行江被仰渡江御書付壹通

95 重豪公御譜中

同年八月三日

大樹家治公使〔使番〕遠藤源五郎常住ニ賜ニ御鷹所捉之雲雀一、乃

拜ニ恩旨ニ如ニ先格一、

96 全上

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之江、遂披露江處一段之御仕合江、恐々謹言、

〔宋〕「明和元年」 八月四日 康福判

松平薩摩守殿

松平周防守 康福

97 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之江、遂披露江處一段之御仕合江、恐々謹言、

〔宋〕「明和元年」 八月四日 正右判

松平薩摩守殿

阿部伊豫守 正右

98 重豪公御譜中

同年八月二十五日當〔島津忠治〕 蘭窓公二百五十年遠忌〔修〕法事

吉田津友寺一日、由是進納香奠銀五枚、番頭鎌田典

膳政爲勤〔代〕參〔焉〕〔凡當其遠忌則恒例各以寺役勤修之、以往轡于此、〕

99 重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平周防守可述〔外〕也、

〔宋〕「明和元年」九月七日



薩摩少將殿

100 全上

爲重陽之御祝儀

若君様〔に〕御小袖一重以使者被獻〔外〕、遂披露〔外〕處一段之

御仕合〔外〕、恐〔く〕謹言、

〔宋〕「明和元年」九月七日

松平薩摩守殿

松平右京大夫
輝高判

101 重豪公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見〔外〕、

若君様

萬壽姫君様就 御誕生、

公方様 若君様 萬壽姫君様〔に〕御祝儀獻上付、御目錄之

通被下、兩使者〔に〕奉拜領物被 仰付、重疊難有之由尤之事

〔外〕、依之被差渡小波津親方、目錄之表贈給之、令祝着〔外〕、

恐惶不宣、

〔宋〕「明和元年」九月十五日 少將重豪御判

謹上 中山王

102 全上

芳翰令披見〔外〕、就

御代替、其許之使者當秋召連致參府等之處、寒濕之痛付、

先達〔外〕出府、使者當秋差立〔外〕樣願之通被 仰出〔外〕付、被

差渡小波津親方、太刀・馬代白銀百兩并目錄之通贈給之、

入念〔外〕段令祝着〔外〕、恐惶不宣、

〔宋〕「明和元年」九月十五日 少將重豪御判

謹上 中山王

103 全上

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念外段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和元年 九月十五日 少將重豪御判

謹上 中山王

104 全上

芳簡令披見外、御鷹之鶴致拜領外爲祝儀、被差渡盛嶋親方、殊太刀・馬代白銀百兩并目錄之通被相贈之、入念外段令祝着外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和元年 九月十五日 少將重豪御判

謹上 中山王

105 重豪公御譜中

正文在琉球國國司

一簡令啓外、

若君様

萬壽姫君様就 御誕生、御祝儀獻上相濟、拜領物有之外、爲御禮今般使翰被差渡外付五、右書翰以次使者差上外處被遂披露、奉書相渡外間差越之外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和元年 十月廿二日 少將重豪御判

謹上 中山王

106 重豪公御譜中

慶府稻荷大明神祭祀例歲以十一月三日、是日有鑄流馬一、今茲以結願之旨、故當日加鑄流馬三騎、張行之、舊式之上馬者川上庄八郎親鴻・射手鮫島次左衛門員良、結願之上馬者川上四郎親宣・射手相良助之進常苗・種子島四郎助時良以上共五騎也、

○同月四日 儲君家基生后始存胎髮、故即日登城於波之名嗣廂下調老中慶賀之、登西城賀復如之、而遣番頭不詳於城一、獻各三種二荷於大家及御臺様 儲后賀之也、

107 正文在文庫

若君様御髮置爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、遂披露

候處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和元年」十一月四日 康福判

松平薩摩守殿
松平周防守
康福

108 全上

若君様御髮置爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、遂披露
外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和元年」十一月四日 正右判

松平薩摩守殿
阿部伊豫守
正右

109 重豪公御譜中

嚮是

故大樹家重公讓政務於

右大將家治公退休于西城、由是琉球國司尚穆從

先躰、遣賀使讀谷山王子於江府、獻三方物於

將軍家、以故今茲王子葦航來于廳府、八月二十三日

發廳府赴東武、令家老川田伊織國福・用人岩下佐

次右衛門方峯・近習役島津矢柄久壽・留守居有川勇馬貞

厚・使番矢野清右衛門清香等附護之上、晦日解纜於薩

州久見崎港、九月二十九日繫長州赤間關、十月九日

着船于攝州大坂、到是留滯五日、十五日溯河流、

翌日到于城州伏見、三宿而發伏見、經美濃路東海

道、十一月九日到著于江府芝邸、即日遣留守居于老

中之第、報琉使來着之事、

110 重豪公御譜中

正文在文庫

御用之儀外間、明十三日四時可有登城外、以上、

〔宋〕
「明和元年」十一月十二日 松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

111 全御譜中

同月十三日應教造於朝、就白書院即松平右京大

夫輝高用・松平右近將監武元・松平周防守康福・阿部伊

豫守正右聯_二座緣頰_一、乃輝高傳_二台命_一曰、今般仍_二先

113 全上

規_一、琉使來朝、尤愜_二台慮_一、因_レ茲敍_二從四位上_一任_二

正文在文庫

左近衛中將_二云、乃拜_二上旨_一而退、自_レ是直登_二西城_一、

上卿 滋野井中納言

就_二奏者仙石越前守政辰_一亦拜_レ焉、既而如_二老中之第_一申

明和元年十一月十三日 宣旨

謝_レ之、同日以_二上使池田筑後守政倫_一賜_二鑲牙二千苞_一、

從四位下源重豪朝臣

依_二琉使參府_一也、亦如_二老中之第_一謝_レ焉、

宣敍從四位上

112 全御譜中

寫正文在右筆所

寫

松平薩摩守事爲從四位下少將之處、今度從四位上中將被

仰付_レ、口

114 正文在文庫
上卿 廣橋大納言
明和元年十一月十三日 宣旨

宣等之儀相調_レ様傳奏來迄可被申入候、恐_レ謹言、

左近衛權少將源重豪朝臣

明和元申

松平周防守

宣轉任左近衛權中將

十一月十三日

康福判

松平右京大夫

藏人頭左大辨藤原俊臣奉

輝高判

松平右近將監

宣案

武元判

(前司代、正允)
阿部飛彈守殿

115 正文在文庫

左近衛權少將源朝臣重豪

正二位行權大納言藤原朝臣兼胤宣、奉

敕、件人宜令轉任左近衛權中將者、

明和元年十一月十三日大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣

師資奉

全上

正文在文庫

從四位下源朝臣重豪

右可從四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣授榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

明和元年十一月十三日

朱イン

一品行 中務 卿 職 仁 親 王 宣

從四位上行中務少輔臣藤原朝臣兼敦奉

從四位下行中務權大輔臣藤原朝臣持豐行

正二位行權大納言臣 (廣胤) 兼胤

正二位行權大納言臣 (花山院) 長熙

正二位行權大納言臣 (三條) 季晴

正二位行權大納言臣 (廣標) 輔忠

正二位行權大納言臣 (三條) 重良

從二位行權大納言兼右近衛大將臣

從二位行權大納言臣 (大炊御門) 家孝

從二位行權大納言臣 (西園寺) 賞季

從二位行權大納言臣 (堀小將) 隆前

權大納言從三位臣 (飛鳥井) 雅重

正二位行權中納言臣 (平松) 時行

從二位行權中納言臣 (難波) 宗城

從二位行權中納言臣 (六條) 有榮

正三位行權中納言臣 (清閑寺) 益房

正三位行權中納言兼右衛門督臣 (滋野井) 公麗

正三位行權中納言臣 (四條) 隆敘

正三位行權中納言臣 (中山) 愛親

正三位行權中納言臣

正三位行權中納言臣

權中納言從三位臣資枝等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

明和元年十一月十三日

制可

朱イン

月日辰時從五位上行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師資

攝政(近衛内前)從一位朝臣

太政大臣(九條尚實)闕

從一位行左大臣朝臣(藤原兼實)

從一位行右大臣朝臣(藤原道平)

內大臣正二位兼行左近衛大將朝臣(九條道前)

三品行兵部卿織仁親王

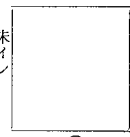
從五位上守兵部大輔兼貫

右大辨闕

告從四位上源朝臣重豪、奉

制書如右、符到奉行、

正五位下行兵部少輔定治



(天皇御璽)

朱イ

明和元年十一月十三日

大録

少録

少録

右中辨

同

上卿

滋野井中納言

職事

烏丸權右中辨

左近衛權中將

上卿

廣橋大納言

同

職事

中御門頭左大辨

118

全上

正文在文庫

さつまの中將より今度昇進の御禮として、わうこん百兩
御きぬ三十疋しん上おはしまし、ひろう申て外へハ、お
もしろく思しめし外よし、心得外て申せとて外、このよ
し御心え外てつたへさせられ外やうに申せとて外、かし

御いまの御局へ

若まいらせ外

117 (朱) 「正文在文庫」

薩摩中將

從四位上

(朱) 存白墨
仰明和二
二二六

正文在文庫

猶以直垂可有着用外、

御本丸相濟、西丸江及召連可被罷出外、以上、

明廿一日四時中山王使者召連可有登一城外、以上、

〔宋〕

十一月廿日

阿部伊豫守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

琉球人江差添外家來一人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

〔宋〕

〔元年ノ誤カ〕

同二十一日應 教率三疏使二登 營、先造于殿上間、

使者隨着席、

大將軍家治公出御于大廣間、乃入見、

公、時召中壇口親勞遠率疏使來焉、畢加納遠江守

久堅擊中山王尚穆進貢之太刀目錄太刀一腰・馬一疋、別幅帶

百袋・太平布百疋・鱗織芭蕉布五十端・鳥織芭蕉布五十端、薄芭蕉布五十端、久米島綿百把・繪縹五十卷・羅紗二十間、青貝大草二脚、堆錦硯屏一對、青貝籠飯一對

酒十壺來備諸中壇、此時使者出席調台顔、久堅奏

達之、乃九拜退、重出席、以其私備獻物、於緣類

再執謁、三拜出、家川田伊織國福亦獻上太刀・馬代

卷物二、於緣類拜台顔也、尚穆又以別幅壽帶香

硯屏一對、總子二十卷・太平布五十四、繪縹子五十端、泡盛酒五壺、進二呈

御臺所也、既而登西營造于殿上間、疏使亦隨着

座、於是大目附池田筑後守政倫・稻垣出羽守正武起引

疏使就大廣間、老中阿部伊豫守正右・松平右京大夫

輝高出席、奏者仙石越前守正倫備尚穆進貢之太刀目錄

太刀一腰・馬一疋、別幅壽帶香二十箱・香餅二箱・龜涎香五十袋・太平布五十疋、鱗織芭蕉布三十端・鳥織芭蕉布三十端、薄芭蕉布三十端、久米島綿五十把、繪縹三十卷・羅紗十間、青貝大草二脚、堆錦硯屏一對、青貝籠飯一對、泡盛酒五壺、披露之、使者三拜退、重出

席、備私獻物亦三拜退出矣、家老國福亦獻上太刀・

馬代、既而降營、如老中之第一申謝焉、

正文在文庫

猶以直垂可有着用外、

御本丸相濟、西丸江及召連可被罷出外、以上、

明廿五日琉球人音樂被_レ仰付之、且又御暇可被_レ下_レ條、四時召連可有登_レ城_レ外、以上、

〔未〕「明和元年」十一月廿四日

阿部伊豫守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

123 全御譜中

同二十五日再應_レ、教率_二琉使及其樂師_一登_レ營、乃先_二

于琉使_一造_二於殿上間_一、下境、座上琉使從着_レ座、遂着_二大廣間_一

自下壇上五疊目通就東位、肥後守容綏・酒井雅樂頭忠恭・松平兵部太輔賴眞老中等

座、琉使着板緣關際東方樂師等候_二于御向板緣_一、敷設、席西側松平

班列着席_二自下壇上_一、又板倉佐渡守勝清・鳥居伊賀守忠孝侍_二

于西緣頰_一、

家治公御裝直垂出_二御於上壇_一、揚_二御簾_一、即琉使以下等平

伏焉、乃應_レ令樂師作奏_二樂_一、備_二

將軍家之見聞_一焉、樂章卒而琉人各退_二于殿上間_一、於是

進見_二台顏_一、入御之後老中列_二座於大廣間_一、乃入着_二

南位_一座、池田筑後守政倫・稻垣出羽守正武引_二琉使_一就_二

于三之間關際_一、乃西面座老中應接焉、而使從出_二席二之間中央_一、時老中松平右京大夫輝高傳_二台命_一曰、遵_二先

闕_一使者遠來信問叮嚀、聊復贈_二白金五百枚・錦子五百把

於國司尚穆_一云、乃爲_レ之謝_二老中_一、使者亦拜_二恩旨_一而

退_二于殿上間_一、爾後於_二帝鑑間_一賜_二吸羹及酒菓_一、老中

來接待焉、同賜_二使者_一、於_二殿上間下壇_一、而又其治澤遠_二

從者_一矣、自是退_二本營_一、復先_二于使者_一登_二西城_一

於是更直、垂服長袴遂造_二於大廣間_一就_二南座_一、老中阿部伊豫守正右及

輝高、若年寄鳥居伊賀守忠孝・酒井石見守忠休列居、池

田政倫・稻垣正武引_二使者_一就_二于三之間_一、老中應接焉者

如前、即正右傳_一

儲君之旨、又贈_二白金三百枚・時服二十於尚穆_一云、加以

兩御所各賜_二琉使_一者有_レ差_二大樹賜銀二百枚・時服_一、夫其從者・樂

師等亦隨_二分有_二恩賜_一矣、既而降_レ營、如_二老中之第_一申_二

謝焉、

124 全上

正文在文庫

明廿八日五半時登

城、官位之御禮可被申上_レ、以上、

〔宋〕「明和元年」十一月廿七日

阿部伊豫守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

125 全御譜中

○同年十一月二十八日登營、於白書院見

大樹家治公、獻御太刀一腰・御馬代黃金一枚・縮緬十卷、

拜官位昇進之儀、又獻白銀五枚・干鯛一匣于

御臺所、御太刀一腰・御馬代黃金一枚于

若君而拜之、

○同日老中屬贈所司代阿部飛彈守正允之奉書上、即是

由重豪敘任之事也、以故同年十二月九日使高橋七

郎右衛門種央頭物・小倉仲之丞知澄右齋筆之赴京師、兩

使發江府、逾日到洛、達奉書於正允焉、閏十二月

十五日詣傳奏姉小路前大納言公文卿之邸、呈獻上物

及官物等、公文卿請取之、乃屬口宣于種央、既

而種央發京師、翌年乙酉正月十一日到著芝第、乃

親迎口宣於大書院受焉、知澄亦越歲後種央少

126

滯京、其際還

近衛殿下内前公執奏、而獻上黃金百兩・絹三十疋于

禁裡、二月十九日於

殿下之華第見附女房奉書于知澄、知澄持之發京

都、同三月九日著芝第而復命、

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

寸尺九寸五分 横二寸八分 料紙中奉書

本國薩摩 薩摩守嫡子

薩摩國一圓 從四位上中將

高六拾萬五千石餘 大隅國一圓 松平薩摩守

日向國之内 申二十

外 拾貳萬三千七百石琉球國 生國薩摩 居城薩州鹿兒島

上包小奉書披キ包上明細書二枚卜記 二枚一包入

一右御明細書分限方御係大目付大井伊勢守様、御留守居東

郷源五、十一月廿八日被差出外、

但右御明細書跡、大目付様より被差出外様と御沙汰之上、

而被差出事是有之外得共、此節無其儀内被差出外事」

〔宋〕
「明和元年」

127 重豪公御譜中

同二十九日 御臺様遣（孝之）使新家市正（實數用人）於芝邸賜（服大紋）中山王物、於書院上之間、重豪（重豪）奉（奉）二恩旨、即使（譯言）之讀谷王子（服唐衣、爲唐禮）、王子進（席）而拜、余乃爲（之）謝焉、禮訖而如（老中各第）拜辭也、

128 全上

扣正文在家老座

一昨廿八日

太守様御官位之御禮可被仰上旨、前日御老中様御連名之以御奉書被 仰渡、御請被仰上、廿八日朝六半時

太守様御熨斗目長御袴御着用（之）御登

城、御白書院（定經）に

公方様出御、土岐美濃守様御奏者（之）御禮被仰上（外）處、

是にと

上意有之、少御進被遊（外）處、御老中松平右京大夫様御

取合被仰上、御禮首尾能被爲濟、西御丸に御上り、御

奏者牧野（康海）遠江守様を以

若君様（勝清）に御禮被仰上御退出、御老中様方に御廻御禮被仰達（外）、板倉佐渡守様・若御年寄様（之）左中御使者、

御側衆（之）若物頭御使者を以御禮被仰達（外）、

一御太刀一腰

一御馬代金一枚

一縮緬十卷

一公方様（之）

一白銀五枚

一千鯛一箱

御臺様（之）

一御太刀一腰

一御馬代金一枚

若君様（之）

一白銀三枚（之）、

御老女衆

御七人

一同貳枚（之）、

表御使衆

四人

一同三枚（之）、

若君様御附

岩橋様
御乳人

右之通御伺之上御献上并御贈物相濟申上、

一 太守様御内證御勤之儀、則日

御本丸に川井被差上、

公方様 御臺様 若君様 萬壽姫君様に御禮被仰上上、

一 御官位付の老御内證より表御献上物被遊度候得共、御先例無之付、

御守殿に御頼之趣有之付處、

淨岸院様思召を以 御本丸に御願被仰上上、

公方様に御着一折 太守様御直文御添被成

淨岸院様に御頼御献上可被遊旨、

御本丸より御差圖有之、則日御着一折御直文被相添、

御守殿に御頼御献上被遊上、御官位付の老以來共右通

御献上被遊度被 思召旨承知仕上、此段老爲御存上、

一 御前様より御献上物之儀、表向御伺之上

公方様 御臺様 若君様に御着一折上、則日女御使

を以御内證より被遊御献上、

萬壽姫君様に老御口上一通の御禮被仰上上、

一 御臺様御老女衆に銀三枚上、

御本丸御客會釋衆

御臺様御中年寄衆・表御使衆に銀貳枚上、先例を以

御内證より川井文の被遣上、

一 長崎御奉行に御書并御祝物被遣上儀に付る老、追の御問合可申越上、

問合可申越上、

一 御官位御昇進被 仰出、口

宣等之儀付、阿部飛彈守様に御老中様より御奉書、一

昨廿八日被相渡上、右付京都に之御使者物頭高橋七郎

右衛門・御右筆小倉仲之丞(知登)に被仰付、來月九日被差立

筈上、於彼地御官物并被進物等先例を以手當可致置旨、

京都御留守居に今日便申越上、

一 御禮首尾能被仰上上段、(佐上原、久野)島津淡路守殿に爲御知可申上

上、且又右付隣國爲御知等之儀、先例を以可被致首尾

上、

一 御内輪御祝物御取かへ又老御相中使等被差越候儀老、

別紙を以申越上、

一 爰元詰御役人老當日謁御家老御祝儀申上、諸士老御帳

相付御祝儀申上上、其元御祝儀之儀、先例を以可被申

渡上、

一 御女中様方に拙者共より、今日便書狀を以御祝儀申上

外、

右申越外條 御女中様方には可被申上外、御禮迄首尾
能被仰上、恐悅御同意奉存外、此段申越外、以上、

〔宋〕一明和元年〕十一月晦日

〔宋〕正高橋此面
嶋津左中

島津山城殿〔久定〕

樺山左京殿〔久忠〕

菱刈藤馬殿〔實忠〕

島津主鈴殿〔久盛〕

〔宋〕御返答

本文被申越趣致承知

御女中様方達 御聽外、御禮被仰上外付る者先例、

去ル朔日御役人限御祝儀申上外、左外

御女中様方右御怡先例之通被仰進外様申上、去ル六

日日附之御文を以、今日便被 仰進外、

淨岸院様〔蘇魯蘇、竹越〕 太守様〔重忠〕 御前様〔橋本、女、熊田重政等〕 眞含院様は 大御目付以

上之御役も兼る被申上來外通、今日便去ル六日日附

こゝ以書狀御祝儀申上外、御一門・大身分・其身獨禮、

御女中の方外、右御祝儀 御當人様迄は被申上先例外

故、其通右同日之日附こゝ被致來外通御祝儀被申上外

様致通達外、且御禮被仰上外段、佐土原に之爲御知先例

之通假屋守に申渡外、右付る者隣國爲御知跡と不相見

得外故、此節及其通御知せ無之外、長崎御奉行に御書・

御祝物被遣外儀者、追る御問合次第可致首尾外、御禮

以上、

但大御目附以上御役も外者、三田御奥に委御祝儀申

上外、

閏十二月九日

〔本文書ハ一二八号文書ノ行間朱書ナリ〕

130 重豪公御譜中

肝屬郡内之浦郷村市人彌三兵衛者、明和中饑自出私藏

米若干石、以賑恤同郷南浦村・小串村飢餓之民二百餘

人、又出私財救窮民者屢焉、於是冬十一月與彌

三兵衛青銅千匹褒賞之、

131 重豪公御譜中

扣正文在家老座

琉球中山王前より御當地に使者差上、翌年薩州迄以使

(朱)「御紙左之通

者書翰并献上物差越御禮申上^レ、御當地に若私家來を以

公方様(家)覽延之度献上物之通、

差上^レ先例御座^レ、此節表

若君様(家)當年、大納言様(家)差上候通献上仕、其外覽延之度例之通可被致候、

公方様 若君様(家)右例之通献上物等爲仕度^レ、

御臺様(家)正徳五年一位様(家)差上候通書翰相添差上候様可被致候、

御臺様(家)表書翰相添献上物爲仕度^レ、何分表被成御差圖

可被下候、以上、

十二月七日

松平薩摩守

例書

泡盛酒 二壺

右之通覽延二巳年琉球より薩州迄使翰差渡、次使者を

以献上仕候、

十二月

御代替付正徳四年年從琉球中山王、御祝儀申上^レ使者

差上^レ、翌未年御禮之使者薩州迄差渡、御當地に若私

家來を以献上物等差上^レ節

(家)臺様、(近衛氏)

方御連名之書翰差上、左之通献上仕^レ、

一位様(家)

官香 二十把

色縞子 三十卷

泡盛酒 二壺

右之通御座^レ、

(朱)「明和元年」十二月

「右御伺書壹通・例書貳通、即日御老中松平右京大夫様御用

人関源八(家)、御留守居佐久間新左衛門を以被差出置^レ處、同

十二日御留守居御呼出^レ而、御付紙之通御用人石嶋弥一右衛

門を以佐久間新左衛門(家)被仰渡^レ事」

公方様(家)

例書

龍涎香 三十袋

緞子 二十卷

細布 二十端

八重山嶋熬海鼠 二箱

泡盛酒 三壺

大納言様(家)

龍涎香 二十袋

緞子 十卷

細布 十端

八重山嶋熬海鼠 二箱

全御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見外、御代替之爲御祝儀、讀谷山王子被差上
外付ぬ、太刀一腰・馬代白銀百兩并別錄之通贈給之、欣
然之至外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和元年 十二月九日 中將重豪御判

謹上 中山王

全御譜中

中山王信使王子讀谷山嚮以_三使節禮畢一故、迄_下尾張黃門宗
睦卿・紀伊黃門宗將卿・水戸參議宗翰卿・徳川參議宗武
卿・同參議宗尹卿・同三位中將重好卿及台老・京都所司
代・大坂城代・若年寄以下管_レ事庶達官等上_レ謝_レ之贈_レ物、
各有_レ差矣、既而今茲十二月十一日琉使發_二於江府_一、令_三
家老川田伊織國福・用人島津登久連・近習役關山新左衛
門金郷・使番本田六左衛門親相附_二護_一之、即經_二歷東海道
美濃路_一、閏十二月四日到_二大坂_一、同九日發_二大坂_一、駕_レ
船回_二西海_一、翌年正月廿八日着_二船于薩州久見崎港_一、二
月四日到_二着于薩府_一、自_レ是琉人期_二順風_一、泛_レ船而南歸、

全上

寫正文在右筆所

口上の覺

御それさま此ほど官位の御禮申上なされめてたさ、
御臺様へ御目録の通しん上なされ、すなはちひろういた
しまいらせり、めてたく御満足に思しめしり、よふ申せ
との御事におハしましり、めてたくかしく、

〔采〕 一明和元年

松しま

高をか

松たいら

うら尾

まつ摩守さまへ

口上

いはせ

たき川

むめた

きよ橋

全上

扣正文在右筆所

なをくいかはともよろしく御きたたのミそんしま
いらせり、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

御臺様ますく御機嫌よく御座なされ、恐悦にそんし奉りり、しかれハ私官位の御禮申上りに付、目錄のとをりしん上仕り處に御披露なされ、御意の趣御口上書を以仰下され、有難き仕合にそんし奉りり、右の御禮申上まいらせり、御序の折から

御前よろしきやうに御とりなしたのミ入そんしまいらせり、めて度かしく、

〔宋〕
「明和元年」

まつ嶋さま

高をかさま

うら尾さま

いはせさま

たき川さま

むめたさま

清はしさま

る申給へ

重豪公御譜中

扣正文在江戸家老座

徳川刑部卿殿御逝去付、從

〔宋〕御付紙

公方様 上意之趣妻に御奉文被成下、難有奉存り、依之表向私御禮之儀如何相動可申り哉、被成御差圖可被下り、
月番之老中周防守五
可被相廻候

〔宋〕
「明和元年」

十二月廿四日

松平薩摩守

扣

暑氣爲御尋、從

公方様薩摩守妻に以御奉文御着拜領被仰付、且亦御鷹之鷹右同斷拜領之節考、薩摩〔守脱カ〕在府之砌御用番様 西丸御老中様に爲御禮廻勤仕り、在國之節考飛札を以御禮申上り、薩摩守妻出府付、以御奉文御尋之節考、在國之節考御丸に以飛札御禮申上り、

十二月

重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守

來年四月於日光山御法會付り、御太刀・御馬代黄金十兩

以使者、四月十七日日光本坊に可有奉納外、使者熨斗目長袴可爲着用外、刻限之儀於彼地可相伺外、以上、

〔朱〕 一明和元年 閏十二月 〔在口裏〕松平薩摩守に

139 全上

今朝御干菓子一箱被獻之外、遂披露外、恐々謹言、

〔朱〕 一明和元年 閏十二月三日 康福判

松平薩摩守殿 松平周防守 康福

140 重豪公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・干椎茸一箱被獻之外、遂披露候、恐々謹言、

〔朱〕 一明和元年 閏十二月六日 康福判

松平薩摩守殿 松平周防守 康福

141 全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕 一明和元年 閏十二月六日 正右判

松平薩摩守殿 阿部伊豫守 正右

142 重豪公御譜中

扣正文在家老座

今度

太守様御官位之節、於

御城仰渡之趣意、御使番方より差出外、

御城坊主書出見合外處、於

御白書院御縁頼御老中様より、琉人被召連 御參府御喜

悦思召外、依之從四位上中將被任との趣相見得外、左外得

老琉人被召連外付外、御官位爲被 仰出筋なる何ぞ御先

例相替儀及無御座、無此上恐悦御同意奉存外、此節之儀

琉人被召連被遊 御參府外節とハ少々譯及爲相替事外、

然共先達之御問合書ニ表、 御官位御昇進之儀迄ニ

琉人被召連り付る之譯不相見得事不得者、後年御先例ニ相係儀ニの爰元書留ニ及相成、且御家譜編集方ニ及右躰之儀者書抜相渡事付付、右御城坊主書出之趣ニ御相違者無之筈外得共、今一往右之旨趣被申越度、此段及御間合外、以上、

〔卷〕
〔明和元年〕 閏十二月十四日 島津主錦

〔卷〕
〔上〕 樺山左京

島津山城

〔卷〕
〔下〕 嶋津左中殿

高橋此面殿

〔卷〕
〔御返答〕

本文被申越趣致承知外、其節仰渡之趣者、今度琉球人
不相替召連參府之段、御機嫌被

思召外、依之從四位上中將被 仰付外段爲被仰渡御事

御座外、右通琉人被召連りと申所

太守様御合點難被遊り間、御手前之方江承合外様被

仰出、御留守居ニの去方江承合させ外處、

太守様御痛所被成御座、御家來警固ニの

太守様者御先江御參府、琉人出府ニ付被召連御登 城、御先規之通御勤被遊度旨御願ニの、其通被仰渡、御先江 御參府之御事ニの、被召連り御同前之御事故、右通爲被 仰出事外由承り段申出、其趣爲達 貴聞置事ニ外、其元江問合之趣者、先年辰年 慈徳院様中將御官位被 仰出外節も、御官位當日飛脚を以申越り通之問合ニの、隣國御しらせ等表爲相濟筈ニ外得者、此節表御先格之通ニの何ぞ差支候儀者無之筈と相考、其上右通琉人被召連りと申所御疑及有之、旁ニ付先例之通問合爲申越事外間、右之趣被書留置、御記録奉行江及被申聞ニの可有之外、此段及御返答外、以上、

正月廿一日

〔本文書八一四二号文書ノ行間朱書ナリ〕

重豪公御譜中

扣正文在家老座

一 白銀貳枚

〔朱〕奉行ニ付面者御使番於江戸奉伺候處、伺之通被 仰出、江戸御使番より爰
大雄山 御宮江
元同仰江申越候旨申出候付、左之通申渡候

一同 壹枚宛

〔徳川秀忠〕
台徳院様

大猷院様(家光)

嚴有院様(家綱)

常憲院様(綱吉)

文昭院様(家宣)

有章院様(家繼)

有德院様(香志)

惇信院様(家重)

右南泉院 御位牌殿江

一同 壹枚

花尾山江

一同 壹枚

忠良様

右加世田日新寺江

一同 壹枚

慈眼院様(島津家久)

寬陽院様(光久)

泰清院様(綱久)

大玄院様(綱貴)

有邦院様(緒豊)

慈徳院様(宗信)

圓徳院様(重年)

右福昌寺 御位牌所江

一同 壹枚

淨國院様(金貴)

右淨光明寺 御位牌所江

一同 壹枚宛

諏方

稻荷

祇園

若宮

春日

福ヶ迫
諏方

一青銅百疋宛

御休息所御看經所

尾畔三社

但御代參御近習役相勤り様御使番より可相違り、

一護摩所不動

一表御看經所

但右兩所江老御進納物無之り、

御代參御近習役相勤り様、是又御使番より可相達

外、

朱「申閏十二月廿三日」

右者 太守様御官位御昇進付、明後廿五日 御代參を

御本文之通寺社奉行御使番五甲渡、首尾係五者

以御獻納并御寺納被遊候條、御手當如例可申渡外、

取次証文を以申渡候 取次 川上弥五大夫

御代參人柄之儀者追ゝ可申渡外、

加世田日新寺江者來ル廿七日 御代參有之筈外、

（朱）「明和元年」 閏十二月廿三日 （權山久曾） 左京

重豪公御譜中

先_レ是重豪進官位故、今茲冬閏十二月二十五日遣_二一門島

津肥前忠紀_一、獻_二白銀二枚于大雄山 神祖廟_一、使_下支族

島津播磨久敦獻_中白銀各一枚于

台徳公

大猷公

嚴有公

常憲公

文昭公

有章公

有徳公

惇信公靈牌上、同日使_二同族島津圖書久濃獻_二同一枚于滿

家院花尾權現社_一、又使_二番頭島津内記久澄_一獻_下同各一枚

于福昌寺慈眼院殿・寬陽院殿・泰清院殿・大玄院殿・有

邦院殿・慈徳院殿・圓徳院殿尊牌、使_二番頭新納五郎右衛

門久起_一同一枚于淨光明寺淨國院院尊牌上、使_下番頭島津直

衛久中獻_中同品各一枚于諏方社及稻荷社・祇園社・若宮

社・春日社・福箇追諏方社上、又以_二近習役_一獻_二青蚨百匹

于看經所_{在休}・尾畔三社_一、獨_于不動_{在禮}・看經所_二更無_レ

獻、而令_二之拜_一而已、同二十七日使_下番頭種子島左内久芳

獻_中白銀一枚于加世田日新寺 極岳公尊牌上、謹致_二恭賀之

意_一、是由_二先躰_一也、

全上

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲阿部伊豫守可

述外也、

（朱）「明和元年」 閏十二月廿七日



薩摩 中將殿

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 閏十二月廿七日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

若君様は御破魔弓一飾以使者被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

〔宋〕 閏十二月廿八日 正右判

松平薩摩守殿 阿部伊豫守 正右

寫

組頭に

新番組合之儀、當分其身より何番組合之願申出、其通被申渡事之由外得共、此節御番組合別冊之通申付、書改相渡外條、此旨可被申渡外、

一 一番組より四番組迄之右組合、人々持前之組々被入

置外間、向後可成程増減無之、大概人數相並外様組合

被申渡、若組々より人數之多少有之節ハ、右四組之内

こゝ見合組合可被申渡外、

一 五番六番組之儀、持前之組々若増減有之外付、別冊

之通組合申付外、向後之儀及右準、人數相並外様見合

可被申渡外、乍然右兩組之新番、後年格別々相増外ハ

、其節ハ可被得差圖外、

一新番之儀四ツ八ツ之間御番相動之由外得共、向後小番

差支外節ハ、夕詰又ハ夜番等も差寄相動外様可被申渡

外、

右之通被致首尾、御番帳書載可被申出外、

右申渡御記録奉行に及可申渡外、

閏十二月

(島津久鄰) 主銘

(表紙)

<p>追 錄 舊 記 雜 錄 卷百廿二</p>	<p>重 豪 公</p>	<p>自明和二年正月 至同三年三月</p>
---	----------------------	---------------------------

重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

長生殿裏春秋留不老門前日月遲

君か代ハ千代にやちよにさゝれ石の

巖となりて苔のむすまて

明和二年正月元日

重豪御判

右包紙

重豪公御内證御吉書白木御文書五番箱入

西一月十五日於江戸村上桂馬被相渡外由二而、児玉早之丞

差越外ニ付納置外事トアリ

(末)「近秘野卿」

明和二年乙酉正月二日朝賀 大家、二十一日

大家賜鶴如例、二月四日琉使至廳府、十九日島津大藏(父也)

賜稱靱負、二十五日免家老島津山城久、職允所謂也、(定)

三月四日招宴閣老松平右京大夫、西丸御附阿部伊豫(正也)

守・若年寄島居伊賀守等於芝邸(忠也)賀儲君生也、六日復

招松平出羽守等十八名、九日復招上杉大炊頭等二十二(宗衍)

名亦賀之也、四月五日招酒井雅樂頭・有馬中務太輔・(忠恭)

上杉大炊頭・有馬上總介・伊達遠江守・松平采女正等(頼徳)

於芝邸同散樂焉、十三日 大家使松平周防守康福齋物(頼福)

件來賜、公於邸令還之國、十五日朝謁拜恩賞如例、二十(竹也)

一日首途謁不動於護摩所、二十五日招請 淨岸君及眞(竹也)

含君爲奏散樂轉陸宴也、五月四日發芝邸、十九日抵伏(繼母女、姉也)

見邸、二十日微行京及宇治、二十一日抵大坂邸、二十

四日發邸、六月二十二日至府城、七月朔日訪山下・西

田・築地三館、還臨垂水邸、三日謁大雄・玉龍・松峯

之廟、五日臨築地亭貴儔・忠紀・貴澄三公子陪從、十

五日謁先廟於松峯・玉龍兩山、十九日復觀火花、二十

一日島津仲久健爲御家老、桂織部久、爲大御目附、關(中)

山新左衛門金暉・二階堂部行且爲御側御用人、二十五

日請招山下・西田・築地三君爲散樂宴、任官至城故也、
 八月十九日免國老島津觀負職、賜廩米百苞令終身食允
 所請也、九月六日免島津奎上(繼豐男、久家)於政府自後朝班宜列國老
 上命也、二十九日河野八郎左衛門通(吉)爲若年寄、島
 津十太右衛門久起爲大御目附、十月九日通(日置郡)改稱外記、
 久起後改大進、十一月二十六日夜如市來爲放鷹也、二
 十七日寅尅抵湊、卯尅唐船漂擊羽島、卯尅發港往而觀
 之、乃還市來、二十八日發自市來舍于伊集院、二十九
 日丑尅發館偃于横井(鹿兒島)、暮入尾畔(鹿兒島)、寅尅還府城、十二月
 三日首途謁諏訪及祇園如例、四日試散樂、始于卯尅、
 訖于翌卯尅、凡能二十番、狂言十番、二十五日狩于荒
 平、
 ○三年丙戌正月二十三日發府城、經大口路二十四日途觀
 金山、二十六日出于佐敷(肥後)、二月二十二日自兵庫徵行、
 觀布引瀧詣摩耶山、二十三日抵大坂邸、二十四日召見
 市人等、二十五日命竹田近江來練於書院許從士窺焉、
 二十六日召觀芝居、二十八日抵伏見邸、二十九日微行
 觀京、三月朔日復觀桃園至萬福寺、二日發邸、十九日
 抵芝邸、

152 重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露外處一段之御
 仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 正月七日 輝高判

153 全上

松平薩摩守殿

〔在口裏〕 松平右京大夫 輝高

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
 仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 正月七日 正右判

松平薩摩守殿 阿部伊豫守 正右

154 重豪公御譜中

寫正文在文庫

寫

年頭御太刀進上被致來々人之内、在京又老御使者等ニ、
御在府之節、年頭不在合人并江戸往來ニ付中途之人者、
向後出府又老下着之節、納太刀可被相願、

但江戸に詰合之人者有來通於江戸進上有之筈候、

右之通致通達外條、可承置旨御記錄奉行に可申渡、

(朱)

「明和二年」正月「八日」

(島津久定)
山城

右白木御文書五番箱中ニ有之

155

重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

明和二年正月十一日 重豪判

包紙ニ

西一月十五日李殿々郡山主右衛門兵被成御渡相納置外事
白木御文書五番箱入トアリ

156

重豪公御譜中

明和二年乙酉正月二十一日

大將軍家治公使ニ 上使間部玄蕃詮綽一賜御鷹之鶴一隻
乃拜ニ其恩旨一如先格、

157

扣正文在右筆所

なをく御表方御禮申上りへとも、いかほとも宜し
く御さたたのミそんしまいらせり、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

公方様 御臺様 若君様 萬壽姫君様益御機嫌よく御座
なされ、恐れなからめてたくそんし奉り、然れば上使
間部玄蕃を以て御鷹之鶴拜領仕り、有難き仕合にそんし
奉り、右の御禮申上たく、
御臺様 若君様 萬壽姫君様へも申上り、御序の折から
御前よろしきやうに御とりなしたのミ入そんしまいらせ
り、めてたくかしく、

(朱)
「明和二年」

まつ嶋さま

高をかさま

うら尾さま

いはせさま

たき川さま

むめたさま

清はしさま

る申給へ

全上

扣正文在家老座

御官位付口 宣・宣旨御頂戴之御使者高橋七郎右衛門京

都に被差登せ、

禁裏に御献上物、脇に被遣物等諸事御先規之通相濟、

口 宣・宣旨無滞相渡、去ル十一日御當地に致到着被遊

御頂戴外、跡に口 宣・宣旨・女房奉書一所に其許に被

差越事外得共、女房奉書相渡り儀間有之、其上御當地

に長く被召置りる者、出火等之節心遣及有之候付、此節

者口 宣・宣旨迄、先達に被差越方にも可被仰付哉と申

談奉伺外處、伺之通被仰出外付、新納市右衛門・橋口助

左衛門に宰領被仰付、足輕二人相付、先例之通三道中靜

一昨十九日差立被遣外、致着外ハ、御記録所に納方被申

渡る可有之外、右内箱者左中切封る差越外、委細爰

元御記録奉行より其元同役は問合申越せり、此段申越り、
以上、

〔^(奉)明和二年〕 正月廿一日

高橋^(禮志)此面

鳴津^(久忠)左中

鳴津^(久忠)山城殿

樺山^(久忠)左京殿

菱刈^(久忠)藤馬殿

鳴津^(久忠)主鈴殿

〔^(奉)御返答

本文被申越越致承知り、口 宣・宣旨去ル三日到着に

付、御家老中拜見仕、先例之通可致格護旨御記録奉行

に申渡り、右箱左中殿切封壹相返り、右付の御祝儀之

儀何分不相見得り付、先例相しらへり處、口 宣御頂

戴之節者其許にる者 御當人様迄に御役人限御祝儀申

上、爰元方者大御目附以上御役迄以書狀 御當人様に

御祝儀申上り筋に、去ル寅年 御元服御官位に付、口

宣御頂戴之節段に其元及問合外上、被申談相究り趣

書留相見得り故、大御目附以上御役より今日便御祝儀

申上り、書狀差越り間、猶其元ニある表右一件被相糺、弥相違も無之りハ、御披露頼存り、此段及御返答り、以上、

三月廿一日

川田伊織(國德)

鳴津左中殿

高橋此面殿〔

(本文書八一五八号文書ノ行間朱書ナリ)

160 重豪公御譜中

正文在文庫

年甫之加章、且如目錄饋給令祝着り、弥平安超歲珍重、此邊全然り、尚期後音り也、

(宋)「明和二年」正月廿八日

(近衛内前) (花押) No.1

薩摩中將とのへ

白木御文書五番箱中

寫

御目付御用御頼(忠 郷)

松平庄九郎様

右老大田播磨守様御役替ニ付、跡御用御頼被仰込り處、

御受合被成り旨申來り、此旨可承面々可申渡り、

但大田三郎兵衛様御事、播磨守様と御改名被成り、

正月

山城

右之通被仰渡り間致通達り、

正月廿九日

仁禮仲右衛門(勘定奉行、仲古)

右包紙年間ナリ

山城殿に仁礼仲右衛門御取次ニ而御渡被成御書付書通トアリ

162 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

今度

(宋)御付紙

有章院様五十回御忌御法事付、妻より御香奠獻上爲仕度

(徳川家總) 白細書致差上候様可被致候

御座り、此段相同申候、以上、

(宋)「明和二年」二月十九日

御名

(宋)「右朱書之通西二月廿八日御係之御老中松平周防守様より御留守居被召呼、以御右御法事御係松平周防守様立御留守居東郷源五持參、御取次小田付紙被仰渡候」
五左衛門立相付差出り處、御受取被成、追而御挨拶可被成旨同人を以致承知り、

163 重豪公御譜中

扣正文在家老座

御官位付御恩赦者可被仰付候、先年

慈徳院様御代大赦被仰付本文被旨趣題一、承知仕、大御目附互相違置候、以上得共、此節若其通ニ若被仰

付間鋪ハ得共、御官位付ル若重キ御事ハ故、先例御祝

儀事付、御恩赦被仰付ハより格別厚可被仰付ハ間、申

談御國元ニ申越、大御目附ニ申渡相しらへ奉伺ハ様

御直ニ承知仕ハ、先年 御入興并

（雜恩）有邦院様中將御官位之節ハ、御恩赦被仰付候筋相見得

ハ、然共此節若右通被 仰出ハ付、爰元ニハ吟味之趣

左之通、

一 牢舎者・遠流者・百姓・下人・下女・寺入、親族御咎

目ニハ親類御預ケ、又若逼塞者之内、先例を以御恩赦

可被仰付者若自其通可有之事ハ、親族御咎目者先例御

恩赦不被仰付者ニハ若、本人之依科吟味可有之哉、相

手有之者御恩赦被仰付ハル若意恨ハ有之、後日難致儀

表可有之哉、且又藏役人等私欲依科若御恩赦不被仰付

旨被 仰出置ハ哉、然共親族之内出家弟子之願申出ハ

ハ、吟味可有之哉、

一 遠流者・寺入・逼塞・遠慮等之者、近月中ニ若自御免

被仰付等之者御恩赦被仰付ハル若、厚筋ニハ若無之ハ

條、縱令一ケ年若半年、二ケ年若壹ケ年、三ケ年若一

ケ年半過ハハ、御免可被仰付哉、夫共科之依根元吟味可有之哉、

一 奉公障之者ハ、右同斷、小普請被仰付置ハ者ハ及多年

ハ者若吟味可有之哉、

一 牢込者之内、先年若御恩赦ニハ出牢被仰付、無間若盜

等ハたし重科者相成、却ル御仕置之障ニハ表相成事ハ、

此等之儀若猶吟味可有之ハ、

一 大罪之者若御仕置之事ハ間、御免被成間敷ハ、第一親

族御咎目等之者可成程御免可被成ハ、

一 重御恩赦被仰付ハ儀、御一代之内毎度無之事ニハ、格別

被 思召上ハ間、先例被相替厚可被仰付旨被 仰出ハ

條、右之趣を以可被致吟味ハ、

右申越ハ條被申談、大御目附ニハ若被申渡、相濟

ハハ、御中途ニハ可被相伺ハ、若しらへ急ニハ不相濟

ハハ、拙者致着ハ節委曲可申達ハ間、其趣若大御

目附ニハ可被達置ハ、此段申越ハ、以上、

（采）「明和二年」二月廿九日 （采）「上高橋此面

（采）三月廿一日

鳴津山城殿

樺山左京殿

165

全御譜中

(朱)
下 菱刈藤馬殿
川田伊織殿
島津主幹殿

是歲值二

(徳川家継)

有章院殿五十回忌辰、修法事於増上寺、是故春三月朔日、使三家臣岩下佐次右衛門方峯、獻納香燭銀十枚焉、

166

重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守

(徳川家基)
若君様御誕生之爲御祝儀振廻、三月四日之晚何々可相越
外、

(朱)
「明和二年」

167

全御譜中

嚮、是

若君生誕於江府、仍奉賀之、招請老中於芝邸、越

168

重豪公御譜中

正文在文庫

今茲三月四日松平右京大夫輝高・阿部伊豫守正右、若年
寄鳥居伊賀守忠孝、(忠意)奏者番土井大炊頭利里・牧野遠江守
康滿及庶達官等數輩來于芝邸、乃饗待焉者如先闕、
速各退去、即如輝高・正右之宅而謝之、

營中進使者序寄一翰外、青陽賀儀珍重、弥可爲平安、此
邊無異外、仍如目錄令贈與之外也、

(朱)
「明和二年」

三月八日

薩摩中將とのへ

(近衛内前)
「花押」
No.1

169

重豪公御譜中

同年三月十三日重豪以官位昇進、故賀之、招松平中務
大輔義敏・松平掃部頭勝長・同彈正大弼勝當・有馬中務
大輔頼種・佐竹右京大夫義敦・有馬上總介頼貴・南部信
濃守利謹其餘親戚知己於芝邸、設慶燕、催猿樂而饗待
焉、

170

全御譜中

扣正文在江戸家老座

今度於日光山

(卷)御付紙

御法會付、妻より献上物之儀可奉伺外處、此節服中之儀

服明可被伺候一

故如何可仕外哉、此段相伺申外、以上、

(卷)「明和二年」三月十七日

(鳥津重忠) 松平薩摩守

171 重豪公御譜中

正文在文庫

營中進使之序寄一翰外、青陽賀儀珍重、弥可爲平安、此邊無吳外、仍如目錄令贈與之外也、

(卷)「明和二年」三月十九日 (花押 No.1)

薩摩中將とのへ

172の1 白木御文書五番箱中

覺

明和二年酉三月十九日川上彌五太夫御取次を以、小松式(久)部殿外、御牧之内下甌野・顯娃唐松野右兩御牧取駒少、(清)脚柄不宜被召疊外、此已前方御領内御牧數爲相究儀表無之、尤外御牧一往被召疊、又考御取立之節

公邊御書出無之外故、此節之儀表先例之通外條、此旨承

置外様御記錄奉行に可申渡旨式部殿外被仰渡、御書付壹

通御渡被成、吉田用右衛門相受取之、白木御文書五番箱

に納置之外、右に付式部殿外口達を以被仰渡外趣考、右

兩御牧被召疊外付る考、兩所役人共に考右御書付之趣考

不被仰渡、牧柄不宜、近年取駒表少、第一所之困窮に相

成及難儀外に付被相疊外、一往被相疊にるも無之、右牧

場考作職等表仕替外付、右之通此節被相疊外旨爲被仰渡

由承知仕外、尤後年巡國上使之節、牧數之儀に付自然御

尋も有之外節、右御書付之趣を以吟味之上御答可申出事

外、内々所致困窮爲被相疊筋に考無之外間、右之考を

以可申出旨、委細致帳留可召置旨是又致承知外事、

172の2 寫

一下甌野

一顯娃唐松野

右兩御牧取駒少、野柄不宜被召疊外、此以前より御領内御牧數爲相究儀表無之、尤外御牧一往被召疊、又ハ御取建之節 公邊御書出無之外故、此節之儀表先例之通外條、此旨

承置_レ様御記錄奉行_レ可申渡_レ、

三月

(小松清香)
式部

右包紙

明和二年酉三月十九日小松式部殿_レ被仰渡御書付壹通、御記錄奉行覺書壹通トアリ

173 重豪公御譜中

同年四月十三日以_二上使松平周防守康福_一、賜_二歸國之暇_一蒙_レ旨、恩賚如_二先格_一、同日

若君亦由_二先蹤_一有_二恩賜_一、即使_レ康福兼務_上焉、即日詣_二執政各第_一謝_レ之、同十五日應_レ教登_レ營、於_二黒書院_一見_二於

家治公_一、拜_レ賜_二休暇_一之辱_上、時蒙_二御懇之旨_一、既_二賜_一御馬一匹_一拜辭而退、登_二西營_一亦拜_二其賜_一矣、既還、而有_二微恙_一、以故島津又吉郎久般爲_二重豪名代_一、往拜_二老中之宅_一、是日在府家老島津左中久金捧_二獻物_一拜_二謁台顔_一、亦登_二西營_一獻_二品物_一奉_レ謝_二拜_一、台顔_一之辱_上矣、

174 正文在文庫

在所_レ之御暇被_レ下、拜領物被 仰付、近々、御目見可被

松平薩摩守

仰付_レ、

(采)
「明和二年」

175 正文在文庫

御暇_二付

松平薩摩守

若君様より拜領物被 仰付之、

(采)
「明和二年」

176 正文在文庫

明日五半時登

城、御暇之御禮可被申上_レ、以上、

(采)
「明和二年」 四月十四日

松平薩摩守殿

(正右) 阿部伊豫守
(康福) 松平周防守
(輝高) 松平右京大夫

177 正文在文庫

家來一人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

〔采〕
一明和二年〕

178

正文在文庫

御馬青
五歲

一疋

〔采〕
一明和二年〕

179

東征戰亡之碑

是レ明治戊辰ノ役戰亡ノ碑文ナリ
此處ニ編入スヘキ者ニアラス

慶應之役其

皇運再盛之機乎、而死于是役者其不幸中之幸者乎、二
年秋八月、徳川慶喜上書解將軍職、脱 京師入大阪城、
與會津城主松平容保・桑名城主松平定敬陰蓄異圖、明
年春正月遂舉兵分路北上將襲 京師、我薩暨長州諸藩
兵奉 詔、邀之伏見及鳥羽俱擊、敗其先鋒、賊軍望風
而遁、

皇上震怒乃 命熾仁親王爲大總督、帥諸藩兵二月發 京
師、由三道而進大軍抵江戶、慶喜伏罪獻城請降、而餘
黨數千猶據東叡山、乃移兵擊屠之、容保前既逃歸、與
桑名等兵嘯聚奥越之間、以拒 官軍勢倏頻熾、

朝廷益發兵、由東北海陸合勢討之、深入敵地、時我兵多

爲先鋒、攻城野戰莫不捷者、秋八月諸軍遂入會津攻若

松城、容保窮蹙致軍門降、於是奥羽賊黨盡服、而定敬

竟不知所之餘賊遠逃北裔、旣而復屯集於箱館、

朝廷乃更遣兵往勦之、至今年夏邊陲悉平、抑是役也我藩

征行者凡八千餘人、戰亡者五百廿四人、

朝廷下

詔、悉優恤之、而其死於 京畿者我公嚮已收骸、葬之相

國寺以立碑、今又招東征戰亡者之魂、臚列姓名拾五碑

立之 京師東福寺、命臣惟宏紀其梗概鐫之石、伏惟方

叛亂初起之際、海內人情涵々、然而 天戈所麾元兇束

手、

皇威所加荒陬臣順此、固雖由

皇家中興之隆運然非諸藩協心、勤

王將士宣力致死、則戡大亂奏偉績、曷至於若是之速、

乃桓碑深刻、傳戰亡者之姓名於無窮、嗚呼苟死者而有

知可以瞑也矣、

明治二年次己巳夏五月上浣
薩摩儒官臣今藤惟宏謹撰

西鄉隆盛謹書

右石摺書之一軸アリ写也

180 重豪公御譜中

是歲值^二

神祖廟百五十回忌^一修^二法會於野州日光山^一、是故使^二家老高橋此面種壽登山^一、四月十七日獻^二納太刀一腰・馬代黃金十兩于日光山本坊^一、留守居東郷源五實孝副^二於種壽^一之先容焉、而以^二法會畢^一故、同月二十一日使^二側用人島津矢柄久壽^一、飯為登^レ城、獻^二二種一荷于

家治公、又使^二勝手方用人岩下佐次右衛門方峯^一、同久登^レ城、

一種一荷于 儲君、以^二用人格佐久間九右衛門盛邦^一、亦同久壽

同品于

御臺樣上慶賀焉、

181 白木御文書五番箱^{二十中}

明和二年酉四月於日光山

權現樣百五十年回御法會付、御使者被差越^外一卷

首尾

鳴津左中久金

高橋此面種壽

右蓋紙ニアリ一冊トス

(の1)

松平薩摩守

來年四月於日光山御法會付^ル、御太刀・御馬代黃金十兩以使者、四月十七日日光本坊^ニ可有奉納候、使者熨斗目長袴可爲着用^外、刻限之儀^者於彼地可相伺候、

閏十二月

(の2)

來年四月於日光山

(本)本文御番頭御使者を以被遊御献上候旨、御使者并首尾懸五申渡候事、權現樣百五十回御忌之御法事相濟爲御祝儀献上之覺

公方樣^ニ

二種一荷 拾萬石以上

一種一荷 壹萬石より九萬九千石迄

同斷 拾萬石以上嫡子同隱居

御臺樣

若君樣^ニ

一種一荷宛 拾萬石以上

一種宛 壹萬石より九萬九千石迄

同斷 拾萬石以上嫡子同隱居

右之通在江戸并在國在邑之面々、來年四月廿一日以使者、朝六時より五半時迄之内
公方樣^ニ之献上物^者 西丸御玄關より

御臺様江之獻上物者 平川口御門番所迄可被差上り、以

上、

閏十二月

日光山御法會付る之伺御機嫌獻上物者無之之事、

(の3)

〔季〕
一覺

一御書付二通

但一通

來年四月於日光山御法會付る、御太刀・御馬代・黃

金十兩以御使者御獻納可被遊旨ニ付

一通

右同斷付御法事相濟、爲御祝儀御獻上物之儀付

一同壹通

但御法會付る之伺御機嫌御獻上物無之旨

松平右近將監様

御用人佐々木丑藏

右より被成御達外儀有之之間、今日中私共内壹人罷出
り様御用人中より切紙到來仕私罷出外處、右御用人を
以御渡被成之間、櫻田詰御步行大橋軍次を以差上申り、
以上、

閏十二月廿八日

(留守居、實孝)
東郷源五

此面様」

(の4)

以廻狀致啓上り、然者當四月日光山御法會之節、御獻納
御使者勤ニ付る、御組合中様御一統被仰合之儀、此間追
々何様御内談之通別紙相認差廻申り、此上思召之儀無
御心置被仰聞、御同様被仰合度奉存り、御寄合席ニ有る
緩々御熟談及難相成御座り付、是又御相談之上以廻狀得
御意外、御順達被下、留之御方様より私共兩人内江御返
却可被下り、以上、

正月廿六日

笹生彦五郎

江副金兵衛

當四月日光山御宮百五十回御法會之節、御獻納之御使
者勤付、御組合御一統被仰合有之、可然之旨何様被
仰談、御相談之趣左之通、

一御使者御役柄之儀者勿論、御家々様御先例次第之御事
御座り、正徳五年三月中井上河内守様にて御書付御渡
被成り節ハ、使者供人小勢可仕旨御用人口達を以被仰
渡り、此度右御沙汰無御座り得共、當時者猶更萬事御

省略之御風儀と申、第一日光道中甚込合候事之由不得
素、相成丈供人被相減下儀可然旨、何々様御相談御座

外、

本使御家老勤ニ下ハ、供廻左之通

一侍刀筒持共

五人

一先供

三人

一先供

五人

一駕籠

四人

一駕籠

四人

一鎗二本

貳人

一對鎗

貳人

一草履取

壹人

一持鎗

壹人

一長柄傘

壹人

一草履取

壹人

一拵壹本

四荷四人

一長柄傘

壹人

合貳拾五人

一挾箱二

貳人

外ニ駄荷

一具足櫃

壹人

副使供廻左之通

一牽馬壹疋

口取貳人

一若黨

三人

一沓籠

壹人

一駕籠

四人

一合羽籠

五荷五人

一鎗壹本

壹人

合三拾人

外駄荷

本使番頭勤ニ下者供廻左之通

一侍刀筒持共

四人

一具足櫃

壹人

一挾箱壹

壹人

一長柄傘

壹人

一草履取

壹人

一合羽籠

貳荷貳人

合拾四人

外駄荷

右之通供廻被仰合之上

御家々様ニ由猶又人數被相減レ儀、御勝手次第之儀ニ
外、相過不申様被仰合外、

一副使同道前々御留守居ニて御勤之御家々様多分ニ相
聞申外、此度御先例之通ニ可有御座外付、於日光表御
勤向之儀ニ、右御同道御勤之御方々様追々被仰合可有
御座外事、

一獻納物入外長持附副人、其外取量之役人被差越外儀等
者、御銘々様御先例又者御存寄次第之儀ニ御座外事、

一日光山ニ由御獻納其外御勤向之節、御使者之刀持并手
替共ニ貳人上下着用ニ可有御座外哉、若又駕籠脇不殘
上下着用ニ外哉、先例之留表御座外ハ、被仰聞度存外、
何分御一統被仰合可有之儀御座外事、

但副使之刀持者上下ニ不相及、袴羽織ニ由可相濟外

哉之事、

(念) 本文付此方便者家老役相勤候、

一正徳五年ニ由右使者四月十一日江戸出立、十四日日光
一右使者日光山ニ由獻納物其外勤向之節、刀持并手替共ニ貳人上下着用爲致
到着、十七日八時御本坊ニ相詰外様御差圖有之、獻納

(05)

候、其外駕籠脇之儀者羽織袴着用爲致候、副使之方持者不及上下、羽織袴
相濟、翌十八日出立、廿一日ニ致歸府外由、舊記ニ相
着用爲致候、

見申外、右日積り御先例、御家々様御同様御座外哉、

一正徳之節者四月十二日江戸出立、同十七日御方々御納相濟、翌十八日日光
御舊記御吟味可被仰聞外、此度尚又被仰合可有御座外
出立同廿日致歸府候と旧記ニ相見得候、此節も先例之通相心得罷在候、

事、
一副使之儀者中途罷不相用筋被仰談有之候處、此方之儀先格も有之、幕之儀
右之外ニ及當時被仰合可然御心付之儀、其外御先例致
者取留目印ニ相成候間、何れも様々御座之上、此方ニ由、兼相用候様致度
相違思召表御座外處者御銘々様無御覆藏以御付札被
候、

仰聞可被下候、何分御内談御一統被仰合度奉存外、
以上、
右之通三月十七日寄合之節年番江相断置候事、

正月 江副金兵衛
三月 東郷源五郎
笹生彦五郎

別紙二通、組合年番より廻狀ニ由申來外間差上申外、以
上、
二月十一日 有川勇馬
(留守居、貞厚)

此面様

(06)

當四月於日光山

(念) 本文於御家老座直申渡候處、御請被抽出、首尾係置者下佐伏右衛門を以申
權現様百五十回御法會ニ付、御使者
渡候、即日書舉濟、

西二月十一日 鳴津左中
(久念)

右之通被仰付外條、可申渡旨 御意候、

(07)

二月

御取次龍衛
(川上久品)
(高橋種春)
此面江

鳴津左中
高橋此面
伺

(朱)御留守居 東郷源五
御留守居

(朱)西二月十九日
本文稅所次郎八病氣ニ付、即斷申
出被成御免、代り上村善助江被仰
付候旨申渡、首尾書を以申上候事
御留守居付 橋口與三次
首尾此面

(朱)右者當四月於日光山 雜垣様百五
十回御法會ニ付、日光江被差越候
條、此旨首尾係江も可申渡候、
二月 左中
御家老座筆者與力兼役
稅所次郎八

(朱)西二月十二日
御本文之通銘ニ申渡候處、御請申
出候、首尾係江被申渡候、
取次 岩下佐次右衛門
御獻納物幸領
津留五右衛門

右者當四月於日光山

(朱)御家老座筆者 稅所次郎八
權現様百五十回御法會ニ付可被差越候哉、先例相しらへ
右者轉律左中殿當四月日光江御使者被仰付候付、与力兼役ニ被差越候條、此旨
此段奉伺外、以上、
申渡、首尾係へも可申渡候、

二月
(朱)西二月十二日
御本文之通稅所次郎八江申渡候處御請申出候、左餘而首尾係へも申渡候、
取次 岩下佐次右衛門
此面一

(朱)
一本文達 貴聞外處、伺之通可被差越旨 御意候、

二月十三日 御取次 二階堂部

(09)

大目付江

日光山御法事

初日 四月七日

中日 同十一日

結願日 同十六日

(010)

大目付江
覺

一今度於日光山御法事中前之通式日立合内寄合可被仕
外、但御法事之初日・中日・結願日此三ヶ日者可有延
引外、勿論拷問・手鎖、或籠舍、或繩掛外類之儀者可
爲無用外事、

一御法事中、普請・鳴物・祭禮・法事等不及相止外之事、
以上

二月

(011) (012)

松平右近將監殿御渡外御書付寫貳通相達外間、被得其意
(朱)本文御題狀并御書付寫三通、大目付池田筑後守様より被邊候付、本表者有馬
無遲滯順達留方池田筑後守方江可被相返外、以上、
中務大輔様榮在順達任、写差上申候、以上、

二月十七日

二月十七日

大目附
有川勇馬

御名 奉
此面様

松平(伊達重村)陸奥守殿

有馬中務大輔殿(頼直)

伊達遠江守殿(村族)

眞田伊豆守殿(幸弘)

鍋嶋攝津守殿(直寛)

秋月山城守殿(種茂)

大田原出雲守殿(友清)

毛利能登守殿(匡満)

織田丹後守殿(輔宣)

堀田梅之丞殿(正寛)

右留守居

(の13)

白銀二十枚

去御方

右者此節於日光山御法會ニ付、可被差越旨先達而御仰渡

置、去ル十五日御暇、拜領物有之、來月四日比御當地出

立之由爲知御座外間、右之通被遣外筋も可有御座哉と

申談、此段申上外、以上、
(卷二)西二月廿一日右之通御留守居申渡、御使番へも申渡候、

二月十八日

岩下佐次右衛門
有川勇馬
佐久間新左衛門

(の14)

本文似寄外例ハ見當不申外得共、御内用御頼之御方ニ御座外間、琉袖三反・國分煙草五斤被遣可然旨吟味仕外、以上、

二月十九日

御使番

(卷二)本文達 貴聞候如何之通可被仰付旨 御使番、
本文御使番吟味之通可被遣哉、奉伺外、以上、

二月

高橋此面
御取次 二階堂藤一

(の15)

當四月於日光山御法會付、御太刀・御馬代献上之使者日光江差遣外節、道中通し人馬ニ可差越外、

右之通日光江使者差遣外面江可被達外、以上、

二月

(の16)

松平右近將監殿御渡外御書付一通相達外、被得其意御同席中不殘様可有通達外、答之儀老先々銘々より不及挨拶、各より可被申聞外、以上、

二月十八日

筒井大和守
(大目付、忠雄)

上杉大炊頭殿

松平内藏頭殿
(池田治政)

右留守居

(の17)

猶以御嫡子様・御隱居様被成御座ハ御方様ニ者、御附衆迄御通達可被下リ、以上、

(の18)

以廻狀致啓ハ、唯今筒井大和守様より御廻狀并御書付寫（余）大御目筒井大和守様より之御書并御書付寫、通上杉大炊頭權衆松平壹通相達ハ内間、大炊頭・内藏頭ニ申聞ハ處、御同席様之各様迄、自拙者共通達ハ様被申付ハ、依之右寫差廻申ハ、御答之儀者御銘ク様より不及御挨拶、御通達相濟ハ上拙者共ハ大和守様ニ御届可仕ハ、右廻狀數通相認持廻申付ハ、以上、

二月十八日

松平内藏頭内

中村善右衛門

長谷川九兵衛

松平大炊頭内

舟橋源太左衛門

笹生彦五郎

御次第不同

御名

御留守居中様 御廻狀之趣薩摩守ニ可申聞候

松平相摸守様

御留守居中様 御廻狀之趣相摸守國元ニ可申越候

松平陸奥守様

御留守居中様 御廻狀之趣陸奥守國元ニ可申聞候

松平大和守様

御留守居中様

(の19)

於日光山御法會付、東叡山御宮ニ參詣之面ニ日限之覺

四月

十七日 四品以上并御譜代衆・外様大名・高家衆・諸衆・御奏者番・菊間縁類詰、何レ嫡子共、諸番頭・諸物頭・布衣以上御役人、醫師可爲參詣事、

詣事、

十九日 寄合・諸御番衆・小役人可爲參詣事、

右朝五時より七時迄之内、諸大夫以上者束帶、布衣之面ニ并法印法眼者其裝束、無官者長袴又者半袴ニ可爲參詣、牽馬同勢二王門前橋之外ニ殘置可申候、以上、

二月

(の20)

猶以御嫡子様被成御座ハ御方様者、御附衆迄御通達可被下リ、

以廻狀致啓ハ、今日松平右近將監様ニ被召呼、御用人小堀十太夫を以御書付壹通被成御渡、御同席様方ニ致通

達ハ様被仰渡リ付、右寫相廻申外、尤御承知之上御銘、様より右近將監様ハ爲御請御使者可被差出と奉存リ、且御在國御在邑之御方様者御承知之上、御請御勤之儀者御銘、様御先例之通御取計可被成儀と奉存候、廻狀數通相認持廻申付外、以上、

二月廿四日
細川越中守内
中川郡兵衛

松平陸奥守内

谷田作兵衛

松平出羽守内

布施源兵衛

藤堂和泉守内

金谷三郎左衛門

松平薩摩守内

東郷源五

御次第不同

上杉大炊頭様

松平大膳大夫様
(毛利重就)

松平信濃守様
(鍋島重茂)

伊達遠江守様
(村松)

松平安藝守様
(淺野宗恒)

松平大和守様
(堀)

右此御方より御通達之分

右藤堂和泉守様衆より御通達之分

松平播摩守様
(頼濟)

宗對馬守様
(藤善)

佐竹右京大夫様
(義波)

松平大學頭様
(頼寛)

立花左近將監様
(鑑通)

松平左京大夫様
(頼淳)

松平筑前守様
(黒田経高)

松平左兵衛佐様
(直純)

丹羽若狹守様
(高柳)

右松平出羽守様衆より御通達之分

松平土佐守様
(山内豊敷)

有馬中務大輔様
(頼楨)

松平阿波守様
(録須賀重喜)

松平相摸守様
(池田重寛)

松平内藏頭様
(池田治政)

松平光丸様

右松平陸奥守様衆より御通達之分

松平加賀守様
(前田重教)

松平越前守様
(重寛)

(の21)

右細川越中守様衆より御通達之分

御書付一通

〔朱〕
一覺

但於日光山御法會ニ付、東叡山に御參詣之儀付

日光御法會御係

松平右近將監様

御用人

小堀十太夫

右より被成御達外儀有之之間、今日中私共内壹人罷出外
様、御用人中より之切紙到來仕、私罷出外處、藤堂和泉
守様・松平出羽守様・松平陸奥守様・細川越中守様御留
守居こも同前被召呼、右御書付銘々被成御渡、御同席様
方ニ致通達外様、右御用人を以被仰渡外付、別紙御名分
之通以廻狀通達相仕出申外、尤御承知之上、御銘々様よ

松平中務大輔様
松平掃部頭様

松平彈正(勝意)大弼様

松平上總介様
(淺野重遠)

松平備後守様
(前田利道)

松平出雲守様
(前田利幸)

(の22)

り右近將監様は、爲御請御使者被差出事外故、此御方様
御請之儀者時刻見合相勤、別紙首尾書を以申上外、右御
書付櫻田詰御歩行税所彌兵衛を以差上申外、私相勤外首
尾申上外、以上、

二月廿四日

此面様

東郷源五

追ふ申上外、御通達相濟外上、明朝右近將監様は御
届申上筈御座外、此段及申上外、以上、

〔朱〕
一日光御法會御係

松平右近將監様

御取次

石倉十内

右に參上仕、日光御法會ニ付東叡山 御宮に御參詣之儀、
御書付を以被仰渡、御承知被遊外、御請之御使者御口
上御相應申達外處、御請之儀御座外間記置、追ふ可申上
由右御取次より承申外、私相勤申外首尾申上外、以上、

二月廿四日

東郷源五

此面様

(の23)

大目付は

松平右近將監

一 今度日光に發足付、諸向方爲見舞被相越、且附使者等堅斷之事、

一 旅中并彼地迄、飛札且音物無之様堅斷之事、

右斷一通り申達外筋ニ者無之外、堅用捨有之外様致度外事、

別紙御書付松平右近將監殿御渡被成り由にて、大目付筒井大和守殿被遣り間、寫進申候、御同席様方は御通達被成可被下り、以上、

三月八日 江坂松庵

御名内御留守居中様

(朱)

「松平右近將監様今度日光に御發付、右近將監様方

大目付筒井大和守様は御渡被成り御書付、大和守様

方御防主組頭江坂松庵は被遣り由にて、右御書付之

寫松庵より被差越、御同席様方に致通達外様承り間、

廻狀を以通達仕り間、別紙二通相添此段申上り旨、

三月十日佐久間新左衛門より左中に申越り事」

今度於日光山

御法會付、妻より獻納物之儀可奉伺り處、此節服中之儀

故、如何可仕り哉、此段相伺申候、以上、

(の24)

三月十七日

(萬律重家) 御名

(の25) 一 御伺書一通

但 此度於日光山 御法會付、

御前様御服中故、御獻納物如何可被遊哉之御伺

松平右近將監様 御用人 久松覺兵衛

右に持參仕差出、先年百回御忌 御法會之節之御先例

相知不申段口達にて申達り處、今朝右近將監様早御登

城被成り付、御退出之節可申上り間、右之御伺書覺兵

衛預置り旨承申り、今朝私相動り首尾申上り旨、三月

十六日左中に佐久間新左衛門申越り事、

一 御伺書一通

但 今度於日光山 御法會付、從

御前様御獻納物可被遊御伺り處、御服中故如何可

被遊哉之旨御伺付

松平右近將監様 御取次 石倉十内

右に昨朝同斷之御伺書持參仕差出、其段申上置り處、

御文言之内思召寄有之、右之御伺書昨夕御用人方爲持

差越ハ故、則右之趣申上ハ處、御認直シ夜前爲御持被

下ハ付、今朝持參仕差出ハ處、御受取被成ハ由右御取

次を以被仰聞ハ旨、三月十七日左中ハ佐久間新左衛門

申越ハ事、

御伺書一通

但今度於日光山 御法會付、從

御前様御獻納物御服申故、如何可被遊哉之旨御

伺ニ付

松平右近將監様

御用人

佐々木丑藏

右より被成御達ハ儀有之ハ間、今日中私共内壹人罷出ハ

様、御用人中ハ之切紙御式臺ハ到來之由ニて、御使番よ

り差越ハ付、私罷出ハ處、御伺書ニ御付紙之通御用人を

以御渡被成ハ付、櫻田詰御歩行野村源次を以差上申ハ、

御承知之上御請之儀、夜更ニも可相成ハ間、明朝可相勤

哉之旨内談仕ハ處、明朝相勤可然旨承申ハ間、每之通表

方御使者を以明朝御請可被仰達ト奉存ハ、此段申上ハ、

以上、

二月廿七日

佐久間新左衛門

左中様」

(の26)

覺

一日光道中本使・副使之泊宿ニ常々高挑燈壹張ツ、上

ニ者御主人様之御紋付ケ、下ニ者銘々之紋付ケ、竿な

しニて灯シ、宿々門口ニ夜中釣リ置申候事、

一宿札長サ一尺卯寸幅四寸率
書紙屑書御名下ニ何某

但宿札副使委同斷、少シ小振ニして、

一右道中本使・副使供廻人數等之儀者、先達ハ御廻達有

之、何れ姿様被成御承知候通御座ハ、然處於日光山供

廻人數、正徳五年趣左之通御並様方之内、御舊記ニ相

見得申候由、

於日光山供廻

本使
番頭

一若黨貳人

一鍵壹人

一挾箱壹人

一草履取壹人

一合羽籠壹人

於日光供廻リ

副使
留主居

右同斷

右之通ニ付、日光ハ御參着之上老宿坊ハ諸事御山内之儀悉御聞合、御互ニ爲御知合有之、何事も御同様ニ有御座度奉存外事、

正徳五年四月日光山ハ御並様方ハ御獻納之御太刀・

御馬代御仕立等之儀承合外處左之通、

一御奉納之御太刀ニ振代リ共

一御馬代金壹枚外ニ代リ共

一御太刀箱壹ツ白木桐

但かふせ蓋緒付、鉄煮黒メ、緒ねりくり打、茶色ニ

して御太刀箱寸法長サ三尺八寸、横六寸、深サ貳

寸七部、右孰表内法、

一淺黄木綿大風呂敷壹ツ

但單ニして御太刀箱包外分、

一御太刀臺壹ツ白木外ニ代リ一ツ

但長サ貳尺五寸、幅七寸五歩、高サ足共八寸、檜ニ

重くり、

一御目錄上箱壹ツ白木桐

但かふせ蓋ニして身九寸五歩四方、深サ壹寸五歩、

緒付之、鉄煮黒目、緒ねりくり打、茶色ニして、

一木綿風呂敷壹ツ御目錄箱
包候分

一御馬代之臺壹ツ檜外ニ代リ壹ツ

但常之通ニして高サ足共八寸二重くり、御馬代居外

所くり込にして、

一白木長持壹ツ檜外臺共

但御太刀箱・御目錄箱臺共入組外やうにして、尤大

差札一枚、錠鍵共、

一長持之油單壹ツ

但木綿紺ニ染、御家々之御相印付申候事、

一長持桐油壹ツ

但御相印右同斷、

以上

(027)

於日光勤向

松平右近將監様

本使・副使同道參上參着御届之口上申述外事、

御同人様

右同斷同道參上御見廻之口上申述外事、

寺社御奉行

酒井飛騨守様忠
香

土岐美濃守様定
經

右同斷同道參上御届御見廻旁口上申述外事、

大御目付

筒井大和守様(忠雄)

右同斷

御目付

夏目藤四郎様(信政)

新庄織部様(直宥)

松平縫殿頭様(忠香)

副使參上御届御見廻旁口上申述外事、

日光御奉行

神尾若狹守様(春也)

淺野美作守様(氏從)

副使參上御届一通り之口上申述外事、

一 左之御衆様は本使・副使同道參上使者相勤申外事、

(朱)本文日光御門主様此御方之而若干菓子一箱被遣候
日光御門主様

兩種

包昆布

(朱)本文并伊掃部頭様・酒井備前守様・小出信濃守様・田沼主殿頭様此御方にてハ御使者勤不相見得候
御名代 井伊掃部頭様

若君様

御名代 酒井備前守様(忠仰)

小出信濃守様(英持)

田沼主殿頭様(靈次)

一 御使者柄之儀者御家格を以贈物左之通

御宮別當

大樂院

白銀五枚白木臺

上野執當

覺王院

(朱)「日光御宿坊江被遣物此御方にても本文之通」
信解院

(朱)「本文之外 大猷院様御別當・御本坊留守居江銀三枚ツ、日光目代江
同三枚、御獻納物之節日光在役之御徒目付兩人江金子三百疋宛被遣候

日光宿坊

右同五枚

日光江被差越外得者左之通贈物御

座候、

上野宿坊

白銀三枚

國物一種

一 御太刀奉納之刻限前晚右近將監様江相納外事、

一 奉納相濟、口上にて右奉納相濟外御届、且明朝出立仕

にて可有御座旨、右近將監様江御届仕外事、
(朱)「金子五百疋 日光宿主 武井岡右衛門」

一左之御衆様は老御届并御見廻之使者勤等、御一統左之
通被仰合相極事、
(朱)一 同三百足 遊城院同宿
但御太刀奉納之節案内被是致世話候付

御見廻 町人平四郎
御勘定奉行様

御届 日光御目代様
但御役人様方御旅宿并致案内候付

御見廻 御作事奉行様
(朱)一 同百足 武井岡右衛門家來寄人
但日光滞在申致世話候付

右之通先例ニ相見得申候、
三月 東郷源五

(の28)

猶以刻限付を以早く御順達、御留りより九郎左衛門
方は御返可被下り、尤廻状二通ニ相認仕出申り、以
上、

以廻状致啓上候、然者此度於日光御勤向、前々之御様子
御並様方承合候處、御舊記之趣夫々御書付被差出り付、
昨日御寄合席にて猶又御一統被仰談相極事、則別紙三
通差廻申り、尤思召寄も御座りハ、御下書ニ可被仰下
り、此段爲可得御意如此御座り、以上、

三月十八日午刻

永田九郎左衛門

中川郡兵衛

來月於日光山 御法會付、私事日光は被差遣り旨被仰付

り、依之外足輕貳人被召付被下度奉存り、此旨被仰上可
被下り、已上、

三月十五日

橋口與三(備守清也)次

東郷源五殿

(の30)

右申出趣承届り、正徳之節も外足輕貳人被召付り先例之
由御座り間、此節奉申出之通被仰付被差越度奉存り、此
段申上り、以上、

三月十八日

東郷源五

(の31)

覺

一御太刀二腰

但上り内一腰者代り、

一御馬代金貳枚

但上り内壹枚代り、

一御太刀受臺貳ツ

但檜白木上り、二重くり、長サ貳尺五六寸、幅七寸

五部、高サ足共八寸、

一御馬代金受臺貳ツ

但白木上り、鏡板有、高サ足共八寸、二重くり、

一 御太刀箱壹ツ

但 桐白木、やろうふた、鉄煮黒メ、もへきねりくり
緒相付、長サ三尺八寸、横六寸、深サ貳寸七部、
皆共内のり、

一 御目錄入箱壹ツ

但 桐白木、やろうふた、豎横九寸五部四方、深サ壹
寸五部、緒付之、鉄煮黒メ、もへきねりくり緒付、

一 淺黄木綿大風呂敷壹ツ

但 單御太刀箱包用、

一 同壹ツ

但 單御目錄箱包用、

一 白木長持壹ツ

但 臺乗り旅掛扱首有、御太刀箱・御目錄箱臺共入付
用、

一 右鐵鎖鑰一通り

一 大差札壹枚

但 椀

一 長持之油單壹ツ

但 上布紺染御紋付、

一 右同桐油壹ツ

但 表上布、裏紙ろう引、朱御紋付、

右老日光御法會付御使者被差越、御太刀・馬代御奉納
(卷一)西三月廿四日 本文申出候通、取次岩下佐次右衛門にて申渡候事
被遊外付、右品々新調之筋二年番廻狀ニ相見得申外間、

御太刀・馬代其外右之品々中途持越候、爲入用調方被
仰付、御奉納物宰領人ニ相渡外様被仰度奉存外、以
上、
三月 御使番

東照宮百五拾回御神忌被爲當、於日光山御法會ニ付、
(卷一)本文押札にて本文都而御使番調之通可被仰付哉と申談、此段奉
しらへ被仰渡左ニ申上外、

伺候、以上、三月

編律左中
松平右近將監様

右老日光ニ御越被成外付御太刀奉納之御使者御家老衆
三月廿五日 御取次 川上龍齋

御留守居案内にて、到着之御届并御見廻、且又萬端御
(卷一)西三月廿九日 本文都而吟味之通被仰付候旨御使番へ申渡、首尾懸江も申
差圖被成御頼外趣可被仰進外哉、
取次 岩下佐次右衛門

寺社御奉行

酒井飛彈守様

土岐美濃守様

大御目附

筒井大和守様

右同斷御留守居案内にて到着之御届、且又御留守居以

(の32)

御使者御見廻可被仰進ハ哉、

御目付

夏目藤四郎様

新庄織部様

松平縫殿頭様

右同斷ニ付御留守居參上仕、御使者到着之御届申達、

且又御留守居御使者を以御見舞可被仰進ハ哉、

日光御奉行

神尾若狹守様

淺野美作守様

右同斷ニ付御留守居參上仕、御使者到着之御届申達筋

ニ及可有御座ハ哉、

但右之御方様に御見舞被仰進ハ儀、先例相見得不申

候、

一 御干菓子 一箱

一 干椎茸 一捲

日光御門主様

右同斷ニ付御留守居案内にて、御家老衆以御使者、爲

御見廻可被進ハ哉、

但此御方様よりハ先例一種被進ハ筋ニ古帳ニ相見得

申ハ得共、此節ハ二種被進筋ニ御一統申談御座ハ由、年番廻狀ニ相見得申ハ間、本行之通吟味仕ハ、

御名代

井伊掃部頭様

若君様御名代

酒井備前守様

若御年寄

小出信濃守様

御側衆

田沼主殿頭様

右同斷ニ付日光に御越被成ハ付、御留守居以御使者御

見廻可被仰進ハ哉、

但年番廻狀ニハ本使を以御見舞被仰進筋ニ相見得申

外、此御方様ニハ先例御見廻被仰進ハ儀相見得不

申ハ得共、此節ハ御留守居御使者を以御見廻被仰

進可然儀と吟味仕ハ、

酒井修理大夫様

右同斷ニ付長坂爲御固メ御越被成ハ付、此節御使者被

差越ハ付ル者於彼方御留守居以御使者御見廻可被仰進

外哉、

一 御勘定奉行衆

御作事奉行衆

右同斷御留守居以御使者御見舞可被仰進レ哉、

日光御目代衆

一 右同斷御使者到着之御届御留守居付を以可被 仰達レ哉、

一 銀五枚

御宮別當

大樂院

一同三枚ツ、

上野執當

覺王院

信解院

一同五枚

日光御宿坊

遊城院

右同斷付於日光御留守居付以御使可被遣レ哉、

(卷)

本文ニ付上野御宿坊日光五差越候ハ、銀三枚外一種被遺物有之筋ニ、年番廻狀相見得申候付、信解院事執當役ニ差越候付、銀三枚被遺筋ニ申上候間、御宿坊付面之被遺物ニハ及由間敷ト吟味仕候、乍其上被遺物無之候而ハ不都合之廉も御座候ハ、得御差圖、於彼方被遺物首尾仕ニても、又ハ稱府之上被遣ニても、其節之程合次第可被仰付候哉、

一 日光御目代并 大猷院様御別當龍光院・日光御本坊御

留守居光樹院、且又御徒目付ハ先年ニ被遺物有之レ由、

古帳ニ相見得申レハ共、此節ニ御一統被遺物不及筋ニ

年番廻狀ニ相見得レ付、此御方様よりも被遺物及申間

敷ト奉存レ、乍然於彼方被遺物無之レ得者不都合之儀

も御座レハ、得御差圖、首尾仕筋ニ可被仰付哉、

松平右近將監様

右同斷御太刀御奉納之刻限前晚間并御奉納相濟レ御届

且又御使者彼方出立可仕哉と、前晚御留守居參上仕、

御届申上筋ニ表可有御座レ哉、

一 於日光宿亭主其外御使者滞在中世話仕レ輕者共ハ、御

物調を以贈物御座レ由、古帳ニ相見得申レ、何程被下

可然儀爰許より難計レ間、彼方ニて程合次第御留守居

より得御差圖、見合を以被下方首尾仕筋ニ表可有御座

レ哉、

右之通、年番廻狀又老古帳相見得レ先例を以吟味仕

レ、右之外差當レ儀ハ御留守居より時々得御差圖、

首尾仕筋ニ表可被仰付レ哉、御留守居申談此段奉得

御差圖外、以上、

三月廿三日

御使番

(の33)
酉三月廿三日

一 銀五枚宛

御出入御用御頼御坊主

關 長三

近藤意泉

右者今度日光に被差越り付右之通被下り事、

但 御使番方首尾、

日光表御使者衆動向之儀猶又致吟味り處左之通、

一 御獻納之御太刀に掛りり御服紗之儀、此間之廻狀に認

落申り、先達り御申合之通、弥御服紗掛り申答御座り

事、

一 於日光御使者衆廻動之時分着服之儀、御門主様を初其

外御役人様にも、都る服紗拾麻上下着用之答御座り、

御太刀獻納之節計、本使熨斗目長上下、副使熨斗目半

袴着用之事、

但 御太刀獻納相濟、直に右近將監様に本使・副使共

に參上之節、本使長袴くゝり勿論御をろしり事、

一日光に御使者衆十四日に到着、翌十五日日本使・副使同

道、服紗拾麻上下着用に右近將監様に參上、御使者

御勤之答申合り事、

一 御門主様に御進物之御使者、其外先達り御申合有之り

御役人様方に之御勤向、都る十五日に無殘御使者御勤
之答申合り事、

但 本使・副使夫々に御勤向等之儀先達り被仰合之

通御座り、

一 十六日右近將監様に參上、翌十七日御太刀獻上之刻限

伺之節者、副使計御勤之答申合り事、

一 十六日大御目付様より御廻狀を以、翌十七日御獻納

刻限之儀被仰下り節、御廻狀最初に參り御方にて、例

之通御用人宛に御請書差出、且又右御廻狀者御主人様

御名之下に例之通奉之字相調、添手紙に刻限付を以廻

達有之、留之御方なる例之通御廻狀返上之添手紙御用

人宛に書來、下役之者に爲持、大御目付様に返上可有

御座り事、

一 右御通達等之爲に、於日光表此度御副使之御旅宿何町

之何町目何屋何某と申儀、御銘々様御名之下に御書被

下度り、左りハ、何れ表様に以廻狀成共御通達可致り

事、

(の34)

以廻狀致啓上り、然者今度於日光御使者衆御勤向之儀、
(朱)本文年番より差廻候二通昨夜中致到來候付写差上出候、以上、
此間之被仰談に少々洩り儀御座り付猶又被仰談、別紙之

通ニ御座三月廿六日外間、則差廻申外、此段爲可得御意如此御座外、
御使番衆
御右筆衆

三月廿五日

永田九郎左衛門
中川郡兵衛

高橋此面伺

嶋津左中

右當四月日光之御使者被仰付置外、道中通人馬にて
可被遣旨從

(朱)嶋津左中殿

公義被仰渡外、御馬立ニ者通馬八疋被下、間之上下ニ

右者日光江御使者勤之節少人教にて被罷越候様被仰付候、左候而往來通馬四疋被下候、

者不被下事外得共、此節御使者勤之儀物入奏有之由相

右相違首尾懸五疋可申渡候、

聞得外付、通馬四疋被下、少人數にて罷越外様可被仰

付哉、

三月

此面

(朱)三月廿五日

御本文之通御家老座於末之席、左中殿江申渡、首尾懸五疋申渡候、書上首尾書等ニ不及候、

取次 岩下佐次右衛門

東郷源五

(朱)東郷源五

右同斷付通馬貳疋被下、四人陸尺可被下外哉、左外外

右者此節日光江概差越候付往來通馬貳疋并四人陸尺被下候、

御留守居付以下被遣外面ニ者通馬壹疋ツ、可被下外

哉、

橋口與三次

上村善助

大目付ニ

大目付ニ

於日光山

權現様百五十回御忌御法會付、四月十七日紅葉山御宮

江御束帶ニ御參詣、

一 士行列

一 豫參國持并四品以上

右之通外間可被得其意外、

三月

一本文達 貴間候處、都亦何之通可被仰付旨 御意候、

三月八日 御取次 二階堂部

右之通可被仰付哉、先例委不相知候付致吟味、此段
奉伺外、以上、
津留五右衛門

三月

右同斷付通馬壹疋、被下候、左中殿與力へも被下候、
右如例申渡首尾係五疋可申渡候、
(朱)三月廿五日

御本文之通東郷源五名代江申渡、其外八銘、申渡、首尾係五疋申渡候、書上首尾書不及候、

取次 岩下佐次右衛門

於日光山 御法會ニ付、當四月十七日紅葉山御宮に御參

詣之節、豫參之内例年四月十七日

御參詣之節豫參致し、

還御以後拜禮仕候面々者、此度表

還御以後致拜禮外之様可被達外、

三月

(039)

大目付に

覺

一於日光山御法事相濟外爲御祝儀、來月十八日熨斗目着

用

御本丸 西丸に惣出仕之事、

一隱居又老病氣幼少之面々者老中伊豫守・板倉佐渡守・

若年寄中に以使者御祝儀可被申上事、

一在國在邑之面々者御法事相濟外段被承外以後、以使札

御祝儀可被申上事、

但 隱居在邑之面々者同斷、

右之趣可被相觸候、

三月

(040)

(朱)本文今朝大目付池田筑後守様より、御酒状并御書付寫三通被差越候付、本
松平右近將監殿御渡り御書付寫三通相達外間、被得其意
書ハ則有馬中務大輔様兼江加達仕、寫差上申候、以上、
無遲滯順達、留りより池田筑後守方には可被相返外、以上、

三月廿六日

御名 奉

松平陸奥守殿

有馬中務大輔殿

伊達遠江守殿

眞田伊豆守殿

鍋嶋攝津守殿

秋月山城守殿

大田原出雲守殿

毛利能登守殿

織田丹後守殿

堀田梅之丞殿

右留守居

(041)

一覺

大御目付

池田筑後守様

御用人 鈴木善右衛門

右江先月晦日致參上、右御用人に取會、此度於日光山

御法會付、當四月十七日東叡山に御參詣之儀、先達の

被仰渡、其以後同日紅葉山に御豫參被仰渡、御書面難

見分御座り故、如何相心得可申哉之旨致内談り處、其

節筑後守様御留守にて、右善右衛門より荒増承り得共、

猶又御歸宅之節御尋申上、委細可申越旨承り處、翌日

善右衛門より申越り奉、例年四月十七日紅葉山に御參

詣御仕來之御方様ハ、當月十七日紅葉山に御豫參、還

御以後御拜禮、例年四月十七日紅葉山に御參詣不被成

御方様ハ、當四月十七日紅葉山に御豫參、還御以後東

叡山御宮に御拜禮、御刻限之儀ハ先達の被仰渡り通、

朝五ツ時より七ツ時迄之内東叡山に御參詣之趣、筑後

守様御心得被成り由、右御用人より申越り、最初内談

仕り節承り趣意文通とハ少々意味合相替り付、猶又尋

遣り處、文通之通相替儀無之段昨日申越り得共、又々

筑後守様ハ昨夕致參上、右御用人に取會再往承候處、

猶又筑後守様被爲聞、右之通相違無御座段被仰聞り間、

彼御方御用人手紙二通相添此段申上り、委細者明日出

勤仕可申上り、以上、

但 右手紙留略

四月四日

佐久間新左衛門

左中様

(本文書ハ一八一の三七号文書ノ行間朱書ナリ)

(の42)

西四月朔日

一 小判金百兩

右日光に御使者被差越り付、彼表用心金として出入

て、御獻納物宰領人格護にて持越、得御差圖相拂り様

被仰付度旨、御留守居東郷源五申出、其通取次岩下佐

次右衛門にて申渡り事、

(の43)

覺

御留守居付

橋口與三次

外番足輕

貳人

(先)西四月朔日 本文申出之通、來ル九日被差り候付御留守申渡、首尾懸立も
右此節日光山に被差越り旨先達の被仰渡置り、御本使
取次、岩下佐次右衛門

來ル十一日當御地御出立りハ、右與三次并外番足輕來ル
(先)西四月八日

九日御當地被差立度奉存り、於其儀ハ道中往來御賦銀等
一本文付日光御使者嶋津方申渡被仰付置候へ共、御留守御家者嶋津主錦

相渡り様被仰渡度奉存り、先年委御本使御出立兩日前よ
取次、岩下佐次右衛門

り被差越り由御座り間、此段申上り、已上、
取次、岩下佐次右衛門

内、被仰出候、左候へ八十一日出立難調、十二日出立付、本文与三次事
四月朔日 東郷源五
も四月十日被差立候旨申渡候事、首尾此面

西四月三日

一 左中殿より日光に被差越り付、來ル十一日可罷立旨被
申出、御近習役を以口達にて達 貴聞、左中殿并御
留守居東郷源五其外被差越り役、十一日ニ被差立
段此面口達を以申渡外事、

西四月四日

取次
岩下佐次右衛門

御兵具所付

足輕貳人

右老日光山 御法會付、御獻納物字領津留五右衛門に被
仰付被差越り付、右之通被相付り條如例可申渡り、
取次 岩下佐次右衛門

四月

左中

日光御法會付御使者鳴津左中に被仰付、來ル十一日出立
仕替り處、御暇御給被遊りハ、御留守詰之御家老壹人
公方様に御目見被 仰付事り得者、先例之通鳴津主鈴御
願可被仰出儀、然處主鈴未參着不仕り付、少人數にて

差急參着仕り様、去ル三日極々急飛脚を以大坂迄申遣り
得共、船中相滞り得者何比參着可仕哉、程合不相知り、
御暇 御給之儀御法會付る者今月廿日以後ニ表可相成哉

と取沙汰表有之り得共、是以相究趣相知不申り、兩日中
ニ者何分去方より爲知有之積り、自然御定式之通御法會
内にて御暇御給、來ル十五日御禮共有之り得者

公方様之御目見主鈴參着程合不相知りハ、名前難被
書出り、左り得者左中御目見被仰付筋願被差出、高橋

此面日光に御使者可被仰付哉、此面事 御下國御供被

仰付置り處、御發駕無餘日り得者御用表有之、日光御使
者難被仰付儀にて表りハ、御番頭御使者可被仰付哉、

先年

大猷院様御法事於日光御執行付、御番頭御使者被差越り

儀も有之、右御使者之儀者先例御仕向を以被遊事にて、
何ぞ差る御家格高下ニより御家老御使者にて無之り得者

難成と申にて者無之り、御並様方ニ表御番頭御使者之御
方様段々有之由り、併御先例之通被仰付りハ、此面に可
被仰付哉、勿論主鈴着之程合、且又御暇御給之次第兩日
中ニ者相知可申り得共、萬々一左中差支りハ、代り可被
仰付り間、手替之人其心得にて罷居り様被仰出置度り、

(の48)

左^(久壽)の差支^レ趣を以、御番頭御使者被^レ仰付^レハ、鳴津矢柄^(久壽)に可^レ被^レ仰付^レ哉、於其儀者内^レ可^レ申聞置^レ、此面^レに被^レ仰付^レハ、其心得^レて罷居^レ様可^レ仕候、此段先御内^レ相伺^レ、以上、

四月

公方様^に

二種一荷

御臺様

若君様^に

一種一荷宛

右者於日光山 (卷)「西四月七日 御本文之通御使者へ申渡、首尾殿江も申渡候、

權現様百五十回御法會相濟爲御祝儀、來ル廿一日御番頭 取次 岩下佐次右衛門

御使者を以被遊 御獻上^レ條、御使番^に申渡、首尾懸^に (卷)「西四月八日 一本文「付御御用人嶋津矢柄・御用人岩下佐次右衛門・御用人格佐久間九

及可^レ申渡^レ、 右衛門五御使者被^レ仰付候条、申談可^レ相勸旨口邊を以^レ申渡候事」

四月

左中

以廻狀致啓上^レ、

一此度於日光、松平右近將監様^に御音物無御座筈^ニ、三 (卷)「本文左番より之廻狀只今致到來候付写差出候、以上、

四月八日

東郷顯五

月十七日御寄合之節 何れ表様被^レ仰談^レ付^レ、翌十八

(の47)

日右之趣御一統廻狀差廻申^レ、然處百回御神忌之節之御先例御座^レ付、此度及右近將監様^に一種被^レ進由御含之御家^レ様及御座^レ段御内^レ相聞申^レ付^レ、御先例有之^レハ、一向御一統様より一種ツ、被^レ進可^レ然哉^ニ奉存^レ、最早御使者衆御出立前日間も無御座^レ付、思召寄之程御下書可^レ被^レ仰付^レ、

一於日光御副使之御方御旅宿之儀、先達^レ得

御意^レ處、廻狀^ニ夫^レ御付札を以^レ被^レ仰下^レ付、右之

趣別紙^ニ相記御通達任^レ、尤未御旅宿不相知分御宿坊

計設置申^レ付、日光^に御着之上御旅宿之儀爲御知合被

成^レ可^レ有御座^レ、

一來ル十一日於日光御法會御中日^ニ付、御在府様方より

御機嫌御伺御使者勤有之可^レ然と示合申^レ、尤御在國様

方よりハ御機嫌御伺不被^レ爲及御事^ト奉存^レ、

右之通御相談旁爲可^レ得御意如此御座^レ、以上、

四月八日

永田九郎左衛門

中川郡兵衛

(の49)

於日光御副使衆御旅宿并御宿坊左之通

御名

遊成院 (の49)

本町

武井岡右衛門

鉢石町

永井舎人

藤堂和泉守様

教城院
御旅宿

松平相摸守様

安居院

勸徳房

教城院

松平陸奥守様

觀音院

松平信濃守様

照尊院

松平土佐守様

禪知院

鉢石稻荷町

御幸町

小野伊兵衛

宗對馬守様

藤本院

多門寺

有馬中務大輔様

華藏院

日光御目代山口惣兵衛殿
御家來出町壹町目

神山又助

佐竹右京大夫様

實教院

松平光丸様

淨土院

松平筑前守本々、
教城院

鉢石

申橋主計

上杉大炊頭様

實教院

稻荷町一町目

嶋田内藏

細川越中守

淨土院

入町

高野七左衛門

松平大膳大夫様

觀音院

下鉢石御幸町

南間大助

以上

伊達遠江守様

觀音院

善教坊

(50)
一 西四月十一日
上下拾貳人

御留守居

東郷源五

松平阿波守様

實教院

上下三人

御獻納物宰領

津留五右衛門

右今日差立、日光に被差越外事、
足輕貳人

(の51)

來ル十七日紅葉山

(の52)

御宮に被遊

御參詣り者其節豫

參御勤可被成哉、承度

存り、右之段書付、明後十二日迄ニ稻垣出羽守方に可被

差越り、順達留りより出羽守方に可被相返り、以上、

四月十日

有川勇馬
大目付

御名

松平出羽守殿

松平土佐守殿

有馬中務大輔殿

上杉大炊頭殿

松平安藝守殿

右留守居

(の53)

此度於日光山御法會今日御中日ニ付、御在府之御方ニ様

御機嫌御伺有之可然旨、先達ニ年番申談り趣廻狀到來仕

外付、今朝御用番阿部伊豫守様に相勤り處、御法會ニ付

る者御三家様方よりも御伺無御座り、依之此度御機嫌伺

ニ不及外間引取外様、御用人牛丸久左衛門を以御一統御
使者に被仰聞外、此段申上候、以上、

四月十一日

左中様
佐久間新左衛門

左中様

(の54)

右者當月於日光山

權現様百五拾回御法會付、御使者嶋津左中に被仰付置り

へ共差支有之、代り此面に被仰付、中急にて被指越外條、

四月

左中

可申渡旨

可申渡旨
四月十一日、右之通於御家老座申渡、首尾懸江八岩下佐次右衛門を以申

渡、即日書上濟

御取次

四月

桂馬

左中に

(の55)

嶋津左中殿

右者此節日光山に之御使者被仰付置りへ共差支有之、被

成御免外段被仰出外付、於御家老申渡、可承面々ハ岩

下佐次右衛門を以申渡、首尾書を以申上り、

四月十一日

(の56)

四月十一日

御家老座筆者與力兼役
上村善助

右日光江之御使者此面殿に被仰付、中急にて明十二日被差立り付、善助事此面殿に被相付り旨、左中口達を以岩下佐次右衛門にて申渡り事、

(の57)

日光山御法事

初日 四月七日

中日 同十一日

結願日 同十六日

一今度於日光山御法事中前々之通式日立合、内寄合可被仕り、但御法事之初日・中日・結願日此三ヶ日ハ可有延引り、勿論拷問・手鎖、或籠舎、或繩掛り類之儀者可爲無用り事、

一御法事中普請・鳴物・祭禮・法事等不及相止り之事、

右之通被 仰渡り、御法事中火用心猶以入念、遊興

ヶ間敷儀無之様、御屋敷中に可申渡者也、

四月

御家老座印

(の58)

初日 四月七日

中日 同十一日

結願日 同十六日

今度於日光山 御法事中火用心猶以入念、遊興ヶ間敷儀(朱)御本文之通納殿役人申渡候、取次 福出平太夫無之様可相慎旨申渡り間、奥女中には可申聞旨納殿役人にて可申渡り、

四月

左中

(の59)

覺

高橋此面事、日光山御使者被仰付被差越等御座り、依之(朱)西四月十一日 本文願之通口達にて申渡候事、取次 岩下佐次右衛門中途夜通罷通り付、足輕壹人被召附被下度奉願候、於其儀者自分召列申度御座り、此段私より可申出旨被申付り、以上、

酉四月十一日

與力

花田兵左衛門

(の60)

大目付に

當月於日光山 御法會付、紅葉山御宮にて御法會日割

四月十五日 卯上刻

同 十六日 午上刻

同 十七日 寅上刻

阿部伊豫守殿御渡り御書付寫壹通相達り、順廻留りより(朱)本文今朝大井伊勢守様より被遣候付、本書ハ則有馬中務大輔様御方江順達仕

大井伊勢守方に可被相返り、以上、

四月十三日

大目付

御名 奉

松平陸奥守殿

有馬中務大輔殿

伊達遠江守殿

眞田伊豆守殿

鍋嶋攝津守殿

秋月山城守殿

大田原出雲守殿

毛利能登守殿

織田丹後守殿

堀田梅之丞殿

右留守居

(の61)

來ル十七日紅葉山

御宮に被遊 御參詣外者豫參可相勤哉、可申上旨御書附之趣承知仕り、薩摩守豫參相勤申心得御座候、此段申上外、以上、

四月十二日

御名内 有川勇馬

(の62)

一書付一通

但來ル十七日紅葉山

御宮に御豫參御勤付

大御目付

稻垣出羽守様

(の63)

明十七日紅葉山 御宮に被遊

御參詣外者、其節薩摩守豫參可相勤旨先達の申置外處、昨十五日御暇之御禮迄申上外付、豫參相勤不申外、此段御届申上外、以上、

四月十六日

御名内 佐久間新左衛門

(の64)

一書付壹通

但明十七日紅葉山

御宮に御豫參被遊告外處、御暇

御給、昨日御禮迄被 仰上外付、明日 御豫參御

勤不被遊段御届ニ付

大御目付

稻垣出羽守様

用人 渡邊源太夫

右に持參仕差出申外處、出羽守様御登 城御留守居ニ付、御歸宅之節右書付可差上由、用人より承申外、右今日私相勤首尾申上外、以上、

四月十二日

有川勇馬

左中様

用人
曾根原新次郎

右に致持參差出外處、御登城被成り間、御退出之節可申上旨、右用人より承申り、今朝私相勤り首尾申上り、以上、

四月十六日

佐久間新左衛門

左中様」

(の65) 私事積氣有之、明十七日東叡山 御宮に參詣難仕り、此

段申上り、以上、

四月十六日

御名

(の66) 一御書付壹通

但 明十七日東叡山 御宮に御參詣被遊筈外處、御積氣被遊御座、御參詣御斷ニ付

御用番

阿部伊豫守様

御取次

山口十郎左衛門

右に持參仕差出外處、被成御受取り申、右御取次を以被仰聞外旨、四月十六日佐久間新左衛門申出、左中承之、

明十七日紅葉山 御宮に被遊御豫參筈外處、御暇御給、

昨日御禮迄被仰上り付、明日御豫參不被遊段、今朝大御目付稻垣出羽守様に御届仕り、御用番様に老御届不及旨、昨日於御城此節御暇之御禮被仰上り御並様方仲ケ間中に申談、相極居り得共、猶又爲念阿部伊豫守様御用人牛丸久左衛門に取會内談仕り處、伊豫守様被爲聞、此節御暇之御禮迄被爲濟り付る共、明日御豫參不被遊段御届ニ不及旨、右御用人にて承知仕り、此申上り、以上、

四月十六日

佐久間新左衛門

左中様」

(の67)

上下(朱)本マ」

高橋此面殿

御家老座筆者與力兼役上下四人

上村善助

與力上下四人

花田兵左衛門

(朱) 一 本文此面殿其外先濟而被差感候御留守居并御留守居付、御献納物率領人、被相付候足輕少茂不残西四月十日歸府候事」

右酉四月十二日申急にて日光に被差越外事、

(の70)

明十七日於本坊御太刀・馬代獻納付、晝八時本坊玄關に可被相揃り、以上、

左中様

四月廿一日

東郷源五

追啓、隠居之面々及献上物有之りハ、同様可被心得り、尤廻狀順達、留より松平庄九郎旅宿に可被相返り、以上、

(迷)

一右之通於日光山御廻狀到來仕り間寫取、本書老細川越

中守様衆に順達いたしり旨、四月廿一日東郷源五申出、

(の68)

覺

四月十六日

新庄織部(御目付) (直寄)

夏目藤四郎(同) (信政)

松平縫殿頭(同) (忠香)

松平庄九郎(同) (忠經)

筒井大和守(御目付) (忠雄)

松平右近將監様

御取次 川井左傳

右日光山御旅館に四月十五日御使者此面殿案内にて参上

仕、昨晚到着仕り、御届申上り處、追り可申上り由右御取

次より承申り、私案内仕り首尾申上り、以上、

四月廿一日

東郷源五

左中様

松平薩摩守殿奉

藤堂和泉守殿

松平筑前守殿

松平出羽守殿

松平陸奥守殿

松平土佐守殿

有馬中務大輔殿

上杉大炊頭殿

細川越中守殿

松平大膳大夫殿

右留守居

(の69)

松平右近將監様

御取次 川田喜内

右日光山御旅館に四月十六日参上仕、先達る被仰渡置り

明十七日御太刀獻納之刻限奉伺り旨申達り處、御目付様

より御通達可有之り間、御觸相待り様右御取次を以被仰

聞り、此段申上り、以上、

四月廿一日

東郷源五

左中承之外事、

(071)

覺

一御太刀一腰

一御馬代黄金拾兩

御使者

高橋此面殿

右者 東照宮百五拾回御神忌御法會ニ付、日光山江御使者を以被遊御獻納、四月十七日日光御本坊江御使者案内仕罷出外處、御門主様御書院江御出座、御老中松平右近將監様、寺社御奉行土岐美濃守様・酒井飛彈守様、大御目付筒井大和守様、御勘定奉行小野日向守様、御目付松平庄九郎様・松平縫殿頭様・夏目藤四郎様・新庄織部様被成御出席、別紙御順書之通、御使者御太刀御目錄持參ニ由御書院御敷居之内ニ被備之、御敷居之外ニ御使者平伏退去、奏者東叡山執當、

右之通御獻納相濟申外、私案内相勤外首尾申上外、以上、

但御順書壹通相添差上申候、

四月廿一日

東郷源五

左中様

(072)

四月十七日

本坊江御太刀目錄・金馬代獻納

侍從以上名順書付

松平加賀守

松平讚岐守

御名

松平越前守

於御宮獻納

井伊掃部頭

松平左京大夫

松平中務大輔

藤堂和泉守

松平彈正大弼

松平筑前守

松平相摸守

松平左兵衛佐

松平信濃守

宗對馬守

佐竹右京大夫

於御宮獻納

松平右近將監	松平右京大夫	松平周防守	阿部伊豫守	阿部飛彈守	松平出羽守	松平陸奥守	松平肥後守	酒井雅樂頭	松平土佐守	有馬中務大輔	松平播磨守	上杉大炊頭	細川越中守	松平上總介	松平大膳大夫
--------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	--------

伊達遠江守

松平阿波守

松平兵部大輔

酒井左衛門尉

秋元但馬守

井上大和守

本多伯耆守

松平空山

松平監物

松平丹後守

松平杵頭

松平但馬守

宗式部大輔

酒井靈岳

喜連川金王丸

喜連川禿翁

(073)

此節於日光山御太刀御獻納ニ付、御本坊に相揃ひ節、御使者并副使に御門主様より御菓子御茶頂戴被仰付り付、御退散之節、立歸之御禮御取次之人迄申上置り、御主人様

方御承知之上御禮々可有之事々間、於江戸御一統申談、
年番より以廻狀通達有之々筋示合置申々、此段申上々、
以上、

但正徳之節老頂戴物等無之々由御座々、

四月廿一日

東郷源五

左中様

覺

御老中

松平右近將監様

御取次

香取庄右衛門

松平右京大夫様

御取次

津田庄次兵衛

松平周防守様

御取次

小田五左衛門

阿部伊豫守様

御取次

太田藤藏

御側御用人

板倉佐渡守様

御取次

富岡又吉

若御年(寄腕)

小出信濃守様

御取次

早田軍治

松平攝津守様

御取次

佐藤六左衛門

水野壹岐守様

御取次

山本喜兵衛

酒井石見守様

御取次

梅野八右衛門

鳥井伊賀守様

御取次

小笠原丹下

右老於日光山 御法會無御滞被爲濟々御祝儀、御國許江
之御暇被 仰出々付、以御使者被仰達々旨
御口上御相應、今日御使者相勤申々、此段首尾申上々、
以上、

四月十八日

佐久間新左衛門

左中様

(の75)

公方様は

二種一荷

御使者

鳴津矢柄

右此節於日光山御法會被爲濟候爲御祝儀御献上ニ付、

御本丸於殿上之間、御奏者仙石越前守様御家來山口彌一

郎に御使者より御目録申上(采一本ノマ)、

右之通今朝御献上相濟申上、私案内相勤首尾申上上、

以上、

四月廿一日

有川勇馬

(の76)

若君様は

一種一荷

御使者

岩下佐次右衛門

右若於日光山御法會相濟上爲御祝儀御献上付、西丸於

殿上之間、御奏者松平能登守様御家來荻原小市に御使者

より御目録相渡、御献上相濟申上、

右之通今朝私御使者案内相勤申上首尾申上上、以上、

四月廿一日

佐久間新左衛門

左中様

(の77)

御臺様は

一種一荷

御使者

佐久間九右衛門

右若於日光山 御法會相濟上爲御祝儀御献上付、平川口

御番所に御使者同道仕、御奏者久世出雲守様御家來田中

源右衛門に御使者より御目録相渡、御献上相濟申上、

右之通今朝御使者案内相勤申上首尾申上上、以上、

四月廿一日

寄御留守居

矢野清右衛門(荷番)

左中様

(の78)

三月廿七日

一押掛十懸

一織熊障泥十掛

一千鯛一箱

松平右近將監様

右若日光御法會付御越、御宿坊に被成御座、御用御取

扱被成上様被 仰出御越被成上付、爲御餞別被進上、

四月九日

一押掛十掛

一織熊障泥五掛

一千鯛一箱

御側衆御内用御頼

田沼主殿頭様

右同斷付日光に御越被成り故、爲御餞別被進候、

三月廿七日

一 琉嶋絨貳反

一 銀五枚

松平右近將監様御用人
宮川古仲太

四月九日

一 琉絨二反

一 銀五枚

田沼主殿頭様御用人
井上寛司

右若右近將監様・主殿頭様御供に被召列り故、兼御内用承り付被下り、

右之通御留守居以御使者被進、且又被下り事、

但御使番首尾、

(の79)
今度於日光山百五十回御忌御法會被爲濟り節、 太守様表向方御勤被遊、 公方様 御臺様 若君様に御献上物有之り付、御内證よりも女御使亦若御文を以御祝儀一通

可被仰上哉、正徳五年百年回御忌御法會之節也

公方様に若(會費)淨國院様より表向御勤有之り付、御内證御勤無御座り、

(徳川家宣) (家宣御室)
一位様 月光院様に若御内證より鯛一折宛女御使を以御献上被遊、御祝儀被仰上り、右通 公方様に若御内證御勤無御座り得共、此節之儀表向御勤之上、御内證よりも御祝儀一通可被仰上哉、表向御勤之上御内證より御勤有之り先例多く御座り旨 御守殿に奉伺り處、御内證より御勤可有之事り得共、差付に御勤も如何り間 御本丸に相伺り様御差圖有之り付、先例を以川井より 御本丸表御使衆迄相伺り處、此節之儀御内證より御勤不及旨御差圖有之 太守様御勤無御座り、右に付 御前様より

公方様 御臺様 若君様に鯛一折ツ、女御使を以御献上被遊、御祝儀被仰上、 萬壽姫君様にも御祝儀可被仰上哉、正徳五年百年回御忌御法會之節ハ 靈龍院様より

公方様 一位様 月光院様に鯛一折ツ、女御使を以御献上被遊、御祝儀被仰上り先例御座り旨、前條之通 御守殿に奉伺り處、是又 御本丸に相伺り様御差圖有之り付、

右先例を以八重崎御局より 御本丸に相伺り處、 公方様 御臺様に御銘に御文を以御祝儀可被仰上り、

(の80)

若君様 萬壽姫君様にも御祝儀、

公方様御方御文之内御書入可被仰上旨御差圖有之付、

御差圖之通昨廿一日御文を以御祝儀被仰上付處、則日御

返事相下 御前様御勤相濟申上、

右首尾申上付、以上、

四月廿二日

(御用人、通直)
宮之原甚五太夫

覺

一金三拾五兩

宿料

(朱)本文御留守居東郷源五申出、左中承之、御用人岩下佐次右衛門立相渡候事、
西四月廿三日
外ニ五兩相減

一銀七百貳拾八匁四分 諸小屋掛代

金ニして拾壹兩貳部ト六匁六分

外五百九拾壹匁減

此金九兩壹部ト拾匁壹分

合金拾四兩壹部ト拾匁壹分減

小判金六拾貳匁八分かへ

四月

酉四月廿三日

一 小判金四拾六兩

一 壹部金貳切

一 錢三百八拾文

銀ニして六匁貳分

小判金壹兩ニ付六拾貳匁八分かへ

右者此節日光山に御使者被差越、於彼表滞在中宿料并

(朱)西四月廿三日

小屋掛等相調り入料、別冊之通得御差圖、用心金とし

て被差越り御金之内より相拂申上付間、拂切被仰渡度旨

帳一册相添、東郷源五申出外事、

取次 岩下佐次右衛門

但帳之儀留略ス

酉四月廿三日

一 壹部金壹切ツ、

御國足輕貳人

外足輕貳人

(朱)西六月十三日
右者此節日光に被差越り處、彼表旅込賃高直有之、御

賦金不足仕差支付間、御取替被仰付被下度旨申出、其

趣申上付處、用心金之内より出入にて可相渡旨被仰渡

外付、右之通相渡置申上付間、上納方御法之通被仰渡

旨東郷源五申出外事、

同日

日光宿主

武井岡右衛門

右御宿坊遊城院
同宿

一同貳百疋

右同町人

貳人中中に

一同百疋

武井岡右衛門

家來壹人

(宋)西四月廿三日

右者此節於日光表御使者案内并滯在中彼是致世話付付

本文私切申付候旨願五五申渡、旨尾懸て申渡候、

先例を以吟味仕、得御差圖申付處、吟味之通御物調こ

取次 岩下佐次右衛門

て被下付旨被仰渡、用心金之内右之通相拂申付間、

拂切被仰渡度旨東郷源五申出外事、日光御法會相濟、

初度并二度目御能之節、萬石以上已下共、刀持・草履

取・中之口登 城之分共部屋無之分者寺澤御門邊に拂

置、退散之節繰入候事、

一三度目御能之節、四品以上・刀持・草履取ハ御玄關前

冠木御門外臺部屋脇御門内に拂置可申付、萬石以上以

下共、刀持・草履取并中之口登 城之分、供廻寺澤御

門邊に相拂、四品以上退散相濟繰入外事、

一諸大名留守居主人登 城外ハ、早速供廻罷在外場所

に退、御座敷向こ者一切差置不申候事、

右之通可被相心得付、爲差引御徒目付・御小人目付差

出置付間、諸事差圖相用外様可被存付、尤御同席中に

も通達可有之外、以上、

四月廿七日

新庄織部

夏目藤四郎

松平縫殿頭

松平庄九郎

(目付、景勝)
曲淵勝次郎

松平大膳大夫殿

留守居

松平相摸守殿

留守居

追啓順達可有之外、廻狀留より

御本丸御徒目付當番所に可被相返付、以上、

(81)

猶以御嫡子様被成御座付御方様に者、御付衆迄御通

達可被下付、以上、

以廻狀致啓上付、只今曲淵勝次郎様・松平庄九郎様・松

宋本文昨夜中松平大膳大夫様より到来仕候間、写差上申候、以上

平縫殿頭様・夏目藤四郎様・新庄織部様より別紙壹通被

四月廿八日

有川勇用

差越付付、大膳大夫・相摸守に申聞外處、御同席様之各

左中様

様迄致通達外様被申付付間、則寫差廻申付、尤御銘々様

より御答こ者被爲及間敷哉と奉存付、御通達相濟付上、

拙者共より御届可仕付、廻狀數通相認持廻申付付、以上、

(池田重亮)

松平相摸守内

四月廿七日

塩見幸左衛門

(の82)

嶋田市三郎
(毛利重統)
松平大膳大夫内

吉田半兵衛

都野彌右衛門

有福庄右衛門

御次第不同

御名

御留守居中様 御廻狀之趣致承知、薩摩守江可申聞

有馬中務大輔様

御留守居中様

上杉大炊頭様

御留守居中様 御廻狀之趣致承知、大炊頭江可申聞

松平信濃守様

御留守居中様

明十一日御能見物就被

(采)本文御廻狀并之御廻狀巻頭、五月廿一日使御中途并御國元江差越候事、
仰付、爲御禮萬石以上・高家・御留守居・大御番頭、

來ル十三日

御國案文記置候也

御本丸西丸に可有登 城外、其外者爲御禮右同日老中伊

豫守・板倉佐渡守・若年寄鳥居伊賀守に可被相廻候、
右之趣可被相達、

五月十日

(の83)

松平右近將監殿御渡、御書付寫壹通相達、御同席中在
府之分は早大目付、簡悉可有通達、答之儀先々銘より不及挨
拶、各より大井伊勢守方大目付、簡悉に可被申聞、以上、

五月十日

大目付

細川越中守殿

松平大膳大夫殿

右留守居

(の84)

猶以御嫡子様被成御座御方様者、御付衆迄御通達可
被下、以上、

以廻狀致啓上、唯今大御目付大井伊勢守様より御廻狀
(采)大御目付様御廻狀并御書付之巻頭、唯今細川越中守様・松平大膳大夫様
一通・御書付之寫壹通被差越、越中守・大膳大夫に
衆より添廻狀を以到來仕候付、写差上申候、以上、

申聞、御同席様之各様迄拙者共より致通達、様被申
五月十日

付、間、則右寫相廻申、御答之儀者御銘々様より不及
左中様

御挨拶、御通達相濟、上、伊勢守様は拙者共より御届可
仕、廻狀數通相認持廻申付、以上、

五月十日

松平大膳大夫内

吉田半兵衛

都野彌右衛門

有福庄右衛門

細川越中守内
(重賢)

内山 又助

中川唯之丞

中川郡兵衛

御次第不同

御名

御留守居中様 御廻狀之趣薩摩守旅中可申越外

松平陸奥守様

御留守居中様

有馬中務大輔様

御留守居中様

上杉大炊頭様

御留守居中様

松平信濃守様

御留守居中様 御廻狀之趣信濃守旅中可申越外

(の95)

昨十一日御能見物就被仰付外、爲御禮明十三日登 城之刻限五半時御揃外様御出仕可被成外、右之趣御同列中四品以上之御方には不殘様無遲滞早々可有通達外、答之儀ハ先々銘々不及挨拶、各より池田筑後守方には可被申聞候、以上、

五月十二日

大目付

細川越中守殿

松平阿波守殿

右留守居

(の86)

猶以御嫡子様被成御座外御方様者、御付衆迄御通達可被下外、以上、

御廻狀致啓上外、唯今大御目付池田筑後守様より御廻狀

壹通被差越外付、越中守・阿波守には申聞外處、御同席様

之各様迄、從拙者共致通達外様被申付外間、則右寫相廻

申候、御答之儀者御銘々様より不及御挨拶、御通達相濟

外上、筑後守様には從拙者共御届可仕外、廻狀數通相認持

廻申付外、以上、

松平阿波守内

五月十二日

市原 甫藏

小川夷左衛門
前田助左衛門

細川越中守内

内山 又助

中川唯之丞

中川郡兵衛

御次第不同

御名

御留守居中様 御廻狀之趣薩摩守旅中可申越外

松平陸奥守様

御留守居中様

有馬中務大輔様

御留守居中様

松平大和守様

御留守居中様

西六月十三日

一當四月於日光山

權現様百五十回御法會ニ付、御使者被差越外一卷帳御

家老座に有之之間、御譜編集方御用之分者書拔、御國

許に差越外儀共可致首尾旨、御記録方添役市來瀬兵衛(政公)
江左中より書付相渡外事、

182 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

私儀今度御暇被下置國許に罷越外、未男子無御座外付、

在國中若不慮之儀及御座外者、國許に差置外私大叔父、

實叔父之續御座外(翁豐男、久孝)鳴津李當年三十四歲罷成外、此者に相

續被 仰付、跡職無相違被下置外様奉願外、以上、

明和二酉四月廿三日 松平薩摩守御書判

松平右近將監殿

松平右京大夫殿

松平周防守殿

阿部伊豫守殿

(采)「右御用番伊豫守様御宅」四月廿三日朝御對客而 太守粹御
持參被遊外付、前晚相調差上外御口上書有之外」

183 重豪公御譜中

正文在文庫

今度就

東照宮百五十回御忌御法會御執行、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之、於日光山奉納之事、右之趣及上聞、恐々謹言、

〔宋〕
一明和二年〕
四月廿五日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

184 全上

今度就

東照宮百五十回御忌御法會相濟、爲御祝儀以使者御樽看被獻之、遂披露處一段之御仕合、恐々謹言、

〔宋〕
一明和二年〕
四月廿五日

阿部伊豫守
正右判

松平周防守
康福判

松平右京大夫
輝高判

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

185 全上

今度就

東照宮百五十回御忌御法會相濟、爲御祝儀若君様に以使者御樽看被獻之、遂披露處一段之御仕合、恐々謹言、

〔宋〕
一明和二年〕
四月廿五日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

186

重豪公御譜中

正文在文庫

若君様に菖蒲御兜一飾以使者被獻之、首尾好遂披露、恐々謹言、

〔宋〕
一明和二年〕
四月廿八日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

187

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覽、委曲松平右京大夫可述也、

五月二日



薩摩中將殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(本) 〔明和二年〕五月二日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

189 重豪公御譜中

同年五月四日發芝第歸于國、家老高橋此面種壽、側用人二階堂源太夫行端・宮之原甚五太夫通直、近習役二階堂部行旦・村上桂馬範村等供奉、歷東海道五月十九日着伏見、同二十一日駕舟沿流到大坂、三宿而發大坂、臨播磨路二十七日到坂越、同日乘船六月七日照着船于豐前州大里、厥日向九州路、同月二十二日歸著鹿城、即日爲謝恩使鎌田典膳政爲發廳府赴東武、計日經歷西海・山陽・東海之三道、七月二十四日到着江府、八月朔日如老中阿部伊豫守正右之邸、演之旨呈連署等、而又詣松平右近將監武元兼西丸老中之宅、述其旨輪書焉、同十五日應教登營、於白書院以禮使也、獻先規之方物見於家治公而退、申出席擊已獻物拜台顏、既而登

西城、於檜之間、捧獻物目錄、謁松平武元、即加納

遠江守久堅執奏之而退、復進席、就久堅擊已獻物而退去、二十一日再登營、於檜之間阿部正右召政爲、親授其奉書、

將軍家賜卷物于政爲、乃拜戴而退出、同日應教詣武元之宅、武元承若君之旨手屬其奉書、既而往老中・若年寄之宅而拜謝焉、凡是勤事者如先格、訖而九月九日發江府、同年十月十五日還薩府而復命、

190 重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守家來

水間喜八

此度佐々木文次郎江新曆調御用被仰付外付、右喜八儀弟子一人召連出府、右御用手傳外樣可被致外、尤差急出府外樣可被致外、

(本) 〔明和二年〕六月

191

全上

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 若君様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀外
間可御、心易外、隨ゝ琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤
貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔奉〕
一明和二年〕 六月六日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 若君様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御儀
外間可御心易外、隨ゝ琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・
赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一
段之御仕合外、恐々謹言、

〔奉〕
一明和二年〕 六月六日

松平薩摩守殿

阿部伊豫守
正右判

重豪公御譜中

扣正文在家老座

〔奉〕御筆写
大里ニの二階堂薨御取次ニの御内々被 仰出外者、當

時之砌外間、來年 御參勤之節より御行列之内ニ表可
被相減外、御弓臺之内唐人尻籠者可被相減外、其外御

たんすなども可被減 思召外間、惣躰之儀右準可致吟
味候、是者御下國之上可被仰出儀外得共、先御内沙汰

被 仰聞外旨承知仕外付、御請申上置外事、

一内野 御止宿付、又々同人を以被 仰出外者、先日於大

里被 仰聞外御道中御儉約筋之儀、御刀箱表可被相減

外、其外御側廻之儀者 御下知可被遊 思召外、表方

之儀者御存不被遊儀ニ外間隨分致吟味、 御下國之上

可相伺外、繰越表二繰ニの相濟外者、其通可被仰付外、

布屋杯表爲御持被遊間鋪外、御上御不如意可有之哉と

存、差扣外儀者如何外間、無遠慮可奉伺外、乍然差支

外儀を無理ニ者難被 仰付外、且又御公界向之儀者可

成程宜様有之度外、此度御船之幕など別ゝ古と見分不

宜外、とまもかやとまなとニの見分不宜外間、御供御次

船杯者澁紙とまニ可被仰付哉致吟味外、且亦使船表多

過外間相減外様可被仰付外、其外細々致吟味外様被仰

付外、ニ御下國之上之儀外得共、先者誠之御内々ニの

被仰聞外旨承知仕外事、

〔采〕
「明和二年丑」六月九日

高橋（繪壽）此面

194
全御譜中

府下士伊地知市左衛門僕曰「甚平」、市左衛門家素貧窶、甚平受三廩役祿、以奉三給之焉、官亦稱三其謹恪、故今茲六月與三廩米拾五苞一賞之、

195
重豪公御譜中

正文礼文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」七月六日

阿部伊豫守
正右判

松平周防守
康福判

松平右京大夫
輝高判

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

196
全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」七月六日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

197
重豪公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」八月四日

阿部伊豫守
正右判

松平周防守
康福判

松平右京大夫
輝高判

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

198
全上

爲八朔之御祝儀、

若君様は御太刀一腰・御馬代黄金十兩以使者被獻之、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 〔明和二年〕 八月四日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

199 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

暑氣爲 御尋、從

公方様妻女に拜領物有之、難有由得其意外、紙面之趣令

承知候、恐々謹言、

(采) 〔明和二年〕 八月七日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

200 全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

暑氣爲 御尋、妻女拜領物有之、難有由得其意外、紙面

之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(采) 〔明和二年〕 八月七日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

201 重豪公御譜中

正文在文庫

國許到着御禮之使者鎌田典膳(改寫)明十五日五時

御城に可差出外、且又自分之御禮亦可申上外間、可存其

趣外、以上、

(采) 〔明和二年〕 八月十四日 阿 伊豫

松平薩摩守殿

留守居

202 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、六月十二日増上寺

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(采) 〔明和二年〕 八月十五日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

御札致拜見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤之事外、

將又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下、從

若君様及拜領物有之、重疊難有由得其意存外、六月廿二

日國許到着付る爲御禮、以鎌田典膳目錄之通被獻之、

右之趣致承知外、恐々謹言、

〔朱〕「明和二年」 八月十六日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

一 鐵炮入箱四ツ

内 貳拾目筒拾丁入

四 匁筒貳拾丁入

一 靱入箱壹ツ

一 玉藥箆筒入箱壹ツ

〔朱〕訂札 本文御座船乗付、御座御道具之儀書相減不申候一

但 貳荷入

一 弓拾張

但 弦相付

一 替弦拾筋

一 碟拾指

右 御座船御飾用并乗付

一 鐵炮入箱四ツ

但 壹箱ニ拾丁入

一 猪毛鞘鑢貳拾本

但 荷貳ツ

一 靱入箱貳ツ

一 玉藥箆筒入箱貳ツ

一 弓貳拾張

但 弦相付

一 替弦貳拾筋

一 碟貳拾指

右 七行御家老衆船兩艘御飾用并乗付

一 鐵炮入箱四ツ

但 壹箱ニ拾丁入

一 弓箱貳ツ

〔卷〕内唐ノ減

一 狸々皮鐵炮袋入箱壹ツ

一 玉藥篋筒入箱六ツ
〔采〕内三ノ減

一 猪毛鞆鐵貳拾本

但 御座包荷貳ツ
〔采〕内拾五本減

一 鞆入箱貳ツ
〔采〕内箱壹ノ減

一 弓貳拾張

但 弦相付
〔采〕内拾張減

一 替弦貳拾筋
〔采〕内拾筋減

一 鞆貳拾指
〔采〕内拾指減

一 扱首拾本入
〔采〕内拾指減

但 荷貳ツ
〔采〕内五本減

右拾行御兵具所舩壹艘御飾用并乗付

一 鞆六拾指
〔采〕内三拾指減

一 火繩入箱貳ツ
〔采〕内壹箱減

一 矢箱四ツ
〔采〕内箱貳ノ減

一 鹽硝入箱拾ヲ
〔采〕内箱五ノ減

一 唐金玉入箱九ツ
〔采〕内五ノ減

一金へら鞆鐵百本

但 荷數拾ヲ
〔采〕内五拾本減

一 鞆入箱貳ツ

右七行御兵具所に相渡荷方舩に乗付
〔采〕内箱七ノ減

合鐵炮入箱八ツ
〔采〕御減方 合鐵炮入箱五ツ

合鞆入箱六ツ
〔采〕合鞆入箱三ツ

合猪毛鞆鐵四拾本
〔采〕合猪毛鞆鐵式拾五本

合玉藥入篋筒八ツ
〔采〕合玉藥入篋筒四ノ

合弓箱貳ツ
〔采〕合弓箱壹ツ

合弓百丁
〔采〕合弓五拾丁

合弦貳百筋
〔采〕合弦百筋

合鞆百指
〔采〕合鞆五拾指

合狸々皮鐵炮袋入箱壹ツ
〔采〕合狸々皮鐵炮袋入箱壹ツ

合扱首拾本
〔采〕合扱首五本

合火繩入箱貳ツ
〔采〕合火繩入箱五ツ

合矢箱四ツ
〔采〕合矢箱貳ツ

合鹽硝入箱拾ヲ
〔采〕合塩硝入箱五ツ

合唐金玉入箱九ツ
〔采〕合唐金玉入箱五ノ

合金へら鞆鐵百本
〔采〕合金へら鞆鐵五拾本

右老御舩中御用心三百人御備御道具御減方被仰渡、諸御道具半分方相減申外處、引札之通御減方相成申外間

此段申上外、以上、

〔采〕^(マ)「明和八年」 酉八月十九日 物頭

205 重豪公御譜中

正文在文庫

國許到着御禮之使者鎌田典膳明日四時

御城江可差出外、以上、

〔采〕「明和二年」 八月廿日 阿 伊豫

松平薩摩守殿 留守居

206

全上

正文在文庫

右明日九時我等宅江可差出外、以上、

鎌田典膳

〔采〕「明和二年」 八月廿日 松 右近

松平薩摩守殿 留守居

207

全上

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

今度御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御馬被下、從

若君様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着付

込爲御禮以鎌田典膳、琉球芭蕉布二十端并御樽肴被獻之

外、遂披露外處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔采〕「明和二年」 八月廿一日 阿部 伊豫守 正右判

松平周防守 康福判

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

208

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

今度御暇、白銀・巻物頂戴、其上御馬被下之、從若君様表拜領物有之、重疊難有由得其意、國許到着付る爲御禮、

若君様江以鎌田典膳如目錄被獻之、遂披露之處御喜色之御事、恐々謹言、

〔朱〕
「明和二年」

八月廿一日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

209

全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、六月廿日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面之趣各申談及 上聞、恐々謹言、

〔朱〕
「明和二年」

八月廿一日

松平薩摩守殿

阿部伊豫守
正右判

210

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 若君様御機嫌被相伺之、益御勇健御儀、間可御心易候、隨、干鱸殘魚一箱被獻之、各申談遂披露之處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕
「明和二年」

九月四日

松平薩摩守殿

松平右京大夫
輝高判

211

全上

御札令披見、

公方様 若君様御機嫌被相伺之、益御安全御儀、間可御心易、隨、干鱸殘魚一箱被獻之、遂披露之處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕
「明和二年」

九月四日

松平薩摩守殿

阿部伊豫守
正右判

212

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監可述也、

大家亦賜^二之數品^一、是故今茲夏六月二十七日尚穆又使^二稱霸親方^一爲^二謝恩使^一載^三書來^二於吾本府^一、於是九月九日

大家^一、
於
右大將家治公^一、遣^二使讀谷山王子於江府^一獻^三方物若干品

去歲中山王尚穆賀^三
大樹家重公讓^二位於
重豪公御譜中

214

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合、恐^レ謹言、
〔朱〕
「明和二年」
九月七日
松平薩摩守殿

阿部伊豫守
正右判

213

全上

〔朱〕
「明和二年」
九月七日
家治公
墨印
薩摩
中將殿

以六日發關使^二馬廻新納權左衛門時高爲繼使^一、步行士大告^二與官^一、使^二澁谷甚八國殿爲^三之宰^一、附職卒四人齋^二尚穆之書及獻品^一之江都上、由^二先規^一也、而十一月九日至^二江都芝邸^一、同十七日留守居佐久間新左衛門村央導^三時高^一、詣^二于老中松平右京大夫輝高^一、西丸老中阿部伊豫守正右^一、側用人板倉佐渡守勝清各第^一、呈^二尚穆之書及重豪之副翰^一、翌十八日時高登^レ營、於^二蘇鐵之間^一獻^三龍涎香一筐^一、緞子二十卷^一、細布二十端^一、八重山島熬海鼠二筐^一、泡盛酒三壺于大家、於^二中之口^一官香二十把^一、色縞子三十卷^一、如色縞子會於琉球不可求、且請以洋中領慶明年獻納、官許可之、故唯具于自鑲耳、而明年九月使右筆繪古龜山用右衛門良矩、步行士森怡春某、齋色縞子三十卷之江府、十一月十三日於中之口獻之、泡盛酒二壺于御臺様上、又登^二西營^一於^二蘇鐵之間^一、獻^三龍涎香一筐^一、緞子十卷^一、細布十端^一、八重山島熬海鼠二筐^一、泡盛酒二壺于儲君^一、使事訖、如^二老中松平右近將監武元^一、松平輝高^一、松平周防守康福^一、阿部正右第一^一、各遣^二書翰及細布五端^一、泡盛酒一壺^一、而明年春正月五日使^三時高^一、國殿^二人^一、附職卒齋^二老中奉書及返簡^一還^二國^一、二月五日至^二國^一、十五日召^二稱霸親方於城^一、於^二敷舞臺^一家老宣^レ旨、授^二老中奉書及重豪副翰^一、且命^二之國與品物^一、而如^二老中奉書^一等、明年四月留^レ真致^二寫吾本府^一云、

扣正文在家老座

一筆致啓上候、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存ハ、然者

去年琉球中山王使者差上ハ處、首尾能 御目見被 仰付、

御懇之蒙 上意、其上從

公方様 御臺様 若君様品々被下之、并使者從者迄拜領

物被 仰付、重疊難有仕合冥加之至奉存ハ、依之御禮申上

度奉存、今般以使者稱霸親方書翰并獻上物鹿兒嶋迄差越

申ハ、彼使節留置、從是以使者右品々差上申ハ、

御臺様ハ奏獻上物仕ハ、可然様御執成所仰候、恐惶謹言、

〔朱〕 一明和二年 九月六日

赤堀様御案文
御用紙調

松平右近將監様

松平右京大夫様

松平周防守様

阿部伊豫守様

若君様御方 阿部伊豫守様 人々
以使者右品々差上申ハ
可然様御執成所仰候

板倉佐渡守様 人々
御臺様ハ奏獻上物
仕ハ問如斯御座候

御着城脇年頭御禮被遊御受ハ、其段々相糺申ハ處、元録ハ、
〔朱〕西九月廿五日 本行之通吟味之趣旨之原蓋五太夫を以達 貴問候如、都節

り以前之諸古帳間々相殘、全備仕不申ハ得者、古來より
吟味之通可被仰付同人御取次を以被 仰出、式部承知仕候事

屹御作法被究置ハ譯見當不申、尤御記録奉行ハ奏相糺申

外得共、書留等無之旨申出ハ、寶永元年

〔續書〕 大玄院様御家督内

淨國院様御當地ハ御着脇御出座ニ、諸地頭年頭之御太

刀進上被仰付、其年之七月十一日二日組中之諸士 御目

見可被仰付旨被 仰出外段書留相見得、其後 御同人様

御家督初ハ寶永二年九月朔日 御着城ニ、同月十日御

部屋栖之節ハ通年頭御禮被遊御受、寶永四年九月朔日

御着城之節ハ同斷被遊御受、諸士之儀者節句日 御目見

被仰付ハ付、罷出ニ不及旨被 仰出、同六年八月十三日

御着城之節より外城衆中之儀も 御目見可被仰付旨被

仰出置ハ處、 御下國脇外城寺院衆中ナと年首之通御禮

被仰付ハ儀者跡々無御座外、此節より年頭之通外城寺院

衆中迄 御目見被仰付儀ニ可有御座哉之旨、嶋津將監殿

より被奉伺ハ處、年首之通御禮者不殘以後共可被仰付旨

被仰出、正徳五年八月晦日 御着城之節、諸地頭年頭之御

祝儀以來納太刀ニ可被仰付旨被仰出、山田新助・大嶋休

左衛門・志岐藤左衛門・田尻八郎右衛門・中西文右衛門事ハ此内之通持參太刀被仰付置、享保十八年右類之面々迄表納太刀ニ被仰付、段書留相見得申、右御禮之御規式。

淨國院様御代より

御當代様ニ至り、御着城毎ニ爲被遊御受筋相見得申、然處 御近代様御禮之次第段々相並不申、去ル未九月奉伺趣御座、別紙之通可被仰付旨被仰出置、然者年頭御在府之節、江戸詰御家老又者家格ニ御太刀進上之面々詰合、得者持參太刀被仰付、其外御當地より大御目附以上并家格ニ付御太刀進上之面々者、名代を以於江戸進上有之、左、右御一門を初月次御禮罷出、着座之門首并諸寺院組中之諸士、外城衆中等迄登城ニ御祝儀申上、右名書御祝儀帳江戸に差上達 貴聞儀、御着城脇御一門を初大御目附以上又者諸御役人、年頭御禮之筋、御目見被仰付候儀無之、諸地頭并家筋付御太刀進上之面々納太刀被仰付、着座之門首其外金山町人等中比より 御目見被仰付候儀ニ相成、只今ニ其其年年頭御規式之名目二重之様ニも相見得申、左、得者當分之通不被仰付、年頭 御在府之節者、諸地頭并家

筋付御太刀進上之面々御當地ニ年頭納太刀被仰付、其外御祝儀登城之面々御在府之節之通、御着城脇年頭御禮不被遊御受方ニ被仰付、ハ、相濟可申哉、其通ニ被仰付、其年年頭御規式相欠、方ニも相見得申間敷哉と吟味仕、然共右通

淨國院様以來

御代々様御受被遊來たる御規式之事、得者、此上者御賢慮次第可被仰付儀と御家老中にも申談、以上、

九月

〔米〕
「明和二年乙酉九月廿五日」

217

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

私參勤時分之儀別紙書狀を以奉伺、先年琉球人召連參府仕、其以後參勤時分奉伺、前々三ヶ月御用捨被仰出、難有仕合奉存、此度之儀先例不相替蒙 仰度奉願、夫ニ付私儀持病之積氣近頃暑寒共時々強差發、御用捨被 仰出、得者、時節暑中之旅行甚無心許奉存、然共先格之儀ニ付、其御沙汰御座、何分ニ表先規之通御用捨被 仰出、暑中持病ニ相障、者定式之

通、四月參勤仕り儀者勝手次第仕り様被
奉存り、四月參府仕り者御用番に致參上、奉伺御機嫌御
序を以參勤之御禮申上、月次出仕を奉仕度奉存り、御用
捨被 仰出り上、右之趣可奉伺之處、遠國之儀間ニ合不
申り故、近頃差越り儀ニ可被思召り得共、乍自由無據此
段御内意申上り、宜御差圖被成可被下り、以上、

(朱)御附紙 書面之通可被致候

〔朱〕明和二年〕 九月廿七日 松平薩摩守

218 全上

正文在文庫

松平薩摩守家來
水間喜八

此度佐々木文次郎に新曆調御用被 仰付、右喜八儀右御
用手傳り様先達る相達、此度出府ニ付御用向之儀者文次
郎方より可相達り之間、任差圖り様可被申付り、

〔朱〕明和二年〕 十月

219 白木御文書五番箱一、二十中

御城下士末子之内より依願、座付士養子ニ被仰付置り者

者格式相下り付、養子難遂譯有之致違變り者者、向後
御城下士ニ歸參不被仰付、本家之内ニ被入置、本何方
座付士何某先養子と帳面等記置、以後座付士同前之御奉
公仕り儀、又者座付士養子願出儀者勝手次第可有之外、
右之通被相定り段、與中并支配有之面々者支配中に可
被申渡旨申渡、御勘定奉行に奉申渡置り間、已來座付
士養子願出儀者有之り者、右之趣を以可致吟味り、

(鳥津久徳)

十月 仲

右包紙ニ式部殿左衛門正被成御渡、明和二年西十月
五日納置り事トアリ

220 重豪公御譜中

正文在文庫

來月四日

萬壽姫君様御深曾幾御祝儀獻上物

公方様

御臺様

若君様

萬壽姫君様

一種一荷充 拾萬石以上

222

重豪公御譜中

正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之表贈給之、入念外段

221

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

(重受女、簡廻)

照雲院卒去付、被差渡仲里親雲上、芳翰之趣且別錄之通

被相饋之、入念儀存外、恐惶不宣、

〔^采一明和二年〕 十月廿六日 中將重豪御判

謹上 中山王

223

全上

扣正文在右筆所

芳翰令披見外、就

御代替被差上使者、拜領物等有之、難有被存之旨尤之事

外、依之勝連親方被差越、別幅之通被相贈之、入念儀令

怡悦外、恐惶不宣、

〔^采一明和二年〕 十月廿七日 中將重豪御判

謹上 中山王

224

全上

扣正文在右筆所

芳墨令披見外、去歲被任中將外爲祝儀、東風平按司被差

越、殊太刀・馬代黄金十兩并別錄之通被相贈之、入念外

段令祝着外、恐惶不宣、

〔^采一明和二年〕 十月廿七日 中將重豪判

謹上 中山王

全上

扣正文在右筆所

芳墨令披見外、去年年大清國江被差渡外進貢使與那原親雲上北京之勤相仕舞、去歲七月歸帆之由、紙面之趣相達外、依之此節以與那原別錄之表被相贈之、入念外段過量之至外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和二年 十月廿七日 中將重豪御判

謹上 中山王

全上

扣正文在右筆所

芳札令披見外、從大清賜物之金入龍紋緞子一卷・色緞子一卷被相贈之、入念外段欣然之至存外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和二年 十月廿七日 薩摩守 重豪御判

中山王

回章

全上

扣正文在右筆所

芳札令披見外、弥平安之由玆重之事外、我等無吳事外間可易心外、將又縮布五端贈給之、懇篤之至存外、恐惶不宣、

〔采〕 一明和二年 十月廿七日 薩摩守 重豪御判

中山王

回章

全御譜中

正文在肝付主殿

加冠

肝付左門

宜爲

彈正

明和二酉

十月廿八日 重豪公御判

重豪公御譜中

扣正文在家老座

御代替ニ付琉球中山王使者差上、段々難有被仰付外、爲御禮

公方様〔采〕御附札
何之通可仕候 御臺様 若君様に献上物伺之通被仰渡、此度薩

州迄以使者書翰并献上物差越、御當地に老薩摩守家來を
以差上り、然處

御臺様に献上物之内、色縞子琉球より渡海之節於船中相
損、献上不相成旨申越り、如何可仕哉、右付る老此節目
録并外品に献上仕置、色縞子之儀老重の差上候様琉球に
申越り筋可仕哉、何分奉伺様國許より申越り間此段申
上り、以上、

〔采〕
〔明和二年〕 十月廿八日 松平薩摩守内
〔留守居、村史〕
佐久間新左衛門

全上

扣正文在家老座
此度〔采〕演説之写

御臺様に從中山王献上物之内、色縞子相損候付る老、薩
州并御當地の地合等吟味仕、品替献上之筋奉窺方に及
可有御座候得共、中山王献上之品の例格及有之事り得
老、其通に及難仕り、重の差渡候筋御座り老、最早當年
渡海之時節相過り付、來春琉球に申越、献上に可相成色
縞子來夏薩州に差渡、御當地に差越申積御座り、此段申

上候、以上、

〔采〕
〔明和二年〕 十月 松平薩摩守内
佐久間新左衛門

〔右御伺書等貳通即日御老中松平右京大夫様御用人關源八江
御留守居佐久間新左衛門を以被差出置り處、十一月十三日
御留守居御呼出に御附紙を以伺之通被仰渡り事〕

231 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令被見り、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又
參勤時分之儀以使者被相伺之外、紙面之趣令承知り、恐

々謹言、
〔采〕
〔明和二年〕 十一月三日 阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

232 全上

正文在文庫

萬壽姫君様御深曾幾爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、
遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」十一月四日
松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

全上

萬壽姫君様御深曾幾爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」十一月四日
阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

234 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
參勤時分之儀以使者被相伺之外、及

上聞外處、去年琉球人召連參府付被成御用捨、來年七月
中可致參府由被 仰出外條、可被存其趣外、恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」十一月十三日

阿部伊豫守
正右判
松平周防守
康福判

松平右京大夫
輝高判

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

235 重豪公御譜中

正文在文庫

御札致拜見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤之事外、
將又參勤時分之儀以使者被相伺之外、右之趣致承知外、
恐々謹言、

〔采〕
「明和二年」十一月十六日
板倉佐渡守
勝清判

松平薩摩守殿

236 全上

御札令披見外、

公方様 若君様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可
御心易外、隨ゝ小敷海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和二年」十一月十八日
松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

237
全上

御札令披見外、

公方様 若君様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可
御心易外、隨ゝ小熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外之處一
段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和二年」十一月十八日
阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

238
重豪公御譜中

寫正文在文庫

今度於日光山

御法會之節、妻より獻納物之儀先達の奉伺外處、服明相

伺外様被仰渡置外、來正月服明外付獻納物如何可仕候哉、
〔宋〕白銀三枚以使者兼取山
本坊正可有奉納候

此段相伺申外、以上、

〔宋〕
「明和二年」十二月四日
松平薩摩守

〔宋〕
「右御伺書、翌戊戌正月八日御用番松平右近將監様江御留守居佐

久間新左衛門を以被差出置外處、同十日御伺之通御付紙を以
右近將監様御用人ニ而被仰渡外付、同十六日土岐五郎左衛門御

使、御留守居付鈴木弥藤次一緒ニ上野御本坊江差越、奏香水谷
左衛門取會、御獻納之趣五郎左衛門より相達、御品之儀者弥
藤次より相渡首尾相濟外事」

239
重豪公御譜中

正文在琉球國司

今度

公方様御代替之爲御祝儀、讀谷山王子被差上外處、其國
不失舊規、到遠境奉祝之段、御感悦有之、御會釋等段、
結構被 仰付外間難有奉存、國中之政務猶正道可被申付
儀尤外、委曲家老共可相達外、恐惶不宣、

〔宋〕
「明和二年」十二月九日 中將重豪御判

謹上 中山王

240
重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 若君様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御儀

外間可御心易り、隨ち琉球袖十端并鯉節一箱被獻之り、各申談遂披露り處一段之御仕合ひ、恐く謹言、

〔采〕 〔明和二年〕 十二月十三日

阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

241 全上

御札令披見り、就寒中

公方様 若君様御機嫌以使者被相伺り、益御安全御儀外間可御心易り、隨ち

若君様は琉球袖十端并鯉節一箱被獻之り、遂披露り處一段之御仕合ひ、恐く謹言、

〔采〕 〔明和二年〕 十二月十三日

松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

242 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

なをく御表より御禮申上りへとも、いかほともよろしく御されたのミそんしまいらせり、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

公方様 御臺様 若君様 萬壽姫君様益御機嫌よく御座なされ、恐れなからめてたくそんし奉りり、しかれは私参勤時分の儀伺ひ奉りり處に 上聞に及はれ、去年りう球人めしつれ参府いたしりに付御用捨なされ、來年七月中参府仕るへきよし仰出され、有難き仕合にそんし奉りり、夫に付て私儀持病の積氣近頃暑寒ともに時々さし發、暑中の旅行こゝろもとなくりに付、定式のとをり四月参府の儀ねかひ奉るおもむき御座りところに、願のとをりおほせ渡され、重疊有難くそんし奉りり、右の御禮申上度外、 若君様 萬壽姫君様へも申上り、御序の折から御前よろしきやうに御とりなし頼入そんしまいらせり、めてたくかしく、

まつ嶋さま

高をかさま

うら尾さま

いは瀬さま

たき川さま

むめたさま

清はしさま

申給へ人、

全上

扣正文在右筆所

なをくいかほともよろしくたのみそんしまいらせ
り、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

公方様 御臺様 若君様 萬壽姫君様益御機嫌よく御座
なされ、恐れなからめてたくそんし奉りり、しかれは私
參勤時分の儀うかゝひ奉りり處に 上聞に及はれ、去年
りう琉球人めしつれ參府いたしりに付御用捨なされ、來
年七月中參府仕るへきよし 仰出され、有難き仕合にそ
んし奉りり、夫に付て私儀持病の積氣近頃暑寒ともに時
々さし發、暑中の旅行こゝろもとなくりに付、定式のと
をり四月參府の儀ねかひ奉るおもむき御座りところ、願
のとおりをおほせ渡され、重疊有かたくそんし奉りり、右
の御禮

御臺様へ申上度り、御序の折から

御前よろしきやうに御とりなしたのみ入そんしまいらせ

り、めてたくかしく、

〔朱〕「明和二年」

まつ嶋さま

高をかさま

うら尾さま

いは瀬さま

たき川さま

むめたさま

清はしさま

を申給へ

244

重豪公御譜中

正文在島津求馬

加冠

嶋津徳次郎

宜爲

吉十郎

明和二酉

十二月十五日

重豪公 御判

245

全上

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、隨り
蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻り、各申談遂披露り處一段之

御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「明和二年」十二月十五日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

246
全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨而
若君様ハ蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「明和二年」十二月十五日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

247
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺
御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申
談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「明和二年」十二月十六日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

248
重豪公御譜中

正文在島津遠江

加冠

宜爲

明和二酉

十二月廿二日



右平太
村森正之進

249
重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲阿部伊豫守可

述外也、

十二月廿七日



薩摩
中將殿

250
全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外
之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「明和二年」十二月廿七日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

251

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、然者
去年琉球中山王使者差渡外處、首尾能 御目見、其上品
々被下之、且又使者從者迄拜領物被 仰付、重疊難有由
得其意外、依之爲御禮其國迄以稱霸親方、書翰并目錄之
通

公方様 御臺様 若君様口獻上外付、以使者被差越之
遂披露候、則返翰遣外條可相達外、恐々謹言、

〔卷〕 明和二年 十二月廿八日

阿部伊豫守 正右判

松平周防守 康福判

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、然者
去年琉球中山王使者差渡外處、首尾能
御目見、其上品々被下之、且亦使者從者迄拜領物被 仰

付、重疊難有由得其意外、依之爲御禮其國迄以稱霸親方、
書翰并目錄之通獻上外付、以使者被差越之遂披露外、
則返翰遣外條可相達外、恐々謹言、

〔卷〕 明和二年 十二月廿八日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

253

全上

御札致拜見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤之事外、
然者去年琉球中山王使者差渡外處、首尾能

御目見、其上品々被下之、且又使者從者迄拜領物被 仰
付、重疊難有由得其意存外、依之爲御禮其國迄以稱霸親
方、書翰并目錄之通

公方様 御臺様 若君様口獻上外付、以使者被差越之致
承知外、則返翰遣外條可相達外、恐々謹言、

〔朱〕
「明和二年」
十二月廿八日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守
勝清判

二種一荷充

拾萬石以上
嫡子隠居

おちを御方に

一種三百疋充

拾萬石以上

一種貳百疋充

五萬石以上

三拾萬石以上

全上

若君様に御破魔弓一飾以使者被獻之外、首尾好遂披露、

恐く謹言、

〔朱〕
「明和二年」

十二月廿八日

秋元但馬守

涼朝判

白銀三枚充

岩橋

御乳人

室津

白銀貳枚充

表使

金五百疋充

御さし

拾萬石以上

正文在文庫

來正月

若君様御袴着御祝儀獻上物

公方様

白銀貳枚充

御乳人

室津

金五百疋充

表使

金三百疋充

御さし

五萬石以上

若君様

二種二荷充

二種一荷充

二種一荷充

拾萬石以上

五萬石より

九萬石迄
壹萬石より
四萬石迄

白銀壹枚充

岩橋

御乳人

室津

金三百疋充

表使

金貳百疋充

御さし

右之通可被獻之外、

公方様之獻上物者

御本丸御玄關より、

若君様之獻上物者西丸御玄關より、

御臺様之獻上物并おちを御方、且女中之贈物者平川

口御門番所迄、

御袴着御祝儀之當日朝六時より五時迄之内、在國在所之

面々共一同以使者可有獻上、且又痲瘡・麻疹・水痘之

看病人者追る御祝儀可被差上、尤其節可被相伺、

(采)「明和二年」十二月

256の1
白木御文書五番箱三十中

寫

年頭 御在府之節、御家老并家格ニ付、御太刀進上之面

々又者地頭持之儀、江戸詰合之人者持參太刀被仰付、御國

許大御目附以上、且家格ニ付御太刀進上之面々者於江戸

名代を以納太刀被仰付來、御在國之年頭江戸詰之内

御太刀進上致來外面々者 御參府之節御太刀進上仕、様

被仰渡置、得共、向後御留守詰之面々、御在國之年頭於

御國許名代を以納太刀被仰付、且又年頭不在合人何方

ニる表着之節、納太刀願出、様申渡有之、得共、已後共

御在府 御在國共年頭被遊御座、方ニる、是又名代を以

納太刀被仰付、

右之通被仰付、條、此旨不洩、様可致通達、

正月 (小松詰番) 式部

右之通被仰渡、間、家ニ付御太刀進上之面々、且亦諸地

頭被得其意、様可被申渡、以上、

(采)「明和三年戊正月五日」 大野多宮 (久慈)

「右之通大野多宮より郡山主右衛門致承知之外事」

256の2

御在國之節江戸詰合之面々年頭御太刀進上之儀、正徳二

辰年被 仰出置趣有之、且年頭不在合人何方ニる表着之

節、御太刀進上之儀願出、様、去酉正月申渡之趣有之候

得共、此節通達を以申渡通候條、向後其通相心得、帳面

ニも可記置、

正月 式部

右之通明和三年戊正月五日小松式部殿、御渡被成、吉田

用右衛門致承知之納置外也、

右 upper 左 lower 通

一年頭 御在府 御在國共大御目付以上諸地頭納太刀被仰付外通

達御書付壹通

(朱卷) 三十四

一右二付小松式部殿被仰渡御書付壹通

257

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

妻女御鷹之鷹拜領之、難有由得其意外、紙面之趣各一覽

之事外、恐々謹言、

(朱卷) 一明和三年

正月六日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

258

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

去十月廿八日從

公方様、妻女御鷹之鷹拜領之、難有由得其意外、紙面之

趣令承知外、恐々謹言、

(朱卷)

一明和三年 正月六日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

259

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

(朱卷) 一明和三年 正月七日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

260

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

(朱卷) 一明和三年 正月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

261

重豪公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕
「明和三年」 正月十一日

阿部伊豫守
正右判

松平周防守
康福判

松平右京大夫
輝高判

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

262 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之、遂披露外處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕
「明和三年」 正月十一日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

263 全上

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又

舊冬

萬壽姫君様御深曾幾御祝儀相濟外段被承之、目出度被存

由得其意、紙面之趣各申談及 上聞、恐々謹言、

〔朱〕
「明和三年」 正月十一日

松平右京大夫
輝高判

松平薩摩守殿

264 全上

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又

舊冬

萬壽姫君様御深曾幾御祝儀相濟外段被承之、目出度被存
由得其意、紙面之趣及言上、恐々謹言、

〔朱〕
「明和三年」 正月十一日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

265 重蒙公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又

參勤御用捨被 仰出外處、持病之積氣暑寒共時々差發、

暑中之旅行無心許付、定式之通四月參府之儀願之通相濟、

難有由得其意、依之被差越使者、紙面之趣各一覽之
事、恐、謹言、

(采) 〔明和三年〕 正月十九日

松平薩摩守殿

松平右京大夫

輝高判

266

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又
參勤御用捨被 仰出、持病之積氣暑寒共時、差發、
暑中之旅行無心許付、定式之通四月參府之儀願之通相濟、
難有由得其意、依之被差越使者、紙面之趣令承知候、
恐、謹言、

(采) 〔明和三年〕 正月廿一日

松平薩摩守殿

秋元但馬守

涼朝判

267

全上

芳牒披閱、弥勇猛珍重、此邊無吳事、抑參勤旬之
儀被相窺之處、時宜快然之上再如企願被蒙 嚴命、重疊

珍重思給、巨細被告知之趣丁寧之至令欣然也、

(采) 〔明和三年〕 正月廿二日

(近衛内前)
(花押) (No.1)

薩摩中將とのへ

268

(采力)
重年公御譜中

明和三年丙戌正月二十三日爲參勤發國、通行於大
口筋、家老川田伊織國福・高橋此面種壽、側用人山岡
齋宮久澄・二階堂部行且、近習役關山新左衛門金郷等
供奉焉、同廿四日路次周覽山箇野金山、廿六日出肥
後州經西海道、二月四日到豐前大里、即日駕船
同十八日着船于播州坂越、翌早陟陸歷播磨路、二
十三日至於大坂留滯二日、廿七日駕船泝河流繫
枚方、廿八日着伏見、三月二日發伏見臨伊勢路、
經東海道同月十九日到着芝邸、即遣使於老中之
宅以報參府、同廿一日如月直老中松平周防守康福
及秋元但馬守涼朝附西丸之宅、而伺
大家及 儲后之起居、廻勤而歸焉、常年朝覲以四月
爲期、此行也因駕率中山王聘使舒期以孟秋、然
而余有宿疾、故炎暑之候不宜促行、乃預請於縣
官先至如是、

○同月二十八日

松平薩摩守殿

儲君家基公始着袴焉、故使_下諸侯皆賀_上之、是日重豪遣_二

側用人仁禮仲右衛門仲古番頭為於城_一、獻_二二種二荷於

270 全上

大家_一、以_二用人格佐久間九右衛門盛邦_{仲古}獻_二二種二荷

若君様御着袴爲御祝儀、以使者如目録被獻_下之、遂披露

於_二御臺様_一、又遣_二勝手方用人岩下佐次右衛門方峯_{仲古}

外之處一段之御仕合_下、恐々謹言、

於_二西城一獻_二二種二荷於

〔采〕 正月廿八日 秋元但馬守 涼朝判

儲君_一、又贈_二儲君生母及年寄女等物_一各有_二差_一、二十

松平薩摩守殿

九日夫人遣_二女使城_一獻_二各一種於

271 全上

大家及_二御臺様_一、一種三百匹於

正文在琉球國司

儲君_一皆賀_下之也、同日

大家復賀_下之遣_二使駒木根大内記政親_{留守}於芝邸_一、賜_二淨

岸院主二種一荷_一、御臺様亦賜如_下之、

去々年江府に被差上_下使者歸國付_下

儲君亦賜_二二種二荷_一、重豪在_下途聽_下之、則呈_二書簡_一謝_二

公方様

拜賜之恩_一、

御臺様

重豪公御譜中

正文在文庫

承知_下、恐惶不宣、

若君様御着袴爲御祝儀、以使者如目録被獻_下之、遂披露

若君様_一爲御禮、以稱霸親方如目録被獻_下付、以使者差

外處一段之御仕合_下、恐々謹言、

上_下處、被遂披露御奉書相渡_下間差越_下之、難有可被奉

〔采〕 〔明和三年〕 正月廿八日

松平右近將監 武元判

謹上 中山王

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

舊臘朔日

若君様御名被進外段被承之、目出度被存由得其意外、

依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹

言、

〔采〕
「明和三年」 二月二日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意外、隨ち御樽着被獻之外、各申談

遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和三年」 二月四日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

舊臘朔日

若君様御名被進外段被承之、目出度被存由得其意外、

依之被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔采〕
「明和三年」 二月二日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意外、隨ち御樽着被獻之外、遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和三年」 二月四日

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

御札令披見外、

如承改年之慶賀珍重外、
公方様 若君様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟

と目出度被存由得其意外、隨ち御樽着被獻之外、遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和三年」 二月四日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又舊臘從

公方様寒中爲 御尋、妻女御肴拜領之、難有由得其意_レ、紙面之趣各一覽之事_レ、恐_レ謹言、

〔采〕 一明和三年〕 二月四日

松平薩摩守殿

松平右近將監 武元判

277

全上

御札令披見_レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又從

公方様妻女_レ寒中爲 御尋御肴拜領、難有由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

〔采〕 一明和三年〕 二月四日

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝判

278

重豪公御譜中

府下士立石喜三兵衛婢者、初始羅郡蒲生郷士谷山甚兵衛婢也、甚兵衛女嫁_レ喜三兵衛一時所_レ附從_レ焉、至_レ老竭_レ力

事_レ之、故于茲春二月與_レ青銅五百匹_レ賞_レ之、

279

全上

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又舊臘爲歲暮之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意_レ、紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

〔采〕 一明和三年〕 二月廿一日

松平薩摩守殿

松平右近將監 武元判

280

全上

御札令披見_レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又爲歲暮之御祝儀、從

公方様 御臺様妻女_レ拜領物有之、難有由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

〔采〕 一明和三年〕 二月廿一日

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝判

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
舊臘爲歳暮之御祝儀、從

公方様 御臺様妻女拜領物有之、難有由得其意外、紙面
趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔宋〕 明和三年 二月廿一日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
爲歳暮之御祝儀、從

公方様時服并御看拜領、難有由得其意外、紙面之趣及言
上外、恐々謹言、

〔宋〕 明和三年 二月廿一日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
舊臘秋元但馬守連判之列被 仰付、

若君様被爲附外段被承之、珍重由得其意外、紙面之趣
各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔宋〕 明和三年 三月朔日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又
舊臘秋元但馬守連判之列被 仰付、

若君様被爲附外段被承之、珍重由得其意外、紙面之趣
若君様及言上候、恐々謹言、

〔宋〕 明和三年 三月朔日

阿部伊豫守
正右判

松平薩摩守殿

御札令披見外、去年於日光山 御法會付、妻女獻納物之

儀此度被相伺^レ處、獻納^レ儀相濟、難有由得其意^レ、紙面之趣各一覽之事^レ、恐^レ謹言、

〔^采〕 明和三年 三月朔日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

286 全上

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申

談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

〔^采〕 明和三年 三月二日 松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

287 全上

御札令披見^レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又

正月廿八日

若君様御着袴御祝儀相濟^レ段被承之、目出度被存由得其意^レ、依之被差越使者^レ、紙面趣各申談及 上聞^レ、恐

謹言、

〔^采〕 明和三年 三月三日 松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

288 全上

御札令披見^レ、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又

今度

若君様御着袴御祝儀相濟^レ段被承之、目出度被存由得其

意^レ、依之被差越^レ紙面之趣及言上^レ、恐^レ謹言、

〔^采〕 明和三年 三月三日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

289 全上

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月晦日増上寺

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申

談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

〔^采〕 明和三年 三月三日 松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

290 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、水戸宰相殿逝去之段被承之、被絶言語由
得其意外、依之御機嫌被相伺之外、御安全御儀外間可御
心易外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(宋) 一明和三年」三月十三日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

291 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿六日東叡山

(家治生母) 至心院様 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及
上聞外、恐々謹言、

(宋) 一明和三年」三月十五日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

292 白木御文書五番箱五十中

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被仰付、冥加不
淺難有仕合奉存候、弥以御國許御奉公入念可相勤候事、
一乍恐奉對

重豪様、毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事御書之趣堅可相守候、若

企惡意邪儀者於有之者則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中之掟并諸事無鼠負親疎可致沙汰候事、

右條々爲於申上者、

神文略

明和三年丙戌三月十九日 湧川親方 朝喬判

293 重豪公御譜中

正文在文庫

去年御暇之節、被差出外當分相續願書致返進外、以上、

(宋) 一明和三年」三月廿日 阿部伊豫守

松平薩摩守様

(表紙)

重豪公

自明和三年四月
至同四年九月

追舊記雜錄 卷百廿三

重豪公御譜中

同年四月五日 上使松平康福來於芝第、慰勞參府焉、同二十二日應(管賜カ)教登上先格之獻物見於家治公、乃蒙懇旨、既而登西營、亦上其獻物、退而如老中各邸、而拜謝之、今日由先格コソレ從行家老拜

台顔也此面種壽朝 大家、全種壽疾作不能造朝故、國福獨得見、

○今茲四月七日 儲君元服敍從二位任大納言、同十八日 大家受諸侯朝賀、余既雖朝覲未行禮、故

使用人新納次郎四郎久壽飯為登 番頭、城、獻太刀一腰・馬代金一枚於

大樹家治公、又使側用人仁禮仲右衛門仲古亦同 久壽同品於

大納言樣、以側用人山岡齊官久澄亦同 久壽白銀五枚及一種於

御臺樣、夫人亦以女使獻各一種於

大家及

御臺樣、一種三百匹於

大納言樣、皆賀元服敍任也、是日

大家復賀之、遣使伊丹兵庫頭於芝邸、賜淨岸院主

二種一荷、

御臺樣賜亦如之、

大納言樣亦賜二種二荷、重豪乃呈書簡、奉謝拜賜之辱矣、

295 全上

正文在文庫

今度就

大納言樣御元服御官位、爲御祝儀以使者御太刀・御馬代

被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔(朱)明和三年〕 四月十八日 武元判

〔(朱)在口裏〕 松平右近將監
〔(島津重豪)〕 松平薩摩守殿 武元

296 全上

今度就

大納言様御元服御官位、爲御祝儀以使者御太刀・御馬代被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔(朱)明和三年〕 四月十八日 涼朝判

〔(朱)在口裏〕 秋元但馬守 涼朝
松平薩摩守殿

297 重豪公御譜中

正文在文庫

明日五半時登

城、參勤之御禮可被申上外、以上、

〔(朱)明和三年〕 四月廿一日 阿部伊豫守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

298 全上

家來二人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

299 全上

寫正文在文庫

今日參勤之御禮申上外付、家來二人召連可罷出之處、高橋此面今曉より病氣差發、登 城仕躰無御座外、此段申上外、以上、

〔(朱)明和三年〕 四月廿二日 松平薩摩守

〔(朱)右兩御丸御老中様互壹通ツ、被差出外〕

3.0

重豪公御譜中
寫正文在文庫

例書

公方様江

御太刀・御馬代銀一枚

巻物五

大納言様江

御太刀・御馬代銀一枚

(久門、後重年)
島津兵庫

公方様江

御太刀・御馬代銀一枚

巻物二

大納言様江

御太刀・御馬代銀一枚

(政昌、家老)
鎌田典膳

右寛延元辰十二月亡祖父薩摩守參府（宗信）ニ付、供召列參勤之

御禮申上外節 御目見相願外付、兵庫儀者一門之者御座

外故、自分獻上物先規之趣を以奉伺外處、右之通可差上

旨被仰渡外、然處兵庫當病ニる 御目見仕躰無御座、其

段御届申上置、獻上物迄を差上外、典膳事者自分獻上物

仕 御目見被仰付候、

四月

301 ○今日 御目見被仰付外薩摩守家來兩人之内、高橋此面

儀、今曉より病氣差發、登 城仕躰無御座、其段御届

被申上外、依之自分獻上物之儀者 御本丸中之口江持

參仕置外、如何可被仰付哉、此段申上外、以上、

(宗) 松平薩摩守内
「明和三年」 四月廿二日 有川勇馬

(宗) 右御届書等三通、即日御留守居有川勇馬を以、御用番阿部伊豫

守様公用人關平次右衛門江取會被差出置外處、御老中様方御登

城御評儀之上、此面殿獻上物病氣ニ而無登 城故、流ニ被仰付

外由、御坊主與頭平井友古を以被仰渡候、尤右之段阿部伊豫

守様より大御目付稻垣出羽守様を以御直ニ處御達有之外事」

302 重豪公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(宗) 「明和三年」 四月廿五日 正右判

(宗) 在口裏

松平薩摩守殿

阿部伊豫守

正右

今朝御香具一箱・丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋)「明和三年」四月廿五日 涼朝判

(宋)「在口裏」

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝

正文在文庫

大納言様に菖蒲御兜一飾以使者被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

(宋)「明和三年」四月廿八日 涼朝判

(宋)「在口裏」

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平周防守可

述外也、

(宋)「明和三年」五月二日

薩摩 中將殿



爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋)「明和三年」五月二日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

御馬二疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋)「明和三年」五月四日 輝高判

(宋)「在口裏」

松平薩摩守殿

松平右京大夫 輝高

全上

御馬一疋被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「明和三年」
五月四日

涼朝判

〔采〕在口裏

秋元但馬守

涼朝

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

同年五月五日登、營見

大樹家治公及

儲君家基公、獻賀儀、是日 儲君元服后始臨朝、故得

見焉、禮訖而登 西營拜之、又往老中各第拜焉、

全上

扣正文在文庫

今日被遊御登 城候處、御禮前於大廣間、秋元但馬守

様御出席、御禮已後

大納言様出御之由 御目見被仰付之由、御一同御達有

之、早之

公方様大廣間に出御、御順之通御禮相濟 入御、

大納言様御白書院に御直垂之由出御、國持御大名様・

表向侍從以上御一同に御出座、被遊 御目見外、

一 太守様初之 御目見付、御禮御動向如何可有御座哉、

寛保元西九月九日

大納言様初之 御目見之節、御禮動向被得御差圖外

處、大目附石野筑前守様より御目付水谷半藏様を以、

初之 御目見付之由、今日爲御禮御老中方に自身被相

勤、登 城之不及由被仰渡、御差圖之通御動向御座

外、書留寫相認致持參候、御内之由入御覽候、何分

御差圖被下度由、御坊主與頭木村養哲を以相伺外處、

今日

西丸に御登 城、當日之御祝儀被仰上、引次之初之

御目見之御禮被仰上、御老中方に及被遊御廻勤外様、

大御目付大井伊勢守様御差圖之由、右養哲を以承知仕、

其旨 御前に申上、御差圖之通御動向相濟申候、

右今日御供仕首尾申出候旨、五月五日有川勇馬申出、

達 貴聞候事、

〔采〕
「明和三年」

正文在文庫

口上の覺

御手前様このほと參勤の御禮御申上被成めてたさ、御臺様へ御もく録の通しん上被成、すなはちひろういたしまいらせり、めてたく御満そくに思し召り、よふ申せとの御事におはしましり、めてたくかしく、

〔宋〕
一明和三年

あ

松しま

高をか

うら尾

いはせ

たき川

むめた

きよ橋

松たいら

薩摩守様

口上

正文在伊集院廣濟寺

廣濟寺住持職事任先例可令執務之狀如件、

明和三年五月十一日 中將重豪御判

正文在文庫

今朝琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露り之處之御仕合り、恐々謹言、

〔宋〕
一明和三年

六月十八日

武元判

〔宋〕在口裏

松平右近將監

武元

松平薩摩守殿

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露り之處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔宋〕
一明和三年

六月十八日

涼朝判

〔宋〕在口裏

秋元但馬守

涼朝

松平薩摩守殿

315 重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔^(宋)明和三年〕 七月六日

康福判

松平薩摩守殿

松平周防守

康福

316 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔^(宋)明和三年〕 七月六日

涼朝判

松平薩摩守殿

秋元但馬守

涼朝

317 〔^(宋)在雜抄〕

家老 菱刈藤馬藤原實詮

側用人兼 伊地知新太夫平季周
近習役

普請奉行 喜入佐司右衛門藤原譽昌

檢者 伊東勘助藤原祐儔

礮永團 七平喜和

牧市兵衛 平胤隆

總大工副役 荒田甚兵衛源有起

從四位上左近衛中將源朝臣重豪

上棟 大礮莊内新建稻荷社一字

明和三年龍集丙戌七月二十二日

扣正文在文庫

松平右近將監様
御用人 宮川古仲太

右に昨廿八日罷越、右御用人に取會、昨日 上使を以雲雀御拜領之儀及可有御座候、然處

太守様御積氣被遊御座 御登 城を及御斷付、 上使之節之 御名代御賴被成候得共、御向之御差支御座、依(在十原分家、久徳)之島津又吉郎殿 御名代、 上使に御出迎、御頂戴

等之儀及可相濟哉、唯今迄右式之節、御旗本方御名代御勤之御振合不相知、如何相心得可申哉之旨相尋、

御間柄其外御心寄之御大名様方に御賴、御差支之節、御旗本方、隨分可相濟、乍然右近將監様御留守之御事、
間、究之儀、難申上候、 上使御出之節、差向御大名様方之内御差支、
、又吉郎殿 御名代御勤可宜

、右近將監様御退出之節、右之趣可申上、自然又吉郎殿、
、不相濟候、
、昨日之儀、御差掛之事、又吉郎殿 御名代御勤被成、
、重御取扱、追御し、
、可相濟旨、右近將監様御沙汰、
御座、
、愈又吉郎殿、
、可相濟旨、右近將監様御沙汰、
御座、
、最早古仲太方申越間敷旨承、
、右之段、
、昨

日同役を以申上置、然處何分不申越候付、又、古仲太迄文通仕、
、御退出之上御尋申上、
、得、御大名様方

に 御名代御賴被成御差支之節、已來共御旗本方、
右式之 御名代相濟之旨、右近將監様被仰聞、
、由申越、
、七月廿九日、
、佐久間新左衛門申出、伊織承之事、

(采)
「明和三年」

319
(采)
「近秘野帥」

明和三年丙戌八月二日 大家使御使番安部平吉齋雲雀來賜 公於邸、亦鷹所捉也、二十五日招松平安藝守・伊達遠江守・松平式部太輔・井伊兵部太輔・松平内藏頭・松平大學頭於芝邸、同散樂焉、十月五日徳川民部卿臨于芝邸、
、十一月五日招林大學頭・深見新兵衛・島津又吉郎・橋隆庵・小川元達・吉田元長等於茶亭、設卓子小燕焉、
、相良可助長興・兒玉早之丞實門吹半笙彈瑤琴、資其興命也、

320
重豪公御譜中

同年八月二日以三上使安部平吉信富賜御鷹之雲雀、即

奉「恩旨」、少焉有「微恙」故、島津又吉郎代、余如「老中各第一禮謝焉」以幕府代、始於此云、

321 全上

扣正文在文庫

〔朱〕從「公方様」

今日 上使以安部平吉、御鷹之雲雀松平薩摩守に拜領被仰付、難有仕合奉存り、薩摩守儀積氣有之、名代私を以御禮申上候、

〔朱〕「明和三年」八月二日

島津又吉郎又吉郎

〔悉〕右御老中様四人江墨書之通、

〔朱〕西丸御老中秋元但馬守様江朱書之通」

〔朱〕一上使御出之節

太守様御出迎に御頂戴有之り得共、其後御積氣被遊御座り付、兩御丸御老中様方江之御禮、御名代島津又吉郎殿御廻勤被成り、右付新番二階堂千太夫御跡に付廻被仰付、御廻留之所より無御滯御名代御廻勤相濟り段、千太夫罷歸申出り段、御使番申出り事、

322

全御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰、御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔朱〕「明和三年」八月四日 正右判

〔朱〕在口裏」

阿部伊豫守

正右

松平薩摩守殿

323

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔朱〕「明和三年」八月四日 涼朝判

〔朱〕在口裏」

秋元但馬守

涼朝

松平薩摩守殿

324

重豪公御譜中

扣正文在家老座

薩摩國鹿兒島城下東口番所通良方外東北之間、土居貳ヶ

所、當五月廿三日大雨之節崩り付る、如元修補申付度奉願外、以上、

〔宋〕
「明和三年」
八月廿五日

〔島津重豪〕
松平薩摩守

325 繪圖面ニ書記被差出外御願書左之通

薩摩國鹿兒島城下土居當五月廿三日大雨之節崩候覺

東口番所通良方外東北之間土居貳ヶ所崩申候、

右朱引之通崩り付る、如元修補申付度奉願外、以上、

明和三丙戌年八月廿五日 松平薩摩守御書判

326 全上

正文在文庫

以上

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外東北之間、土居貳ヶ所崩り付る修補之事、繪圖朱引之趣得其意り、願之通如元可被申付り、恐々謹言、

明和三戌
九月二日

阿部伊豫守
正右判

松平周防守
康福判

327

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺外、委曲松平右京大夫可述外也、

〔宋〕
「明和三年」
九月七日



薩摩
中將殿

328 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和三年」
九月七日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平右京大夫
輝高判
松平右近將監
武元判

329

重豪公御譜中

正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念外段令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

〔宋〕明和三年 九月十三日 中將重豪御判

進上 中山王

330

全上

芳翰令披閱外、當年參府之儀願之通被 仰出外付、被差渡仲田親方、太刀・馬代白銀百兩并目錄之通被相贈之、入念外段欣然之至外、恐惶不宣、

〔宋〕明和三年 九月十三日 中將重豪御判

謹上 中山王

331

重豪公御譜中

白木御文書五番箱中三十七ノ小箱入也

正文在文庫

332

正文在文庫

覺

竹之丸御紋

右寶曆十四年甲申五月廿二日從

淨岸院様被遊御替御紋外様ことの御事こゝ、

太守様被進外條、各致承知、御記録所に書留外儀、右

ニ準外先例を以可被致首尾外、以上、

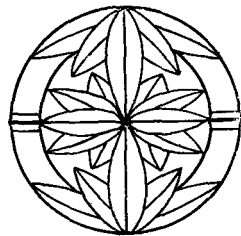
〔宋〕明和三年 成九月十五日 二階堂（行具） 御記録奉行

333

重豪公御譜中

同年九月二十日修（繕）有邦院殿七回忌法事於福昌寺五日

自十六日、十六日（自脱力）以ニ入來院石見定勝、十八日島津播磨久敦



爲^二代參^一、同夜頓寫以^三嶋津備中貴儔^二爲^二名代^一、二十日
施餓鬼以^三嶋津圖書久濃^二爲^二代參^一、又有^三滿散寄合之式^一、
使^三嶋津李久峯^二代^レ余臨^レ之、

(宋)
「明和三年」

まつしまさま

高をかさま

うら尾さま

岩瀬さま

たき川さま

むめたさま

清はしさま

を申給へ

334 重蒙公御譜中

扣正文在右筆所

なをくいかほともよろしく御さたたのみそんしま

いらせり、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

上く様ますく御機嫌よく御座なされ、恐れなからめて

たくそんし奉りり、然れはきのふ大奥へ妻罷上りり處に、

御懇の上意を蒙り、其上

公方様 大納言様 御臺様 萬壽姫君様より拜領物 仰

付られ、私におひて有難き仕合にそんし奉りり、且又家

來共へ御料理下され、召つれり女とも

御目見仕り、拜領物 仰付られ、御料理下され、重疊冥

加之至にそんし奉りり、右之御禮申上度り、

御臺様 萬壽姫君様へも申上り、御序のおりから 御前

よろしきやうに御とりなしたのミ入そんしまいらせり、

めてたくかしく、

335 扣正文在右筆所

なをくいかほともよろしく御さたたのみそんしま

いらせり、めてかしく、

一筆申上まいらせり、

上く様ますく御機けんよく御座なされ、恐れなからめ

てたくそんし奉りり、然れはきのふ大奥へ妻罷上りり處

に、御懇の上意を蒙り、其上

公方様 大納言様 御臺様 萬壽姫君様より拜領物 仰

付られ、私にをひて有難き仕合にそんし奉りり、且又家

來ともへ御料理下され、召つれり女とも

同年十月五日招請德川中將治濟卿於芝邸、當日卿及薄手來、重蒙親迎、式臺引着書院、乃相賀進、三獻禮畢、而迎內證一對、面于夫人、字保姫、即治、濟卿令姫也、乃張筵饗應焉、

337 重豪公御譜中

薩摩郡平佐鄉村市人庄助管往高山郷波見村一居、歲饑庄助出私藏米穀以賑救村中困苦者、今茲秋九月與青銅千疋賞之也、

336 全御譜中

御目見仕り、拜領物 仰付られ、御料理下され、重豊冥加の至りにそんし奉り、右の御禮申上度、御序のおりから 御前よろしきやうに御とりなしたのミ入そんしまいらせ、めてたくかし、
(采)
〔采〕明和三年
大納言様御方
岩 橋さま
はつ崎さま
室 津さま
る申給へ

338

扨正文在江戸家老座

來ル五日 民部卿様御招請之次第

一 民部卿様被爲 入候御日限、御内々相究、表立、御家老以御使可被仰進、
(采) 本文御次第之内、當日にいたり相替候所者朱書二面置候事

一 右付從 御前様何ぞ付、御年寄・御局之間一橋に被遣、御奥に及御通被遊、様可被仰進、若御序無之、ハ、態と御使可被進、

一 被爲 入、前日、弥御越可被成之儀、一橋御番頭御使を以可被仰進、左ハ、同日御家老御使を以御挨拶可被仰進、

一 被爲 入、當日、一橋 御出殿之御左右爲可被聞召物頭御使可被差越置、

一 御中途諸所、遠見附置御左右可申上、
一 御門前立番、駒寄より御本門迄之間、飾桶立番等御老

中様御招請之節之通ニ稻卷敷ニ不及候、

但 夜入りハ、懸挑灯可差出候、

一 空焼香爐出、

一 被爲 入候節、御中門外ニ御下乗可有之ハ、

一 太守様御玄喚と御中門之中程迄御出迎之筈ハ處、

民部卿様御斷付の被應其意、御式臺板之間迄御出迎、

御互ニ御會釋有之、夫より御書院ハ御案内、

一 太守様御支度御熨斗目半御袴、

一 被爲 入候節、御家老・御用人・御近習役・御留守居

御中門内ハ罷出、

一 支度兼の熨斗目着用之面々、老熨斗目麻上下、其外不洗

物麻上下十徳着用、

一 田沼能登守殿・末吉善左衛門殿ハ、
(一橋家老、意懸)
(同近習役、利懸)

民部卿様被爲 入り前以 御逢可被遊ハ、

一 御腰物老御先番之御小姓被相勤之、

一 御書院御上段 御着座之節、

太守様御上段末御主居之方ハ御着座、

一 御熨斗上、

但 此御方御小姓、

一 御茶上、

但 一橋御小姓、

一 御熨斗下、

但 此御方御小姓、

一 御たはこ盆上、

但 是より一橋御小姓、

一 御太刀・金馬代

一 縮緬五卷

一 二種一荷

民部卿様より

太守様ハ

右能登守殿御使ニ御出、先達ハ被進ハ付、

太守様御出御受有之、右之御禮此場ニ御口達を以御

挨拶被仰述、能登守殿御取合可有之ハ、

一 御家老・御用人・御近習役ハ 御目見可被仰付ハ、中

段組子之内二枚目之頭ニ御禮、御用人・御近習役一

枚目頭、

但 脇差不帶罷出、支度のしめ長袴、

一 御太刀・金馬代

一 縮緬五卷

一 三種二荷

民部卿様に

太守様より

右御目錄御留守居より善左衛門殿に相渡、夫方能登守

殿御請取御披露、

但御品相備に不及、

一千鯛一箱ツ、

鎌三郎様 金次郎様より

太守様に

右之通被進管候付、爲御挨拶 鎌三郎様 金次郎様に

干鯛一箱ツ、御招請當日表方以御使者可被進候、

御三獻之御次第

一御初獻、

一御二獻、

一御三獻、

一御盃上、

一御銚子上、

一御加上、

一御下捨かわらけ上、

一松立御肴上、

右御配膳一橋御小姓、

太守様御配膳者此御方御小姓、支度長袴、

一御土器差上、御家老・御用人に御盃可被下り、返盃者

無之、直に持下、

但最前之通、無刀に罷出、長袴着、

一太守様御案内に御奥に被爲入、

御前様御對顔、

但此節能登守殿・善左衛門殿御附被罷通管付、

一御熨斗上、

一御茶上、

一御たはこ盆上、

一縮緬五卷

一二種一荷

民部卿様より

御前様に

右披露御年寄、右付爲御挨拶、

鎌三郎様 金次郎様に干鯛一箱ツ、御招請當日御年

寄御使に可被進付、

一千鯛一箱ツ、

鎌三郎様 金次郎様より

御前様に

右披露同斷、

一御茶上、

一淨岸院様より御老女衆御使こゝゐ、御檜重一組可被進り、

一御本膳上三汁十菜白木具

御奥に御入之節、御年寄披露、

一二三御向迄續る上、

一縮緬五卷

一御引物太守様

一二種一荷

一御鉢上、

民部卿様は

一御八寸上、

御前様より

一御通八寸上、

右披露同斷、

一御盃請八寸御向引替上、

一御吸物上、

一御銚子上、

一御土器三方上、

一御引肴民部卿様江著一橋御小姓
太守様引肴此御方御小姓

一御挾肴上、

一御盃請八寸并三之御膳下、

一御銚子上、

一御吸物二之御膳引替上、

御前様御取替、

一御島臺上、

一御菓子上、

一御肴同斷上、

一淨岸院様より被進り御菓子之儀者、御披及間敷哉、御

一御銚子上、

沙汰次第之事、

一御島臺下、

一御奥御年寄・若御年寄は御盃可被下儀可有之り、

一御肴下、

一御内證より之被進物於御奥可被進り、

一御湯上、

一右相濟、御座之間は御案内、

一御うへ水扣、

一御たはこ盆上、

一御茶菓子御本膳引替上、

一 御濃茶御菓子引替上、

一 御後菓子御茶碗引替上、

一 御薄茶上、

一 御茶碗下、

一 民部卿様に差上り御料理等、此御方御料理役相調、一

橋御膳番試之筈外、

一 御機嫌次第御茶屋に被爲 入儀及可有之外間左之通、

一 御重一組差上置、

一 御吸物・御銚子上、

一 御休息所に被爲 入儀及可有之外、左外ハ、御吸物・

御銚子可差上外、

一 御奥ニ而御後段上、

一 御吸物上、

一 御銚子上、

一 御茶上、

一 御歸殿之節、表に被爲 入、御着座不及直ニ御立、

一 太守様御玄關板之間迄御送、

一 御役、最前之通罷出、

一 御立以後御側御用人御使者を以 御歸殿以後御左右被爲聞召筈外、夜入候ハ、翌日 太守様御見舞御禮被仰

述、御家老を始 御目見御盃被下、拜領物被仰付候、

御禮一橋御家老に可被仰述べ、

一 於御座之間、能登守殿に御盃被遣、

一 御歸殿後、善左衛門殿御使を以御挨拶有之外者、御直

答ニ而御盃被遣、

一 御供ニ而直ニ被相殘り方々并御先に被差越り面々取

扱方左之通、

一 御家老・御番頭・御用人に二汁六菜之料理出、時宜見

合吸物・酒肴五種出之、御家老・御用人罷出可致挨拶

外、

但 給仕表御小姓、

一 御小姓・御近習番・御醫師に二汁五菜之料理出、時宜

見合吸物・酒肴三種出之、御用人・御近習役可致挨拶

外、

但書同斷、

一 御目附・御徒頭・小十人頭・大御番與頭・御納戸頭に

右同斷差出、御用人・御留守居可致挨拶外、

但書同斷、

一 大御番・御馬役・小十人組與頭・小十人與・御徒目附

に一汁三菜之御賄并吸物・酒肴二種、御目附受込ニ而

差出、御馬廻可致挨拶外、

但 給仕廣間小姓、

一 御徒與頭・御徒抑・御馬下乘御徒は右同斷御目附受込

二の差出、新番可致挨拶外、

但書同斷、

一 御坊主は右同斷差出、御同朋可致挨拶外、

但書同斷、

一 御小道具之者與頭・御小人目附・御小道具之者・御使

之者・御駕籠之者・御茶辨當持御中間・御賄新組・御

馬口付之者・御馬飼表新組並之者に赤飯、御目附受込

二の差出、御兵具所肝煎可致挨拶外、

但 給仕足輕、

右之通御手當いたしは様首尾掛に可申渡外、

〔(宋)明和三年〕 十月

(高橋種壽)
此面

339 扣正文在江戸家老座

去ル午年御婚姻後、五ツ日御祝之節、刑部卿様被仰入答

(宋)御返答

外處、格別成御方なる被仰入り御座鋪無之、重の御普請

本文被申越趣致承知、

御出來之上可被仰入旨被仰進置、去々年御在府内なる可

御女中様方達 御聽候、拙者共より御祝儀可申上候、別紙御次第書、御節付被仰入之處、御逝去なる不被相調り、依之民部卿様御事

此方五留置候、以上

御問柄なる、御入輿以後最早御間及有之、旁に付當年中

被遊御招請方なる者有御座間敷哉と申談、先頃奉伺外處、

先月下旬方今月上旬頃迄之間、御招請可被遊り條、被仰

入り儀共可致首尾旨被仰出、松平越前守様御方には、先年

刑部卿様御招請之例承合、右御振合等を以奉伺、田沼能

登守殿・末吉善左衛門殿に及懸合り儀共其通いたし、

去ル五日四時過より被爲入、別紙御次第書之通なる、萬

端首尾好七半時頃御立被成り、此段申越り條、御女中様

に被申上なる可有之り、御老中様方御招請之節、御役人

限御祝儀申上事り得共、民部卿様なる御問柄付る之御招

請なる、譯及相替り付、御祝儀沙汰不及り間、各より及

御祝儀被申上不及り、且亦御時節柄之儀り故、隨分費

之御物入無之様爲申渡事り得共、格別成御方なる、惣の

御取持等之次第、御老中様御招請之通り故、餘程御入用

爲有之筈り得共、未相知り、尤惣綱申渡置り條、追り申

越り様可致り、御次第書壹通御飾付貳通相添、此段申越

り、以上、

〔(宋)明和三年〕

十月十一日

(種壽)
高橋此面

340

〔宋〕十一月十八日 〔宋〕上 川田伊織〔西旭〕

島津〔久命〕左中殿

樺山〔久勢〕左京殿〔下〕

菱刈〔實詮〕藤馬殿

島津〔久聰〕主鈴殿

島津〔久雄〕仲殿

341 重豪公御譜中

正文在琉球國司

〔重安女、極姫〕照雲院卒去付被差渡仲里親雲上、芳翰之趣且別錄之通被

相饋之、入念儀存り、恐惶不宣、

〔宋〕明和三年 十月廿六日 中將重豪判

謹上 中山王

342 全上

芳翰令披見り、就

御代替被差上使者、拜領物等有之、難有被存之旨尤之事

り、依之勝連親方被差越、別幅之通被相贈之、入念儀令

怡悦り、恐惶不宣、

〔宋〕明和三年 十月廿七日 中將重豪御判

謹上 中山王

343 全上

芳墨令披見り、去歲被任中將り爲祝儀、東風平按司被差越、殊太刀・馬代黄金十兩并別錄之通被相饋之、入念り

段令祝着り、恐惶不宣、

〔宋〕明和三年 十月廿七日 中將重豪御判

謹上 中山王

344 重豪公御譜中

扣正文在家老座

〔宋〕御返答 太守様御事、御國元江御妾表不被召仕り、御子様早ク

御誕生肝要之御事り付、去年江戸御發駕前〔本文被申越趣逐一致承知候、以上〕

淨岸院様御意之趣有之、於御國元表

太守様江相伺り得共 思召有之御止ニ被遊り、此段表各

御存之通り、然處當七月猶又從

淨岸院様、御家之爲、御家中下々ニ至り安心之爲ニり、

勿論 御前様ニ表追付御目出度儀表可有御座り得共、於

御國元及 御子様御出生肝要可被遊り、尤江戸に在る者御無用可被遊旨被仰進、御前様に及川井を以被仰進り、右前以奥向に在る者御養子沙汰之風説いたす由り付、萬一左様成事を取計り人及りる者、御不都合之御事り付、御國元は御妾被召仕り、御子様御出生之事、御内々御守殿は爲申上置事り、其段者

太守様は爲被 聞召上置事り處、右通 御守殿より被仰進り、然處御斷可被仰上旨被仰出り得共、押る奉留上り付、拙者御使に御請被仰上り、御前様に及御家老中より及御内々申上り、右被召仕り御人之事り付、段々思召及有之り得共不相調、其以後

御前様被召仕りおきち事、

太守様は被進り間、御國元は被差越候様可被遊旨、御直に被仰上り條、御家老中に及承知仕り様

御前様より御意之由、八重崎より二階堂部致承知り段申出、弥當年中に及被差越筈り處、是又子細有之、病氣に付願之筋に長々御暇被下り、依之去年より段々内沙汰承置り事及有之、京都に聞合申越り處、甘露寺前大納言様御娘、別る宜御生付之由り付、其段 御守殿に申上り處、蘭橋之御方は由緒有之、彼之部屋に客人分之筋に在、

御内々者 御守殿御上臈に御抱被成、

太守様被遊 御覽、御氣に被爲入りハ、御國元は可被差越り條、先御抱被成り様可仕旨被 仰出、其趣御留守居に申越、瀬尾・中嶋を以甘露寺様御方に申込、弥 御守殿に御抱被成、若

太守様御意に入り得者、御國元は被差越筈之儀をも内々申込、御落着之上、彼御方より御治定之書付御留守居差越り付、御守殿に申上り處、遅成り候る者、御差障之譯及り間、是非々々早く出府り様被 仰出、右出府爲催促之、大番目附玉利半助儀此程被遣り處、當月廿五日京都出立之筈り由、御留守居申越り、右に付る者、來月十日頃には出府之積り、左に在 御前様御もらひ被成り、太守様は可被進旨 眞合院様御方に田沼能登守殿を以御頼被仰進、眞合院様より

淨岸院様に其段被仰上り處、弥被仰上候通、表向者御前様より被進り筋可被成り、其人を 御前様御方に被進切、奥に被遣り儀者何れに及御成不被遊り、蘭橋との部屋より直に御國元は可被遣由、御返答被仰進り段瀬川御取次なる、拙者承知仕り段々之譯有之事り、右に付る者出府不及、直に京都方御國元は被差越り様被遊り儀、千

萬宜方ニハ故、其通被遊ハ様最前より段々申上ハ得共、
いつれ之筋ニハ 御守殿ハ御抱被成ハル被進ハ様ニトノ
御事ニハ、御國元女中老

太守様何レニハ御合點不被遊、當分奥向ニハ無之、旁外
ニ仕方ニハ無之ハ、右通出府之上 御意ニ入、其元ハ被進
ハ様相成ハ得共無此上御事ハ、右ニ付ル共、其元ニハ之
部屋方相應ニ御作立無之ハハ不叶答ハ、此段者別紙申越
ハ、其外相究趣者追テ可申越ハ得共、先此段頭迄ヲ荒増
申越ハ、以上、

(朱) 「明和三年」十月廿八日 (朱) 「上高橋此面」

(朱) 「十二月三日」

鳴津左中殿

樺山左京殿

(朱) 「下」
菱刈藤馬殿

鳴津主鈴殿

鳴津 仲殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

太守様御側ハ女中被召置ハ儀、去年迄者 思召有之、御

本文被申越趣逐一致承知、御女中様方ハ御内ニ申上候、御頼類方審付此方

取止ニハ被差置ハ處、其以後 思召有之ハ得共、被
仰出ハ儀者御遠慮有之、御内ニ拙者致承知趣有之、
淨岸院様ハ瀬川・川井ヲ以御内意申上ハ處、別ハ御大
慶被 思召上、

太守様 御前様ハ被 仰進ハ、其段者委曲先達ハ御内
用ヲ以申越通ハ、其以後御人之事ニ付、

太守様思召御座ハ得共、段々御差支有之ハ、御前様
よりハ可被進由ニハ、御世話被成ハ由ハ得共、是又色
々 思召ニ不相叶ハ、爰元ニハ者拵事ニハ有之、別ハ急
遣ニハ、急ニ御抱被成ハ儀者難被成、當分 御守殿御

奥ハ相應之人無之ハ付、折角宜様取計可差上ハ、御
内ニ之儀者、 御守殿御世話被成可被進ハ、尤爰元ニ
ハ者御無用被成、御人相究ハ、御國元ハ可被差越

旨 御守殿より承知仕ハ、御國元之人者何レ之筋ニハ
太守様御意ニ不叶、段々工面仕ハ處、去年於京都瀬尾
治兵衛・中嶋利兵衛内々町田幸太郎・伊集院覺左衛門

ハ申聞置ハ堂上方御息女有之、其段 御守殿ハ申上ハ
處、別ハ御幸ニ被 思召上、猶又承合可申上旨被 仰

出、 太守様ハハ相伺、横山權右衛門ハ申越ハ處、去
年申出ハ御人數之内、段々御縁付御差支有之、甘露寺

前大納言様御息女綾姫之御方御器量宜、都る御取廻御勝被成り段、京都中こゝろ及沙汰を申上事之由、禁裏より及内侍所之御見合及有之旨申越り付、其段

御守殿に申上り處、弥甘露寺家に申上り様承知仕り付、

弥可被召抱り、乍然萬く一

太守様御意に及不合りハ、

御守殿御上臈に可被仰付り、且又爰元こゝろ相應之旗本杯に縁付之望有之りハ、弥其通可被仰付り、御意

に不入節、歸京之望有之りハ、其通に及可被成り、

何分と及願次第可被仰付り由、旁具に權右衛門に申越り處、瀬尾・中嶋世話仕申上り處、別る彼御方に及御

大慶、御國元は被差越り儀、且又右細く之譯迄及御落着こゝり付其段申上、愈御抱に相成、十月十日 御守殿に着被仕、其以後

太守様に被進り處、御前様より御願之趣有之、表向

者 御前様より被進り旨、八重崎より御中奥御年寄こゝろ承知いたしり、然共京都こゝろ者

淨岸院様に諸事被對り趣り得者 御前様より被進り筋こゝろ者御都合宜間鋪り間、淨岸院様より被進り筋に

相心得、京都に及其通可申越旨 御守殿より承知仕り、

左り來春御國元は被差越旨り付、甘露寺家に及其趣申上り様權右衛門に申越置り、

一右京都に書面を以申越り迄こゝろ者難相達譯及有之、邂逅之儀見分なしに及不都合にり故、何様可仕哉、

御守殿に及御内意申上、

太守様に相伺り處、外御用及有之、白石探隠被差越り、

左り權右衛門・覺左衛門申談させ、折角瀬尾・中嶋に相働せ能折柄御様子見分いたし、其段申越り付、

御守殿に申上り處、御大慶被 思召

太守様に及御内く申上り處、御直に 御覽無之人にり得者、愈御側に被召置り御治定及難被成り、何分と及

淨岸院様思召次第可被成旨被 仰出り處、御前様方色く被仰進り趣有之り付、爰元こゝろ 御前様より被進

り得者京都女中者被成かたくり間、御内く 御意承知仕り得共、甘露寺家と及最早治定有之り上者、今更違

變も別るいかゝに有之り間、何様と可有御座哉之旨 御守殿に御内意申上り處、最早申上り通

太守様御方に被進り筋不相調りハ、 御守殿御上臈に可被成り間、御内人こゝろ御客人分筋可然り、於京

都蘭橋之御方に由緒有之御客人分こゝろ被差越、往く御

上臈ニ可被成との趣、專表立の吹聴可有之、

太守様に被進儀者爰元に着之上、思召次第可被成、依譯者御國元迄、可被差越、旁落着有之、様細ニ申

込、様被 仰出、其段申遣申込、何れ落着有之、一々書付を以返答有之、然處爰元に着以後

太守様に 御目見被仕、別、御意ニ入、直ニ前條之通被進、尤 御前様御世話被成、女中其節迄

者一向無之、御互ニ先御落着之御事、一 甘露寺家より、最前申込、御内々者御妾ニ被召仕

儀御幸ニ得共、表向者御客人分と御名付被下、様被仰聞、段申越、夫故右通爲被仰付事、於京都

御切手御願之節、客人分と申先例堂上方に無之由、御守殿御上臈として被差越、御願有之、段申越

、然處於爰元者御屈なし、被相濟等、右通故、蘭橋之御方由緒有之、右部屋に被召呼、往

淨岸院様御意ニ入、御上臈ニ可被成、其節御屈可被仰出、蘭橋之御方岡田殿より小出信濃守様御方

に一通り御申出被置、然者來春御國元に被差越、付る者御屈可有之哉、

御守殿御用無之、歸京被仰付、筋ニ可有之哉と吟味

有之、得共、其通ニ者萬々、一何様之儀敷有之、いか

ニ、最前御届と申筋ニ、表無之、得者御届ニ不及、太守様御方常之女中被差越、筋ニ爰元被差立、其以

後御届等不被仰出、不叶儀ニハ、被仰出様可有之、其内何方尋有之、御答之被成様可有之旨、

蘭橋之御方、拙者承知仕、右之旨趣者 御守殿御用無之、此内爰元被差立歸京被仰付、甘露寺家に表

方相對ニ御抱被成、御國元ニ可被差越旨 御守殿に御相談有之、付、其通被成、様被仰進、最早御抱相濟、

御國元ニ被差越、段御答可被成旨承知仕、其段表達 貴聞其筋取計申、乍然難致儀、有之ハ、猶又

相伺、御都合宜様首尾仕等、尤甘露寺家、傳奏衆に御届等之御取扱いか、可有之哉、且又脇に右躰之儀

表ハ、是又御都合委曲承合早々申越、様權右衛門迄申遣、

一於綾之御方爰元は長々被差置、儀者諸事御都合不、付、來春中ニ者是非被差立、筋ニ手當いたし、最前

御前様に 御守殿より被仰進、趣、爰元ニ御妾ニ被召仕、儀者御無用ニ被 思召上、御國元ニ幾人ニ

表御勝次第有之、度旨被仰遣置、御家老中より表其通

申上り様被仰付、八重崎御局へ及其通申達置り付、旁
早ク被差越り方宜り、尤

島津主鈴殿
島津 仲殿

太守様より及來春中可被差立旨被 仰出り、

一於綾之御方事付る老色々雜説を申り聞得及有之り、其

348 (宋) 一右ニ相添別冊」

甘露寺前大納言殿御姫御親類

譯者於京都輕キ藝子などを拵差下り筋ニ申觸し、

一御母 黒田故甲斐守殿御姫

御前様にも被聞召上、色々御沙汰及御座り由、誠ニ穩便

一御兄 甘露寺侍從殿

ニ承り、然共曾る右躰之儀ニ老無之、瀬尾・中島兩

一御姉 鍋嶋攝津守殿御奥方

人出精仕儘ニ承届り、其上右姉之御方田霧宮様御上臈

一同 世代姫殿

ニ蘭橋之御方能被存、於幾殿ニ及由緒有之、久々對

御母脇坂故淡路守殿御妹

面被致たる由り付、少々疑無之り、別冊御親類付差越

清水御殿

申り、於其元及定る風説及可有之り得共、御念遣被成

田霧宮様御上臈

儀ニ曾る無御座り、

一同 芳岡殿

右申越ニ不及儀り得共、各爲御納得此段申越り間、

御母家女房

上、

一御妹 阿喜姫殿

(宋) 「明和三年」 十二月十三日 (宋) 上高橋此面

御母家女房

(宋) 「正月廿八日」

勸修寺故大納言高顯卿御奥方

島津左中殿

一御叔母御父方寶壽院殿

榊山左京殿

一御伯母御母方唐橋宰相殿御奥方

(宋) 下「菱刈藤馬殿

一御甥 御父方鍋嶋常丸殿

御實父

勸修寺故大納言高顯卿

一御從弟同斷萬里小路前大納言殿

櫻町院様御女中

勸修寺故大納言高顯卿御姫

一一同斷清淨院殿

一一同斷萬里小路前大納言殿御奥方

萬里小路前大納言殿御姫

一一同斷新興侍殿

一一同御母方唐橋大夫殿

一一同斷黒田豊松殿

清水寺

一御兄 成就院

甘露寺前大納言殿猶子

實倉橋二位殿次男

右之通御座外、以上、

〔采〕
一明和三年

八月廿九日

寺田自然軒

藤木玄蕃

重豪公御譜中

扣正文在家老座

色縹子三拾本

〔采〕
右去西年

御留守居互承合差上候様可仕候

御臺様江中山王より献上物之内、右品相損御目錄迄差上

置外、此節相屈申外付差上方如何可仕哉、奉得御差圖外、

以上、

〔采〕
一明和三年

十一月十一日

松平薩摩守内〔村采〕
佐久間新左衛門

〔采〕
一右松平右京大夫様江相伺外處、御附紙之通被仰渡、御留守居年

寄松平内匠頭様江差上方得御差圖候上、同十三日於中之口火之

番與頭詰合無之、御廣敷添番今田貞吉殿江相渡御献上相濟外

350
重豪公御譜中

同年十二月十八日以、上使安部助九郎信方賜貴鷹所

搏之鶴一隻、拜、恩旨者如先規、

351
全上

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

〔采〕
一明和三年

十二月十八日

正右判

松平薩摩守殿 (朱) 在口裏 阿部伊豫守 正右

全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔明和三年〕 十二月十八日 涼朝判

松平薩摩守殿 (朱) 在口裏 秋元但馬守 涼朝

重豪公御譜中

正文在文庫

大納言様は御破魔弓一飾以使者被獻外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

〔明和三年〕 十二月廿八日 涼朝判

松平薩摩守殿 (朱) 在口裏 秋元但馬守 涼朝

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監可述外也、

〔明和三年〕 十二月廿七日



薩摩 中將殿

全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔明和三年〕 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

356 (朱) 「近秘野艸」

明和四年丁亥正月元日臨御座間謁廟於寺、三日臨御座間及大御書院受賀正如例、十日謁増上寺及上野、十三日雨雪、始講散樂、公親舞翁、松山侯爲小鼓焉、十五日造朝、三月十日降菴、重七分、前夜夫人流産云、女子 十八日首途謁護摩所如例、四月三日關山金暉承旨、使相良長興購四

書五經・新刻蒙求・楚辭箋註・通俗忠儀水滸傳・小學・孝經大儀殆一百册矣、十六日 大家使松平右近將監齋物件來賜 公於邸、令還之國、西丸亦使松平周防守同賜公、十八日朝謁拜 恩 大家懇諭賜馬如例、二十一日發芝邸、是月三日桂織部久、爲國老、十三日新納四郎久、爲大目附賜稱波門、五月七日經木曾路抵伏見邸、十日抵大坂邸、十三日發邸舟行、二十五日着船細島、六月六日自國分着船築地至府城、乃使小松仙十郎如江戶謝恩、十二日謁南泉府、十五日臨朝、二十三日謁稻荷・福迫・護摩所不動稻荷、靈府表御看經所、七月十五日謁淨光・福昌・惠燈三刹、二十七日召伊地知新太夫季周・相良彌一兵衛長主・上村笑之丞行□・竹下辰阿彌・白石幾阿彌・前田嘉仙・同氏順達・東鄉典澤・園田元的・上原玄與・林玄達・圓師長乙・脇田首□等所嘗嗜者俱奏散樂、時皆晚齡前世所無 公欣然矣、九月六日如櫻島、十四日回棹、閏月朔日舟如兒水、於綾君陸行皆爲温泉也、十月二日還自兒水、十一月三日於綾君觀鱗流馬、二十四日 公及綾君臨垂水邸、十二月四日臨島津鐵熊宅聽詰罪人、六日訪西田館、十七日謁大雄山還臨築地亭戲爲燕飲、以島津貴儔・仁禮仲右衛門・二階堂部・宮之原甚五太夫・新納次郎・川上

瀧衛爲賓客、使鎌田愛太夫・田中七左衛門及侍醫服布衣爲之給仕、又使島津玄蕃・入來院大和爲御庖丁人頭、使町田監物・山岡齋宮爲御庖丁人、其他充職、各誦盛衰記五章、丑尅還城、十八日訪築地館、綾君亦從嶺松君爲餞也、十九日首途謁諏訪臨安養院、又謁祇園、舟回築地如例、二十一日訪山下館妙心君餞也、二十四日散樂于磯、二十五日不圖臨于高橋此面宅、

357

重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

長生殿裏春秋留不老門前日月遲

君か代ハ千世にやちよにさゝれ石の

巖となりて昔のむすまで

明和四年正月元日

重豪御判

358

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

「宋明和四年」正月七日

輝高判

松平薩摩守殿
(采) 在口裏 松平右京大夫 輝高

369 爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

(采)「明和四年」正月七日 涼朝判

松平薩摩守殿
(采) 在口裏 秋元但馬守 涼朝

360 重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

包紙三十九 亥二月十五日左京殿より郡山主右衛門 御渡被成、白木御文書五番箱ニ納置トアリ

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

明和四年正月十一日 重豪御判

361 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、
「明和四年」正月十一日 輝高判

松平薩摩守殿
(采) 在口裏 松平右京大夫 輝高

362 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采)「明和四年」正月十一日 涼朝判

松平薩摩守殿
(采) 在口裏 秋元但馬守 涼朝

363 全上

年甫之賀章且如目錄送給、令祝着外、弥平安超歲珍重、
此邊全然外、尚期後音外也、

(采)「明和四年」
(近衛内膳) (花押) Na]

薩摩中將とのへ

全上

營中進使者序、寄一翰外、青陽賀儀珍重、弥可爲平安、此邊無吳外、仍如目錄令贈與之外也、

〔朱〕
「明和四年」

二月十五日

〔花押 No.1〕

薩摩中將とのへ

重豪公御譜中

扣正文在家老座

〔朱〕亥四月廿六日

於綾の御方格式御國元江戸共

御本文之通納殿役人江申渡候

嶺松院様御同格被仰付、着當日より御名様と唱り様被

宮之原五太夫

仰出候付の者、此節調物等ニ付相替儀及有之者申出外

〔朱〕本文様之字唱之儀者表通達旨ニ詳之

様納殿役人ニ可申渡外、

〔朱〕
「明和四年」

四月

〔島津久健 仲〕

重豪公御譜中

明和四年丁亥夏四月十六日

大家遣ニ使松平右近將監武元於芝邸ニ命之レ國、恩賀接待

如ニ先格ニ、儲后家基公亦遣ニ松平周防守康福ニ賜ニ紗綾ニ

十卷ニ、即日如ニ老中之宅ニ而拜之、且以ニ女使ニ拜ニ謝於

大家暨

儲后

御臺様 萬壽姫君ニ也、同十八日登レ營、於ニ黒書院ニ見ニ

家治公ニ謝レ賜レ告、時蒙ニ 懇旨ニ脱ニ馬一匹ニ、又拜退而登ニ

西營ニ拜ニ其恩賜ニ、既而如ニ老中各第ニ亦謝焉、之日在府家

老島津左中久金執レ贊見ニ

大家及 儲后ニ、

全上

正文在文庫

明日五半時登

城、御暇之御禮可被申外、以上、

〔朱〕
「明和四年」

四月十七日

阿部伊豫守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

全上

家來一人

御目見被 仰付_レ間、召連可被罷出_レ、

369 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

私儀今度御暇被下置國許_レ罷越_レ、未男子無御座_レ付、
在國中若不慮之儀、御座_レハ、國許_レ差置_レ私大叔父
之續嶋津李當年三拾六歲罷成_レ、此者_レ相續被仰付跡職
無相違被下置_レ様奉願候、以上、

(宋) 一「明和四年」四月十九日

松平右近將監殿

松平右京太夫殿

松平周防守殿

阿部伊豫守殿

370 重豪公御譜中

同月二十一日發_二於芝第_一歸_レ國、家老高橋此面種奇、側用
人山岡齋宮久澄・二階堂部行且・關山新左衛門金郷、近
習役川上龍衛親方其餘從行焉、歷_二東山道_一五月七日到_二伏
見_一、同十日駕_レ船沿_レ流着_二大坂_一、十三日發_二大坂_一取_二播
磨路_一、十六日到_二坂越_一、同日乘_レ船經_二過諸所之港口_一、

二十四日着_二船于日州細島_一、時風雨滿水通津不得_レ濟焉、
滯_二船于此_一、二十九日陟_レ陸、六月朔日泊_二佐土原_一、於_二茲

平島津淡路守久柄從_二先蹤_一迎待焉、翌二日入_二封内高岡_一

宿焉、同三日發_二高岡_一過_二香積寺_一、觀_二梅老幹百尺枝葉繁

茂、名曰_二月知梅_一、乃親書_二其三字_一以與_二寺僧_一、爾後裝濟焉、
于同鄉龍福寺

是日到_二諸縣郡高城_一宿焉、母日發_二高城_一致_二都之城_一、入_二

島津鐵熊之家_一憩息、其族北郷權五郎久富爲_二鐵熊_一迎款待

焉、以_二渠幼冲_一故也、贈答進呈各有_二差_一、既而泊_二福山_一、

同六日歸_二着鷹城_一、即日使_二小松仙十郎清行_一齎_二書赴_二江

府_一以謝_二歸國之恩_一焉、清行慮_二慮發_二薩府_一、七月九日到_二

芝第_一、同十一日如_二用番松平周防守康福及板倉佐渡守勝

清_{西丸}附_二之第_一述_二旨呈_二連署等_一、越二十八日清行應_レ徵登、

營、於_二白書院_一以_二禮使_一也備_二先格之獻物_一、見_二於

大樹家治公_一而退、重執_二贊拜_一調_二台顔_一、畢而登_二西營_一

於_二檜之間_一復以_二禮使_一備_二其獻物_一、調_二板倉勝清_一、土井

大炊頭利里執_二奏之_一而退、重進_二席就_二利里_一上_二己獻物_一而

退去矣、八月五日復應_二徵造_一於_二營_一、老中阿部豊後守正

允於_二檜之間_一屬_二其奉書_一、時

大家賜_二卷物_一於_二清行_一乃拜戴而出、同日詣_二勝清之宅_一、

勝清亦授_二其奉書_一、凡夫勤_二事如_二先格_一、使事畢同月十一

日發江府、同年九月二十一日還本府復命、

扣正文在家老座

一 鯛一折

一 御行器三荷

一 御添重一組

公方様より

淨岸院様に

右今日 御發駕付

上使瀧川様を以御給被遊り、

一 御肴一折

御臺様より

御同人様に

右 仰文を以御給被遊り、

右之通

太守様御發駕以後 御守殿に 上使并 仰文を以

淨岸院様御給被遊り付

太守様御勤之儀御先例を以 御守殿に相窺り處、於御

中途御承知之上

公方様に御文を以御禮被仰上

御臺様に之御禮也

公方様御方御文之内被相込込、

大納言様 萬壽姫君様に之御禮也是又御書入可被仰上

旨御差圖有之り間、其通之御文被差越る可有御座り、

一 右外 御前様よりき御勤こ不及御先例御座り、

一金子三百足

太守様に

御本丸御老女 瀧川様より

右今日 御守殿に 上使御勤付右之通被進、御返之儀

先例を以首尾仕相濟申り、

一 右こ付 太守様より御禮之儀 御守殿に奉窺り處、御

先例之通往反御考之上 御守殿より御文を以可被仰遣

間、別立る御文被差越不及段承知仕り、

右之通申越り條被達

貴間、御文被差越りハ、先規之通首尾可仕り、

御守殿に從

太守様御祝詞之儀表被仰進る可有御座り、此段申

越り、以上、

(朱) 〔明和四年〕 四月廿一日

川田伊織

(朱) 〔上〕島津左中

(朱) 〔下〕高橋此面殿

372

(朱) 〔御返答〕

本文被申越趣致承知達 貴聞、

公方様江御禮之御文今廿二日之御日付被 仰付、

御臺様江之御禮也

公方様御方御文之内被相込、

大納言様

萬壽姫君様江之御禮及是又御書入之被 仰上之間、日

積を以可被差出、且又

淨岸院様江御文を以御祝詞被仰進、條可被差上、此段

及御返答、以上、

本マ、 四月廿二日

(本文書ハ三七一号文書ノ行間朱書ナリ)

373

全上

正文在文庫

大納言様江菖蒲御兜一飾以使者被獻之、首尾好遂披露

候、恐々謹言、

(朱) 〔明和四年〕 四月廿八日

阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

374

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺、委曲阿部伊豫守可
述也、

(朱) 〔明和四年〕 五月二日



薩摩 中將殿

375

全上

爲端午之御祝儀、

大納言様江御帷子單物以使者被獻之候、遂披露處一段

之御仕合、恐々謹言、

(朱) 〔明和四年〕 五月二日

松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

寫正文在江戸家老座

大目附に

松平之御稱號名乗り者惣領之外に亦、後々、御目見以上に可致心當之者者只今迄之通相心得、御目見以下に可致存寄之ものハ御稱號爲名乗り儀可爲無用外、尤御目見以上に可致心當る御稱號爲名乗置外者、御目見以下に相成り儀有之外ハ、其節相改御稱號爲名乗申間敷外、

但當時、御目見以下并陪臣・浪人に亦筋目有之、御稱號名乘來り者可爲只今迄之通外、

右之通向くに可被相達外、

〔朱〕
「明和四年」五月

松平右京大夫殿御渡り御書附寫壹通相達外間、被得其意無遲滯順達、留より池田筑後守方に可被相返外、以上、

五月十九日

大目付

松平薩摩守

右留守居

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月晦日増上寺

御靈前、御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及、上聞外、恐々謹言、

〔朱〕
「明和四年」五月廿二日

松平右京大夫

松平薩摩守殿

逃參者共求麻に懸合之上、何分致治定外節御届筋相決、

於江戸被差出外迄者間亦有之積る外間、其内御内沙汰

申出置外方可然外ハ、於江戸被致吟味、公邊向御模樣

次第被相計外様可被仰付哉之旨、別紙之通御國許より申

來外付達、貴聞外處、暫須木に迎來外迄に亦及御届儀

外ハ、其通に亦可有之哉、左様無之求麻に懸合之上、愈

御領内に被差置外付御届有之儀に外ハ、未相決事外間、

於江戸御内沙汰に亦不及善外、然共猶又於江戸致吟味、

御成合宜様可申越旨被、仰出外間、何分に亦申談可被致

首尾外、別紙貳通者逃參者一卷付先達外御中途に申來候

付、是又爲御見合相添差越外、以上、

〔采〕
「明和四年」五月廿五日

高橋此面

鳴津左中殿

樺山左京殿

〔采〕
「御返答」

本文御國元より被申越り問合書之趣被達 貴聞り處、於
爰元致吟味、何分ニ爰可致首尾旨被 仰出り段被申越
致承知り、依之御留守居ハ吟味申渡り處、當三月爲致逃
散儀り得者

公邊ハ相聞得居り事爰難計、自然御尋表有之ハ上被仰出
外ハ者御不都合有之答ハ問、壹通り御届被仰出方ニ可有
之哉之旨申出外付、一通之御内沙汰被仰出置方可宜と申
談、御留守居有川勇馬を以相良源次郎様御留守居ハ右一
件爲致内談り處、彼御方より表勇馬方迄段々掛合之上、
弥御届可被仰出外、右近將監様御事彼御方御間柄之故、
御届書被得御内見外上、別紙之通御届被 仰出答之段申
出外付、此御方御届之儀表別紙之通勇馬名前相認、先月
廿九日御用番松平右近將監様ハ、御取次一色新左衛門ニ
差出外處、被受取置外旨申出外、別紙御届書寫壹通相

添此段申越外條可被達 貴聞り、先達ハ御中途ハ其元よ
り被差越外問合書貳通相返、此旨及御返答外、已上、

七月六日

島津左中

鳴津 仲殿

高橋此面殿

〔本文書ハ三七八号文書ノ行間朱書ナリ〕

380

全上

正文在文庫

御馬鬃毛一疋

〔采〕
「明和四年」

381

重豪公御譜中

今茲夏六月

大家修二

〔徳川家重〕
惇信院殿七回忌法事於増上寺、於レ是十三日重遣ニ用人伊

集院伊膳久郷一獻ニ納香奠銀十枚一拜焉、

382

全上

正文在文庫

一貝桶 一對

松平薩摩守

村梨子地若松唐草葵御紋并裏菊紋散シ覆唐織葵御紋

并裏菊紋

日覆猩々緋葵御紋并裏菊紋

同人妻

一長文箱 三對

内黒塗葵御紋并裏菊紋散シ一對

村梨子地若松唐草葵御紋并裏菊紋散シ一對

黒塗蒔繪 一對

(京極宮上女) 壽賀宮婚禮ニ付右之通

御臺様ニ獻上可被致り、尤時節之儀未追可相達り、

右御道具御細工所ニ出來之事り間、委細一色安藝守

御細工頭可被承合り、

(采) 「明和四年」

六月

重豪公御譜中

同年六月十六日修(重年)圓徳院殿十三年忌法事於福昌寺五

日自十二日至十六日、十二日以島津播磨久敦、十四日島津李久峯

爲二代參、同夜頓寫以島津玄蕃貴澄一代之、十六日以

嶋津大學久尚爲二代參、又有滿散寄合之式、使島津久敦代ニ余焉、

○同月二十日

大家修(藤川吉忠)

有徳院殿十七回忌法事於東叡山、於是二十一日重豪

遣用人佐久間九右衛門盛邦獻ニ納香燐銀十枚拜焉、

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同り、益御安全御儀

り間可御心易り、隨り琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・

赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之り、各申談遂披露

り處一段之御仕合り、恐々謹言、

(采) 「明和四年」

七月二日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見り、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同り、益御安全御

儀ハ間可御心易ハ、隨テ琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

〔采〕
「明和四年」
七月二日

板倉佐渡守
勝清判

松平薩摩守殿

全上

正文在文庫

芳牒披見、海陸無難歸國珍重思給ハ、此邊無吳事ハ、尚期後音ハ也、

七月四日

〔近衛内筋〕
〔花押 No.1〕

薩摩中將とのハ

387
重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔采〕
「明和四年」
七月六日

阿部伊豫守
正右判

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

松平右京大夫
輝高判
松平右近將監
武元判

388

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

〔采〕
「明和四年」
七月六日

板倉佐渡守
勝清判

松平薩摩守殿

389

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意ハ、然者五月十一日夜御曲輪内出火之處、早速鎮ハ段被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及上聞ハ、恐々謹言、

〔采〕
「明和四年」
七月九日

松平周防守
康福判

松平薩摩守殿

390

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得
其意外、然者五月十一日夜御曲輪内出火之處、早速鎮候
段被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

〔宋〕

七月九日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

391

重豪公御譜中

扣正文在家老座

薩摩國鹿兒島城下東口番所通良方外東北之間、土居六ヶ
所、當五月廿六日大雨之節崩外付、如元修補申付度奉
願外、以上、

〔宋〕

「明和四年」

七月十一日

松平薩摩守

392

全上

〔繪圖面書記被差出外御願書〕

薩摩國鹿兒島城下土居當五月廿六日大雨之節崩候覺

東口番所通良方外東北之間土居六ヶ所崩申候、

右朱引之通崩外付、如元修補申付度奉願候、以上、

明和四丁亥年七月十一日 松平薩摩守御書判

393

重豪公御譜中

正文在文庫

今度

悖信院様七回御忌御法事御執行付、以使者御香奠被獻
之外、於増上寺奉納之事外、右之趣及言上外、恐々謹言、

〔宋〕

「明和四年」七月十二日

阿部伊豫守

正右判

松平薩摩守殿

394

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

相良源次郎内米良七郎左衛門家來、源次郎支配米良

〔副將〕

主膳領分、致居住外者男女百七拾人、私領日向國諸縣郡

之内須木と申所、當三月十九日より同四月十五日迄追

〔書面之逃散者共相良源次郎方引渡候、尤源次郎方引渡候者及縣勘候
調度難計、無難之取扱難致模様之由候間、囚人之取扱ニ致し候様可被致候〕

罷越、此方を頼來由申外付、源次郎家來私家來共對談

之上、致歸參外様及再三申聞外得共、歸郷之心底毛頭無

之旨申通、今以得心不仕外、依之須木之内は木屋相調右

之者共纏置、飯料等所持不仕外付不飢様申付置外、如何

相心得可申哉奉伺候、以上、

〔宋〕「明和四年」 七月十三日 松平薩摩守

〔宋〕「右之通御付紙を以被仰渡外付、於江戸御留守居を以日積考之上御請相濟外事」

395 扣正文在右筆所

私領内江致逃散外相良源次郎内米良七郎左衛門家來共致所持外鐵炮并刀大小之儀、此方江召置外者可相渡旨申外、〔宋〕御付紙 別紙相達候通因人之取扱、〔宋〕改七相渡候者、刀大小取上候儀可被致候一 鐵炮之儀考預置、刀大小考其儘差置、番人等附置外、

右刀大小之儀如何可仕哉、被成御差圖可被下外、以上、

〔宋〕「明和四年」 七月十三日 松平薩摩守

〔宋〕「右之通御付紙を以被仰渡外付、於江戸御留守居を以日積考之上御請相濟外事」

396 重豪公御譜中

正文在文庫

今度

〔徳川吉宗〕有徳院様十七回御忌御法事御執行付外、以使者御香爨被獻之外、於東叡山奉納之事外、右之趣及言上候、恐々謹

言、

〔宋〕「明和四年」 七月廿日 松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

397 重豪公御譜中

正文在文庫

國許到着御禮之使者小松仙十郎、明廿八日五時御城江可差出外、且又自分之御禮及可申上外之間、可存其趣外、以上、

〔宋〕「明和四年」 七月廿七日 松 周防

松平薩摩守殿 留守居

398 全上

國許到着御禮之使者小松仙十郎、明日四時御城江可差出外、以上、

〔宋〕「明和四年」 八月四日 阿 伊豫

松平薩摩守殿 留守居

全上

小松仙十郎

右明日九時我等宅口可差出外、以上、

〔宋〕
「明和四年」

八月四日

板 佐渡

松平薩摩守殿

留守居

全上

正文在文庫

御札致拜見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤之事外、

將又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下、從

大納言様表拜領物有之、重疊難有由得其意存外、六月六

日國許到着付為御禮、以小松仙十郎目錄之通被獻之外、

右之趣致承知外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和四年」

八月四日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

全上

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下之、從

大納言様表拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

付為御禮、以小松仙十郎如目錄被獻之外、遂披露外處

御喜色之御事外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和四年」

八月四日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

為八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「明和四年」

八月四日

阿部伊豫守

正右判

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之、遂披露之、處一段之御仕合、恐々謹言、

〔朱〕
「明和四年」
八月四日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將

又今度御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御馬被下、從

大納言様表拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

付、爲御禮、以小松仙十郎琉球芭蕉布二十端并御樽肴被

獻之、遂披露候之處

御前被召出之、入念、段御喜色之御事、恐々謹言、

〔朱〕
「明和四年」
八月五日

阿部伊豫守

正右判

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

悼信院様七回御忌御法事於増上寺御執行相濟、段被承

之、恐悦旨尤、依之被差越使者、紙面之趣各申談及

上聞、恐々謹言、

〔朱〕
「明和四年」

八月十八日

阿部伊豫守

正右判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

以上

薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外東北之間土居六ヶ所崩、付、修補之事繪圖朱引之趣得其意外、願之通如元可被申付、恐々謹言、

白木御文書五番箱^{十四}中

寫

明和四亥 八月廿一日

阿部伊豫守 正右判

松平周防守 康福判

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見^ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有徳院様十七回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月廿

日 御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^ハ、紙面之趣

各申談及 上聞^ハ、恐々謹言、

^(采) 一明和四年[」] 八月廿七日

阿部伊豫守

正右判

松平薩摩守殿

白木御文書五番箱^{四十}中

寫

^(忠紀、越前島津家) 嶋津壯之助殿家來

肥後 善助

梅元勘左衛門

中村鐵五郎

右壯之助殿儀明廿八日繼目之御禮名代を以被申上^ハ、其

節家來三人 御目見被仰付^ハ付、三家之者差支、右勘左

衛門・鐵五郎儀差次三家之者故、御目見被仰付被下度

旨被相願^ハ、依之右三人於御書院御太刀進上^ニ、善助

儀先格之通脇差帶、勘左衛門・鐵五郎儀若脇差不帶、

御目見被 仰付^ハ、

右之通奏者番・御記錄奉行・御目附[」]可申渡^ハ、

八月廿七日

^(持久中) 織部

^{右包紙ニ朱ニテ四十}

明和四年亥八月廿八日小林中太兵衛を御取次[」]て被成御渡、五

番箱ニ納^ハ事、郡山主右衛門存[」]下[」]アリ

加治木家跡 ^(巻温、今和泉巻)
嶋津因幡殿

右若先年家來 御目見被仰付候節、差次三家之者役人之

場相勤_レ故、被得差圖趣有之、御太刀進上_ニの脇差帶

御目見被仰付_レ、然共延享三年寅四月御一門之家來格式

被相安置_レ通、三家外之者何_レ之付、御目見被仰付_レ節

者、向後脇差不帶、御目見可被仰付_レ、

右之通被相心得_レ様相良彌一兵衛・嶋津登_レ申渡、御

記錄奉行_レも可申聞置_レ、

八月

織部

上包_ニ左ノ如

加治木家跡・嶋津因幡殿家來三家外之者、脇差不帶、御目見被

仰付_レ儀_ニ付、織部殿_レ被仰渡_レ御書付一通、右明和四年亥九

月三日大野多宮取次_ニ被成御渡、五番箱_ニ納置_レ事

朱力_キ 四十一 市來瀬兵衛

410 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤_レ、將

又今度板倉佐渡守連判之列被 仰付、

大納言様_レ被爲附_レ段被承之、珍重由得其意_レ、紙面之

趣各申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

(奉)「明和四年」

九月六日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

411 全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤_レ、將

又今度板倉佐渡守連判之列被 仰付、

大納言様_レ被爲附_レ段被承之、珍重由得其意_レ、紙面之趣

大納言様_レ及言上_レ、恐_レ謹言、

(奉)「明和四年」

九月六日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

412 全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之_レ、益御勇健御儀_レ間

可御心易_レ、隨_レ干鱈殘魚一箱被獻之_レ、各申談遂披露

_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(奉)「明和四年」

九月六日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

413

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀、間

可御心易、隨、手鱈殘魚一箱被獻之、遂披露之、處

一段之御仕合、恐、謹言、

〔宋〕
「明和四年」

九月六日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

414

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平周防守可

述外也、

〔宋〕
「明和四年」

九月七日



薩摩
中將殿

415

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露

之處一段之御仕合、恐、謹言、

〔宋〕
「明和四年」

九月七日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

416

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐、悦旨尤、將

又暑氣爲御尋、妻女拜領物有之、難有由得其意外、紙面

之趣各一覽之事、恐、謹言、

〔宋〕
「明和四年」

九月九日

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

417

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐、悦旨尤、將

又暑氣爲御尋、從

公方様妻女に拜領物有之、難有由得其意外、紙面之趣令

承知外、恐、謹言、

〔宋〕
「明和四年」

九月九日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

418 重豪公御譜中

扣正文在家老座

御奉書致拜見候、薩摩國鹿兒嶋城下東口番所通良方外東
北之間土居六ヶ所崩外付、修補之事繪圖朱引之通奉願
外處、如元可申付旨被仰下奉得其意候、恐惶、

〔采〕
〔明和四年〕 九月廿一日 松平薩摩守

松平右近將監様

松平右京大夫様

松平周防守様

阿部伊豫守様

人々

419 重豪公御譜中

正文在川上源十郎

加冠

宜爲

明和四亥 九月廿八日



重豪公墨印

源十郎